

183. 5-Ta78ㄅ



1200500727949



始





183.5-Ta78ㄅ



1200500727949

182.5

8

彌陀經の諸問題

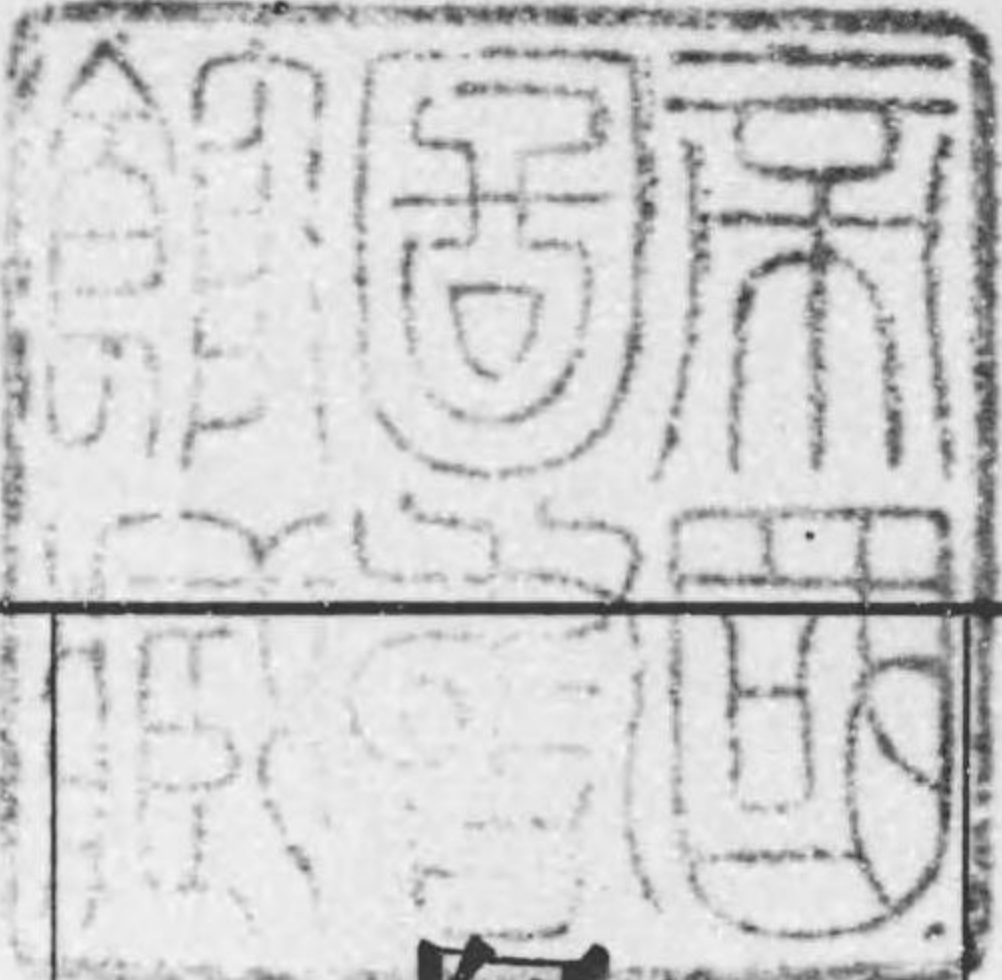
直 翰 晃 著



1835  
TA78

玉置 韜 晃 著

阿彌陀經の諸問題



龍谷大學出版部

f



## 序

緒言をもかねて

人間生活の事實が牢固として嚴存するかぎり、私たちは生とか死とかいつた事實のうち生きてゐる。そして、何人もその事實からのがれる術を知らぬであらう。近代科學の精髓をもつてしても、それは生死の前にはあまりにも無力である。ことに死が私たちの目前に迫つたその瞬間ですら、神を否定し佛を拒むことが可能だらうか、而も死の後に限りなくうちつゞくであらう未知の世界を考へるとき、如何なる科學者もなほ平然たり得るであらうか、もとより、死の恐怖から、あながちに宗教が生みだされたものとはいはない。

但し、科學萬能論者にしても、宗教否定論者にしても、嚴然たる死の前に於て、なほ自己の死を單に物理的乃至化學的一變化に過ぎないものと放任できるであらうか、いふまでもなく心臓の靜止は物理的變化でもあらう。血肉の腐敗變化はたしかに一の化學的變化でもあらう。けれども私たちの生老病死に對する疑問はい



つまでも宿題としてのこされる。

げに近代科學の發達は驚嘆と慶賀に價する時代を現出してゐる。かつては人間の不可能とされた事件も、絶えざる科學者の精進によつて可能とされるに至つた。だが、それは、單に物それ自體の變化と利用との發見にすぎないのではなからうか、だから、私たちの生命の問題には何等の考證ともならずまたなんらの貢獻もないかも知れぬ。ゆゑに、私たちの生命は私自身にとつて、永遠悠久の謎である。

人類學者、科學者の研究はその立場や目的から考へると、その研究がすゝめばすゝむほど、いよいよ私の生命の問題から遠ざかり、ますます、迷宮に閉されやうとしてゐる。だから、いかに尊い科學者でも、自身の生命の問題については、自分たちの力の足らなさにあきれることだらう。

大體、人類がこの神祕に屬する生命の謎を解かうと企てはかるそのことが既に大きな自然への反逆であるかも知れぬ。すべからく私たちは神祕にして偉大なる生命の謎を解かうとすることをやめるべきである。それは不可能であり、また徒勞であり、また無意味であるからである。

然るに宗教は、率直に私たちに私自身の生命の眞髓を把握せしめる。科學によ

つて虚疎と、あつけなさをかこつたものに、新に眞の生命を憧憬せしめずにはおかぬものは宗教である。眞の宗教を正しく認識し信仰するところに絶へざる人生の幸福があり、崇高なる生の充實がある。

宗教は三世に徹貫して嚴存すべきものである。宗教なき國民は禍である。人間の宗教的精神の衰滅は人間をしてたゞ野獸の氣分におとし入れるものだらう。主張もなく、眞實もなく、義理人情もなく、變節改論を處世の要諦とする境遇には眞の宗教は存在しない。この意味に於ていかなる國民といへども宗教的良心を養ひ置かねばならぬ。完全な宗教の生ひ立つ地盤をつくることは先決問題であらねばならぬ。

かうした平素の所感が、おこがましくも阿彌陀經諸問題の研究をかりたてたものである。

讀誦經典に尊い意義を認める私にとつては、讀誦經典として、もつとも尊いこの阿彌陀經、また私にはもつともなつかしい阿彌陀經、佛典の中、類例のすくない短篇小經、悠久二千六百年來祖國を護りおほせた私たちの祖先が朝夕佛前にうやうやしく讀誦し來つた阿彌陀經、といつたやうないろいろの深い味をもつた



阿彌陀經の諸問題は是非解かねばならぬ私への課題であつた。

たまたま、安居の講筵に阿彌陀經講述の尊き命を蒙り、恐懼おくあたはざるところである。いまさら、平素の教養のたりなかつたことを慚愧しながら、尊命を汚すことにひたすら恐縮の外はない。それと同時に、日頃、課題として氣にかゝつてゐた阿彌陀經であり、この尊い機會を與へられたことであり、せめてはその外觀なりとも窺はしていただきたいとおこがましいことではあるが、この小篇を草したものである。この小篇は全くの思ひつきと、獨斷と妄斷とに満たされてゐることをおわび申し上げたいと思つてゐる。

既に諸賢の氣付かれたやうに、先哲先覺の指導の外になんら新味もない、またあつてはならず、あらう筈もない。たゞ、永い生命をもちつけて來た本經の支那日本に於ける諸註疏を、一度書誌學的に見てゆきたいものだとの念願から、かうしたかたやぶりの阿彌陀經觀となつたものである。

さて、それでは書誌學とはどうした學かといふと、この學に就いての判然した知識を與へてくれる記録を發見することは中々困難であるが、壽岳文章氏はその著『書誌學とは何か』に興味ある論述を試みてゐられる。又小見山壽海氏は『書誌

學』に最も簡明に且つ組織的に述べられてゐる。仍てそれらの著述を參考として、書誌學の如何なるものであるかの概要を述べておきたい。

書誌學の語は英語の Bibliography の譯であるが、これは又希臘語の Bibliographia から出た言葉だといはれる。この原語は最初に「書物を書くこと」の意に用ひられたのであるが、それが轉じて「書物に就いて書くこと」に變り、竟には「書物に就いて書かれた物」となつた。但し「書物に就いて書かれた物」といふのは廣義では圖書に關する科學(The science of books)であり、狹義では書目(Bibliographies)である。今書誌學といふのは、前者に相當する。尤も書誌學關係の諸名辭としては、藝文誌、經籍誌、經籍考、文籍誌、書籍誌、書籍考、書籍學、圖書學、書志、書史學、關係文獻學、目錄學、書目學、圖書解題學等があるが、何れも一長一短があつて、矢張り書誌學の方が、字義的にも、亦實質的にも極めて適切妥當なようである。

「書誌學とは圖書に關する科學である」と云つただけでは餘りに抽象的であるが、書誌學は圖書そのものを直接的研究對象とするのであるから、圖書の取扱つてゐる内容を研究の直接的對象とするのでないが、その研究が圖書の取扱つてゐる内容に密接な影響を與へることは勿論である。然らば書誌學の研究對象である圖書



書そのものゝもつ事象には如何なるものがあるかと云へば、それは研究者のもつ興味や關心等によつて多岐多端に存在し得るが、『大英百科全書』の書誌學の項に取扱はれてゐる事項は、

(一)圖書對校鑑定の技術、(二)圖書の解題、(三)書目の編纂、(四)書誌の書誌である。(一)の圖書對校鑑定術といふのは、古書の起源を發見し、疑點に對して考證をなし。若し其の圖書にして不完全のものであつたならば、其の不完全の點を確實にし、若し完全のものであつたならば、更に初版又は自筆の状態に適合するか否かを究め、その上に眞偽の鑑定をなすべきことなど重なるものであり、(二)の圖書の解題とは、或る一の圖書に就いて其の歴史を究め、筆寫の上から印刷の上から其の筆寫、出版などの様式及び年月等これに附隨する種々の事項を検して、(1)書名及び著者を確定すること、(2)筆者、出版者を含む、(3)圖書の形狀及び形式、頁數、活字の種類、舊藏書印などを検すること、必要なる其の他の事項、此の三項を完成すればよいのである。(三)の書目の編纂といふのは、圖書の内容の細目をよく檢して、之に關する總ての事を研究し、且、書物の配列に就いて研究する事柄であり、(四)の書誌の書誌とは、讀んで字の如く、書目の書目で、即ち洋の東西を問はず、古寫本、石版本の

目錄を製作すること及び是れ等に關する一般の研究が之に屬する事となるのである。(小見山氏「書誌學」に據る)

次に小見山氏は書誌學を大別して綜觀的書誌學と、分觀的書誌學との二とせられてゐる。その綜觀的書誌學に於ては、圖書そのものゝ全體としての起原、發達よりして其將來までをも論及するのをその職分とし、分觀的書誌學にあつては、個々の圖書に就いて記載するのが其の役目であるとなす。詳細については小見山壽海著『書誌學』を見られたし。

かうした意味が書誌學といはれるのだから、私のこの小篇は、或はこの書誌學的見方に當るかも知れぬ。

更にかゝる小篇が、祖國日本の非常時局に於て、如何なる役割をはたし得るであらうかと思ひ及んだときたゞ忸怩たるものがあるだけである。

最後に、かうしたさゝやかな小篇の出版について、理解と同情をもたれた出版部の當事者の方々、また編輯にあつて御助力をいただいた圖書館員の方々に衷心より感謝をさゝげたい。



昭和十七年六月一日

玉置 韜 晃

序 篇

阿彌陀經の諸問題 目次

|              |    |
|--------------|----|
| 第一章 梵本と譯本    | 一  |
| 一 現存諸本       | 一  |
| 二 梵本         | 二  |
| 三 譯本         | 四  |
| 四 羅什玄奘年表     | 一〇 |
| 第二章 本經の異本    | 一六 |
| 一 襄陽石經       | 一六 |
| 二 諸本異同       | 二六 |
| 第三章 翻譯考      | 三〇 |
| 第四章 諸經錄の本經題號 | 三六 |
| 第五章 本經疏註鈔一覽  | 四七 |
| 目次           | 一  |



一 支那撰述本經現存諸註疏……………五四

二 支那朝鮮撰述本經古註疏逸本……………五九

三 日本各宗本經諸註鈔……………五九

四 淨土眞宗學匠本經註錄……………六二

五 本經及一般淨土教關係論文……………六八

本篇

第一章 支那撰述諸註疏概觀……………七五

一 阿彌陀經義記……………智者…源信著略記概觀……………七五

二 阿彌陀經疏一疏—通讚…大乘基……………八三

三 阿彌陀經義述……………慧淨……………九〇

四 阿彌陀經疏……………元曉……………九二

五 阿彌陀經疏……………智圓……………九四

六 阿彌陀經義疏……………元照……………九六

附 阿彌陀經聞持記……………戒度……………九六

七 阿彌陀經疏鈔……………株宏……………一〇一

八 阿彌陀經要解……………智旭……………一〇八

九 法事讚……………善導……………一二五

第二章 元祖高祖一遍の小經觀……………一四一

一 元祖小經觀……………一四一

二 高祖小經觀……………一四四

三 一遍小經觀……………一四七

第三章 日本各宗本經諸註鈔概觀……………一四八

一 阿彌陀經私集鈔……………堯惠……………一四八

二 阿彌陀經直談要註記……………聖聰……………一五三

三 阿彌陀經祕直談鈔……………源譽……………一五四

四 阿彌陀經疏鈔管解……………教道……………一五九

五 阿彌陀經直解……………貞準……………一五七

六 阿彌陀經略解指要鈔……………貞準……………一五八

七 阿彌陀經勸持鈔……………湛澄……………一六一



八 阿彌陀經要解百川記……………秀雲……………一六二

九 稱讚淨土佛攝受經疏……………梁道……………一六三

一〇 阿彌陀經合讚……………眞阿……………一六四

一一 阿彌陀經要解俗談……………光謙……………一六五

一二 阿彌陀經略纂……………大我……………一六六

一三 阿彌陀經要解一心鈔……………慈等……………一六八

一四 阿彌陀經訓讀記……………著者未詳……………一七一

第四章 各宗の阿彌陀佛觀……………一七二

一 法相宗の阿彌陀佛觀……………一七三

二 三論宗の阿彌陀佛觀……………一七四

三 華嚴宗の阿彌陀佛觀……………一七四

四 天台宗の阿彌陀佛觀……………一七五

五 禪宗の阿彌陀佛觀……………一七七

六 眞言宗の阿彌陀佛觀……………一七九

七 融通念佛宗の阿彌陀佛觀……………一八〇

第五章 淨土眞宗學匠本經諸註錄概観……………一八六

八 淨土門の阿彌陀佛觀……………銀西、西山、時宗、眞宗……………一八一

一 阿彌陀經義疏記引文……………峻諦……………一八六

二 阿彌陀經義要……………惠空……………一八七

三 阿彌陀經聞記……………惠空……………一九〇

四 稱讚淨土經駕說……………月峯……………一九一

五 阿彌陀經聖淨決……………法霖……………一九三

六 阿彌陀經陳善錄……………僧樸……………一九六

七 法事讚甄解……………僧樸……………一九七

八 阿彌陀經佩觿記……………泰巖……………一九八

九 阿彌陀經略讚……………慧然……………一九九

一〇 阿彌陀經展持鈔……………智暹……………二〇〇

一一 阿彌陀經淨眼録……………義教……………二〇一

一二 阿彌陀經弊帚録……………慧鑑……………二〇三

一三 阿彌陀經甲午記……………慧雲……………二〇五



一四 阿彌陀經明煥記……………慧忍……………二〇六

一五 阿彌陀經受信錄……………僧鎔……………二〇七

一六 阿彌陀經護念錄……………慧琳……………二〇九

一七 阿彌陀經講錄……………功存……………二一〇

一八 阿彌陀經天明錄……………智洞……………二一一

一九 阿彌陀經增明記……………道隱……………二二三

二〇 阿彌陀經講義……………深勵……………二二五

二一 阿彌陀經紀聞……………履善……………二二五

二二 修刪阿彌陀經論……………履善……………二二三

二三 非修刪阿彌陀經……………履善……………二二三

二四 阿彌陀經舒舌箋……………道振……………二三八

二五 阿彌陀經丁丑錄……………芳英……………二三九

二六 阿彌陀經丁亥錄……………法海……………二四〇

二七 阿彌陀經聞書……………性海……………二四三

二八 阿彌陀經筆記……………僧朗……………二四三

結 篇

二九 阿彌陀經松江錄……………月珠……………二四四

三〇 阿彌陀經聽記……………行照……………二四五

三一 阿彌陀經聽記……………善讓……………二五六

三二 阿彌陀經講義……………善海……………二五六

一 教 興 論……………二四〇

二 宗 體 論 附、隱顯論……………二五〇

三 一代結經論 附、無問自說……………二六四

四 依 正 論……………二七六

一 依 報 論……………二七八

二 正 報 論……………二八四

五 正 因 論……………二八九

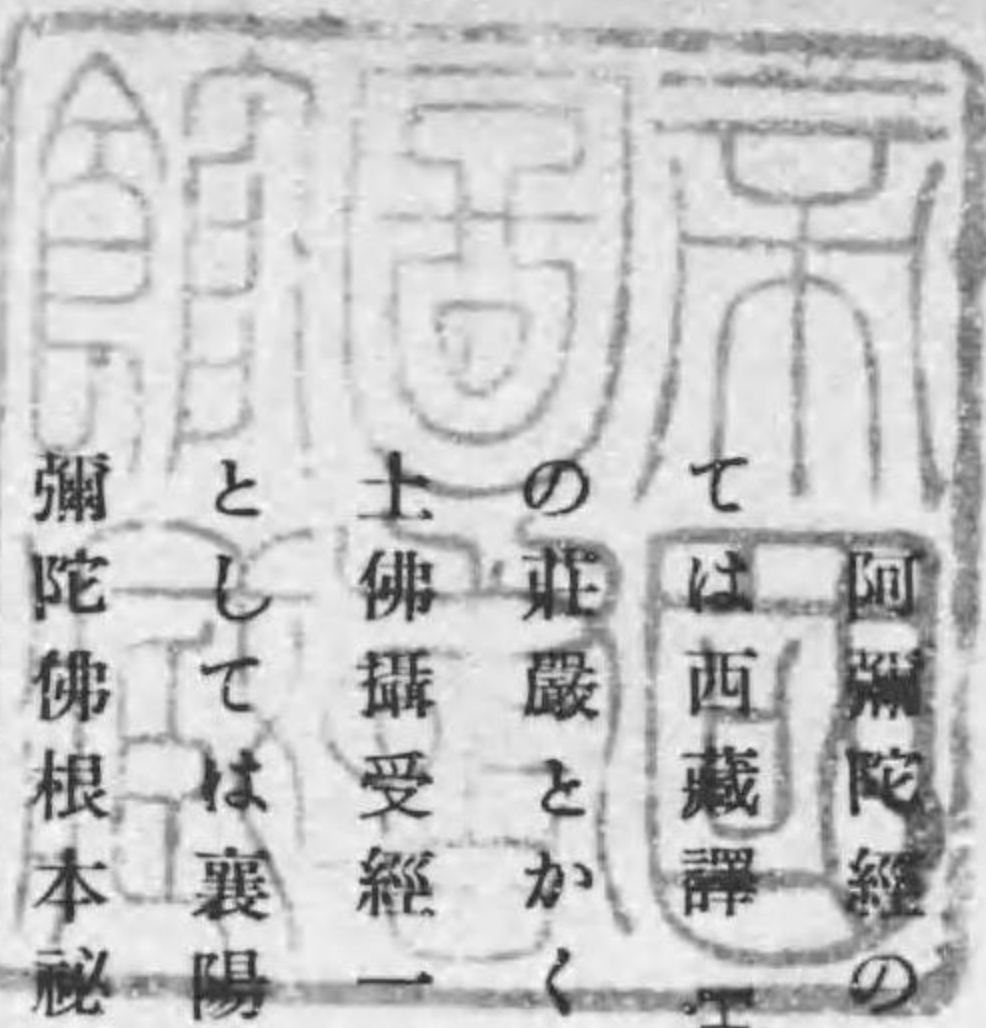
目 次 終



# 序 篇

## 第一章 梵本と譯本

### 一 現存諸本



阿彌陀經の原存梵本としては *Sukhāvati-vyūha-nāma mahāyāna sūtra* があり、譯本としては西藏譯 *Hphags-pa bde-ba-can-gyi bkod-pa shes-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo.* (聖極樂の莊嚴とかく名づけられる、大乘の經) 羅什漢譯佛說阿彌陀經一卷、玄奘漢譯稱讚淨土佛攝受經一卷及び求那跋陀羅譯小無量壽經の斷片、觀念法門に引用があり、異本としては襄陽石刻文阿彌陀經、偽本としては曹魏菩提流支譯と傳へらる、佛說阿彌陀佛根本祕密神呪經がある。

西藏譯の所依本が何であつたか。如何にその内容が現存梵本と類似してゐても直ちに現存西藏譯と現存梵本とを近づけてはならない。この兩本が縦ひ同一系統のものであつても、もつと具體的に梵本が西藏譯の所依本であつたにしても、



その所依本及び西藏譯本はある時代の梵本及び西藏譯本であつて現存の梵本及び西藏本ではない。現存の梵本には其後の傳承間の増廣、加筆、竄入、脱文等を豫想しなければならぬ。羅什譯に於ても同様である。玄奘譯に至つてはその所依本は現存梵本とはむしろ系統を異にせるものと考へねばならぬ。少くとも其現形に於ては明かに他本の内容と差異がある。異本としての石刻文には石刻後の變轉はあり得ない。現にその内容に於て鮮明なる増廣部を示してゐる。石刻の際の増廣か、石刻文の所依本が已に増廣せられたるものであつたか、又は所依本に於ける註釋部が本文と一緒に一部石刻されたものか何れかである。

## 二 梵 本

諸本の中まづ第一に注意すべきは梵本である。阿彌陀經の梵本は紀元第九世紀平安朝の初めに圓仁によつて『入唐求法目錄』には『梵漢兩字阿彌陀經』一卷とあり、又『大師在唐送集錄』には『梵漢對譯阿彌陀經』一卷とある。これはともに大師の梵本蒐集三十部中の一であるから、梵本阿彌陀經傳來の最初だらう。已に我國に請來せられたと傳へられてゐる。それが幾度か幾人かに傳寫せられてその寫

本が處々に散在したらしい。梵篋三本一帖に於ける慈雲の跋文は有三梵本として所謂文龜年本、建久年本、承久年本の名をあげてゐるが、文龜年本(一一六一—一二一六三)は石山所藏の故を以て又の名を石山本と呼ばれ、建久年本(一一八五)は和州法宣律師の手より得たものなるが故に和州本、承久年本(一一八八)は信州佐久郡より得たるものなるが故に信州本と名づけられる。これらの寫本によつて慈雲は天明三年に梵篋三本一帖を著した。

刊本として我國に出版せられたものは安永二年(二四三三)紀州根來の學僧常明の出版にかゝる梵漢阿彌陀經一冊、即ち常明版、河内の國高貴寺の飲光尊者が阿彌陀經と普賢行願讚經と般若經と三本合刻出版せる梵篋三本一帖、及び飲光の門入法護の編纂にかゝり沙門諦濡の校訂にかゝる梵文阿彌陀經諸譯互證一冊、更に法護述、諦濡、典壽同校の梵文阿彌陀經義釋四冊の四種である。梵文阿彌陀經諸譯互證は梵文に片假名を以て其音を附し、右行に漢文の直譯語を添附し、左には羅什譯と玄奘譯とを對照せしめたもの、梵文阿彌陀經義釋の方は梵文の左行に漢字を以て音を寫し、其次行以下に漢文の直譯を添へ、委細に文法と字義とを解説したるものである。



西洋にては日本より寄贈したる常明版をマックスミユラー教授が校正英譯し、これをロンドンの亞細亞學會雜誌 (Journal of the Royal Asiatic Society) に發表し、後、東方聖書第四十九卷にをさめた。梵本が活版に附せられたのは明治十六年五月オックスフォードに於てである。

我が南條文雄博士は明治十八年梵文阿彌陀經音義兩譯として石版摸出本に添へて東京にて出版した。更に博士は明治四十一年佛說阿彌陀經梵文和譯支那二譯對照を作り、無量壽經の梵本和譯支那五譯對照と合して之を出版し、これと前後して阿滿得壽氏が舊本の梵文に羅馬字音譯を附し、悉曇阿彌陀經と題して校刊した。尙此等の外に英譯、漢二譯、日本譯、朝鮮譯を梵文と校合出版せる博文館本を見ることが出来る。但しこの書の梵字音寫には誤りが多い。

### 三 譯 本

次いで我々は現存諸譯本に就て一瞥しなければならぬ。

#### 第一本、西藏譯

西藏本はその巻首に梵藏兩語の經名を擧げてゐることより見て、梵本より直接

に譯せられたるものと思せられる。その各語の譯態より見てもこのことは首肯せられてよい。勿論西藏譯の所依梵本と現存の梵本とが同一系統のものであるかどうかはにはかに斷定出來ぬ。

かつて大谷大學の寺本教授は北清事變從軍の際明の神宗萬曆四十七年 (A.D. 一六一九) 所版の阿彌陀經を入手、明治四十三年六月の無盡燈誌 (第十五卷第六號) にその和譯を發表せられた。この萬曆本は所々に羅什譯阿彌陀經より引用せるものと思しき漢譯を引用し最後に呪文を附してある。これは吾人の憶測よりすれば、現在續藏第一輯第三套第五冊に見ゆる佛說阿彌陀佛根本祕密神呪經と同一系統のものであらうと思ふ。神呪經は曹魏菩提流支譯となつてゐるが譯語は全く羅什譯と符合し、只修因段の次下に、

又舍利弗阿彌陀佛有根本祕密陀羅尼神呪是名拔一切業障根本得生極樂淨土神呪即說呪曰

南無阿彌多婆夜<sup>多曷切二</sup>他伽<sup>都俄切二</sup>夜<sup>地途賣切三</sup>夜他阿彌利<sup>上聲四</sup>都婆毗阿彌利<sup>六</sup>悉耽婆毗<sup>七</sup>阿彌利<sup>八</sup>毗迦蘭<sup>九</sup>阿彌利<sup>十</sup>毗迦蘭<sup>十一</sup>彌膩<sup>十二</sup>伽伽那<sup>十三</sup>多迦<sup>十四</sup>隸<sup>十五</sup>莎婆訶

十佛言若有善男子善女人能誦此呪者阿彌陀佛常住其頂日夜擁護無令怨家而得



其便現世常得安穩臨命終時任運往生極樂國土  
 又舍利弗阿彌陀佛名號具足無量無邊不可思議甚深祕密殊勝微妙無上功德所以  
 者何阿彌陀佛三字中有十方三世一切諸佛一切諸菩薩聲聞阿羅漢一切諸經陀羅  
 尼神呪無量行法是故彼佛名號即是爲無上眞實至極大乘法即是爲無上殊勝清  
 淨了義妙行即是爲無上最勝微妙陀羅尼而說偈曰

阿字十方三世佛 彌字一切諸菩薩

陀字八萬諸聖教 三字之中是具足

舍利弗若有衆生聞說阿彌陀佛不可思議功德歡喜踊躍至心稱念深信不懈於現在  
 身受無比樂或轉貧賤獲得富貴或得果免宿業所追病患之苦或轉短命得壽延長或  
 怨家變恨得子孫繁榮身心安樂如意滿足如是功德不可稱計。

の文を餘計に挿入したるものに過ぎずこの挿入文中の呪文の箇所及び其後の四  
 十七字極樂國土の四字を除くは現に抜一切業障根本得生淨土神呪として大正藏  
 經第十二卷にも玄奘譯阿彌陀經の次に掲げられ求那跋陀羅譯とせられてある。  
 求那跋陀羅譯阿彌陀經に就ては後に述べるがこれに見ても菩提流支譯であると  
 いふことの僞擬なることが明白に知られるからこれを僞經として取扱ふことが

至當である。然るに西藏本の萬曆版は各處にこの僞譯と同じやうに羅什譯に依  
 つて引用し最後の呪文はその二句をのぞいて正しくかの神呪と符合する。今寺  
 本教授が譯訂したる和譯と教授の想定にかゝる梵文藏文は梵呪を韻譯したるも  
 のとこれにこの神呪とを對照せしめて見よう。

|            |                       |               |
|------------|-----------------------|---------------|
| 不死の光に歸命す、  | Namó mīṭhā bhāya      | 南無阿彌多婆夜哆      |
| 即ち不死の發生よ、  | Tad yathā amīto bhavē | 他哆夜哆地夜他阿彌利都婆毗 |
| 不死成就の存在よ、  | Amīta siddha-bhave    | 阿彌利哆悉耽婆毗      |
| 不死寂靜よ、     | Amīta viśrānte        | 阿彌利哆毗迦蘭諦      |
| 不死の境を、     | Amīta viśayantā       | 阿彌利哆毗迦蘭哆      |
| 幸福を生ずるものよ、 | Kṣema-Kara            | 伽彌膩           |
| クセ、クセ、ナー   | Kṣe-Kṣe-Nā            | 伽伽那           |
| 心の光焰よ、蘇婆訶。 | Citta-ivale-Svāhā     | 枳多迦隸莎婆訶       |

勿論萬曆版がこの僞經と如何なる關係にあるかの最後の斷定は將來の問題に  
 屬するが以上によつて大體萬曆本の性質が想定し得られるであらう。  
 更に寺本教授はこの萬曆本を北京赤字版本と對校して萬曆本の誤寫を正し、マ



ツクスミユラー、南條共刊の梵本、即ち常明版によつて明治十六年刊行の梵本と對校して譯訂をほどこしてこれに原文を添へ、近頃單行本として出版せられた。この譯は極く瑣細な點に於て脱文顛倒あるをまぬがれぬ。例へば各所に於ける大(chen-po)の字の脱落、無量壽と無量光との混同、及び已今當の正當なる順序を現已當に顛倒せしめたるが如き等である。

#### 第二本、羅什譯佛說阿彌陀經一卷

#### 第三本、玄奘譯稱讚淨土佛攝受經一卷

前者は普通一般に依用せらるゝもので東晋安帝元興元年二月(A. D. 402)の譯出にかゝり、後者は唐高宗永徽元年正月(A. D. 650)譯出のものであつて、前者に比較して著しい増廣を含んでゐる。羅什譯は梵本にはなはだしく接近してゐるから、従つて玄奘譯は梵本を去ること遠い。玄奘本は羅什本が文學的高踏的なるに對してむしろ註釋的傾向を有し、又梵本、羅什譯になき箇所、例へば佛國の功德莊嚴を説明してのち梵本、羅什譯ならば直ちに於如意云何にうつる場所に尙七十六字の餘文を有することや、他本が六方諸佛を羅列せる場所に十方諸佛を説ける等の増廣を見るのである。これらは玄奘自身の増廣か、玄奘譯の所依本に已にかゝ

る増廣が行はれてあつたか、又は玄奘譯の其後の傳承の間に増廣せられたものか、三つのうちの何れかであるが、その何れにせよ、増廣であることに於て變りは無い。

#### 第四本、求那跋陀羅譯

漢譯に於ける羅什、玄奘二譯のほか諸經錄は求那跋陀羅譯なるものを傳へてゐる。衆經目錄卷一(大正藏經第五十五卷一七頁)大唐內典錄卷四(同三五九頁)開元釋教錄卷五(同二八頁)には序の如く無量壽經一卷阿彌陀經、小無量壽經の名に於てこの第三譯の存在を明示してゐる。然し現在殆んど散佚しつくしたものであつて、たゞわづかに善導の觀念法門二十丁に六十一字のみを四紙阿彌陀經の名に於て傳へられてゐる。四紙阿彌陀經の名は玄奘譯の十紙阿彌陀經、羅什譯の五紙阿彌陀經の名に對して呼ばるゝ求那跋陀羅譯の異名である。今その全文をあぐれば次の如くである。

佛言若有男子女人或一日七日一心專念彌陀佛名其人命欲終時阿彌陀佛與諸聖衆自來迎接即得往生西方極樂世界釋迦佛言我見是利故說此言

さきに西藏譯萬曆本の箇所に於てあげた抜一切業障根本得生淨土神呪とこの箇所とがはたして同一系統のものであるかどうかは明かでない。同一系統のものでないと爲す方が穩當ではあるまいか。勿論かゝる斷片のみでは何等文獻的價



値を見出すことは出来ぬ。只第三譯がかつて存在せることのみ知るにとゞまる。更に尙我々は所謂襄陽石刻文に就て述ぶべきである。

#### 四 羅什、玄奘の年表

##### □ 鳩摩羅什 年表(望月信亨氏「佛教大年表」境野、黄洋氏「支那佛教精史」等参照)

西紀三四四 (一歳) 東晋康帝建元二年。龜茲國に生る。父は鳩摩炎。母は龜茲王妹と云ふ。

三五〇 (七歳) 母と共に出家し師に従つて經を受く。

三五二 (九歳) 母と共に罽賓國に往き槃頭達多に師事し雜藏、中阿含、長阿含等を受く。

三五五 (十二歳) 母と共に罽賓國を去る。途中沙勒國に於て阿毘曇六足諸論。増一阿含經等を誦し龜茲國に還る。

三六三 (二十歳) 王宮に受戒し、又毘摩羅叉に就て十誦律を學ぶ。

(年代不詳) 須利耶蘇摩に従ひ大乘を諮稟し、中百二論を誦す。  
(年代不詳) 龜茲帛純王の新寺に放光經を得て披讀す。

三八五 (四十二歳) 龜茲國秦將呂光の爲に滅ぼさる。羅什、呂光に率ひられて涼州に至る。

四〇一 (五十八歳) 弘始三年十二月秦主姚興に迎へられて長安に至る。興、什を待するに國師の禮を以てし甚だ優寵せらる。什請ふて西明閣

逍遙園に入り衆經を譯出す。仁王般若經(二卷)金剛般若經(一卷)譯出

四〇二 (五十九歳) 正月坐禪三昧經(三卷)譯出、二月阿彌陀經(一卷)譯出、三月賢劫經(七卷)譯出。十二月思益梵天所問經(四卷)。及び彌勒成佛經(一卷)を譯出。

四〇四 (六十一歳) 小品般若經(三十卷)百論(二卷)譯出。

四〇五 (六十二歳) 秦主姚興、逍遙園に赴き諸沙門を引見し、羅什の佛經を説くを聽く。

此年佛藏經(四卷)雜譬喻經(一卷)大智度論(百卷)菩薩藏經(三卷)稱揚諸佛功德經(三卷)千佛因緣經(一卷)を譯出。

四〇六 (六十三歳) 妙法蓮華經(七卷)維摩經(三卷)華手經(十卷)梵網經(二卷)等を譯出。



- 四〇七 (六十四歲) 坐禪三昧經を重校す。自在王經(二卷)を譯出。
- 四〇八 (六十五歲) 小品般若經(十卷)を譯出。
- 四〇九 (六十六歲) 中論(四卷)十二門論(一卷)を譯出。
- 四一二 (六十九歲) 成實論(二十卷)十住論(十卷)を譯出。
- 四一三 (七十歲) 晋、義熙九年(秦、弘始十五年)寂。

□ 玄奘三藏 年表(望月信亨氏「佛教大年表」等に據る)

- 西紀六〇〇 (一歲) 陳留に生る。
- 六一八 (十九歲) 長安に入り莊嚴寺に留る。
- 六二二 (二十三歲) 成都に於て受具す。
- 六二九 (三十歲) 伊吾を経て高昌國に來り麴文泰王の爲に仁王經を講ず。
- 六三〇 (三十一歲) 阿耨尼國を過ぎ龜茲國に至り其國の學匠木叉毘多と問辯す、それより大雪山を越えて迦濕彌羅國に入り王都闍耶因陀羅寺に止住す。
- 六三一 (三十二歲) 迦濕彌羅國闍耶因陀羅寺に於て俱舍論、順正理論、因明、聲

明等を學し又大乘僧毘成陀僧訶等と共に諸經論を攻竅す、亦其國王の援護により經論を書寫す。

- 六三二 (三十三歲) 迦濕彌羅國を去り半奴嗟國等を過ぎ磔迦國に停一月百論、廣百論等を學す、次で至那僕底國突舍薩那寺に詣し毘膩多臘婆に對法論等を受け其冬窣祿勤那國に至りて闍耶毘多に就て經部毘婆沙を學す。
- 六三三 (三十四歲) 窣祿勤那國より諸國を経て舍衛、迦毘羅、毘舍離等諸佛蹟を禮拜し摩揭陀國那爛陀寺に至り戒賢に就て瑜伽論等を學し順正、顯揚等の諸論を聽講し梵書を研鑽す。
- 六三八 (三十九歲) 北印度鉢伐多國に至る。
- 六三九 (四十歲) 鉢伐多國にありて正量部根本阿毘達磨等を學す。
- 六四〇 (四十一歲) 那爛陀寺に還る。
- 六四一 (四十二歲) 杖林山にて勝軍に就て唯識決擇論等を學し、瑜伽因明等の疑を問ふ。
- 六四二 (四十三歲) 戒賢の命により那爛陀寺に於て衆の爲に攝大乘論、唯識



決擇論を講ず。

六四三 (四十三歳) 此冬羯朱嚙祇羅國戒日王の大會に列し論主となりて大乘を稱揚す。鉢羅耶伽國を發して歸路に就く。途中諸聖跡を拜し大山を越へて觀貨羅の故地に入る。

六四四 (四十四歳) 干闥國に達し小乘薩婆多寺に止住して其國の僧衆の爲に瑜伽對法等の諸論を講ず。

六四五 (四十五歳) 勅を奉じて干闥國を發し佛舍利佛像、大小乘經律論五百二十夾、六百五十七部を賚し唐に歸る。

六四六 (四十六歳) 正月長安に還り、二月長安弘福寺に入り翻經を勅む。此年顯揚聖教論頌一卷、六門陀羅尼經等を譯す。

六四七 (四十七歳) 大乘五蘊論一卷、解深密經五卷等を譯出す。老子經を梵譯して東印度に送る。

六四八 (四十八歳) 天請問經一卷、瑜伽師地論一百卷等を譯出す。

六四九 (四十九歳) 般若心經一卷、攝大乘論本三卷、同世親釋論十卷、無性釋論十卷等を譯出す。

六五〇 (五十歳) 正月稱讚淨土經一卷を譯出す。瑜伽師地論釋一卷、其他諸經論を譯出す。

六五一 (五十一歳) 地藏十輪經十卷、其他の經論を譯出す。

六五二 (五十二歳) 阿毘達磨顯宗論四十卷等を譯す。

六五四 (五十四歳) 稱讚大乘功德經一卷、順正理論八十卷等を譯す。

六五六 (五十六歳) 十一面神呪心經一卷を譯す、唐中宗玄奘に就て剃髮す。

六五七 (五十七歳) 觀所緣々論一卷を譯す。

六五八 (五十八歳) 勅に依り西明寺に移る。入阿毘達磨論二卷を譯す。

六五九 (五十九歳) 不空罽索神呪心經一卷、大毘婆沙論二百卷、成唯識論十卷等を譯す。十月玉華宮に徙る。

六六一 (六十一歳) 唯識二十論一卷を譯す。

六六三 (六十三歳) 大般若經六百卷等を譯出す。

六六四 (六十四歳) 正月呪五首經一卷を譯す、二月五日玉華宮に寂す。



## 第二章 本經異本

## 一 襄陽石刻阿彌陀經

現行羅什譯阿彌陀經の異本として擧げらるゝものは襄陽石刻の阿彌陀經である。蓋し、はたして異本として取扱はれて然るべきかは問題である。

王日休撰『龍舒增廣淨土文』第一淨土起信九編中第九篇阿彌陀經脫文の條下に襄陽石刻阿彌陀經、乃隋陳仁稜所書、字畫清婉、人多慕玩、一心不亂而下云、專持名號、以稱名故、諸罪消滅、卽是多善根福德因緣、今世傳本脫此二十一字、又藏本此經亦名諸佛攝受經、

とある。即ち隋の陳仁稜の筆になる襄陽石刻の阿彌陀經には、現行羅什譯阿彌陀經に於ては見出されない二十一字句がある。この專持名號乃至福德因緣の文は、永き傳持の間に現行の羅什譯から脱落したものであるか、また、これを異本として認むべきか、また後人の註釋字句が謬つて本文に混入したものが、更に現行阿彌陀經梵本について、また、玄奘譯『稱讚淨土佛攝受經』について、この問題の字句を検討

せねばならぬ。

さて、元祖の『選擇集』下十七丁に、以念佛爲多善根、以雜善爲小善根之文の文證として、次下に現行羅什譯小經不可以少善根等の文を引き、次に善導の『法事讚』下十二丁の極樂無爲涅槃界、隨緣雜善恐難生故乃至證得不退入三寶の文を引用し、次に私釋して隨緣雜染の少善根福德因緣をもつては彼國に生じがたく、彼土の生因は、須く多善根福德の念佛の功德によるべきことを説いて、次に龍舒の淨土文中の襄陽石刻の小經を引用してゐる。今この釋相を窺ふと、現行羅什譯小經所説の少善根の物體は不詳であるためには、たして、如何なる行體が少善根であるかを究明するためであつて、先づ、法事讚を引證し、隨緣雜善の少善根たること、それに對して念佛の多善根であり大善根であることをたしかめ、更に王日休の引文を利用して、その評釋には、多少、大小、勝劣の二義をもつて雜善と念佛とを對照せられた。蓋し、元祖は石刻經文について、現行本の異本とするか、はた、註釋字句とするかの問題にふれてゐないから、その眞意は不明であるが、恐らく、これを異本として、念佛多善根の引證とせられたものだらう。

因に、選擇集の今の一章について、『決疑鈔』、『大綱鈔』、『鵜木秘鈔』、『私集鈔』、『聞香記』、



『註解鈔』、『叢林記』などには、或は念佛多善根章、或は念佛大善章、或は名號多善章、或は多少相對章など、章名を附してゐるが、各々みな祖意を得たものだらう。

ところが、元照の『阿彌陀經義疏』には、次のやうにいつてゐる。

近得襄陽石碑經本、文理冥符始懷深信、彼云、善男子、善女人、聞說阿彌陀佛一心不亂、專持名號、以稱名故、諸罪消滅、卽是多功德多善根、多福德因緣、彼石經本、梁陳人書、至今六百餘載、竊疑今本相傳訛脫。

更に、戒度の『義疏聞持記』によれば、元照義疏の彼石經以下の文を註釋して、

彼石下較經得失、梁陳乃南朝兩國之名、朝散郎陳仁稜書碑在襄州龍興寺、本朝殿撰季公諱友聞字李益、嘗守官於彼、持此經歸錢唐、疏主得之喜不自勝、遂復刊石立于靈芝大殿之後、續因兵火焚毀、悲夫、逆推梁陳玄晉未遠、可驗得眞、今本既經六百餘載、中間傳寫訛脫可知。

とある。義疏の所謂脫文と、王日休引用のものとは、文句に左右あるやうである。即ち義疏には、多功德の三字と、多福德の多の一字と、合して四字を添加してゐるが、はたしていづれが石經の正文であるかは不明である。だが、元照、戒度は今本訛脫と評してゐるから、異本としてこれを認めたのではなく、傳承の間の訛脫と判じた

ものであらう。

また、高祖は、『化土卷』本二十五丁に、元照の義疏を引用して、專持名號の字句を專稱名號と改められた。もとより、高祖は、王日休、元照、並に元祖の引用文を見られたのだらうから、專持名號を專稱名號と誤つて引用せられたものではなく、專稱と改められたところに、却つて高祖の獨創があり、そこに深意の存したことを窺はねばならぬ。

『六要鈔』末十七丁に、選擇集と化土卷の專持と專稱、また、多功德と多福德の文の左右について會通を試み、二義をあげてゐる。その一義は、經には不可思議功德と説き、論には眞實功德相と判じてゐるやうに、今もまた、文言の上には廣略の相違があつても、その義理に左右あるべき筈がない。そこでかの功德とは無上大利の功德を意味することから、自ら大に多勝の義を含んでゐる筈である。従つて福德の上にも多の一字を添加したものだらうと推斷し、その二義は、石碑本に異本があつて、持と稱との區別を見たものだらうと判じてゐる。もとよりこの推斷はなんら文献によつたものでもなく、單なる推論にすぎないが、一應首肯さゝることだと思ふ。化卷では、異本として取扱つたか、傳承の間の訛脫として認められたかの批判がな



いやうであり、『六要鈔』では異本として取扱つたものと見てよいやうである。

さて、問題の石刻中の二十一字については、元照、戒度ともにこれを羅什譯中の正文であるとし、現行羅什譯は傳來の間にこの二十一字を脱落したものだらうと論斷した。吾國では、元祖、高祖ともに、現行羅什譯の不完全な部分が、この二十一字によつて始めてみたさるゝものとせられたやうである。

然るに、株宏の『阿彌陀經義疏鈔』第三によれば、襄陽石經の二十一字は、たしかに言外補入であつて後人の註釋が正文の中に訛入したものだと言斷したやうである。

『疏』……又一心不亂下、有本加專持名號二十一字、今所不用、文義不安故、仍依古本不加、而以卽最多善福之意、言外補入、斯爲允當、

『鈔』……文義不安者、已有執持名號四字、不可更著專持名號一句、上下重複、不成文義、舊傳此二十一字、是襄陽石刻、當知是前人解經之語、襄本訛入正文、混書不別耳、善文義者當自見得、

と、全く元照、戒度と意見を異にしてゐる。吾朝では、西鎮兩家の釋家中に種々の異見を見るやうであるが、今三四の意見を擧げて置く、證空の著『密要決』第四龍舒淨

土文事の條下に

此二十一字無流布經故者、欲不說摩訶義也、其故諸教摩訶皆欲顯爲阿彌陀經之意也、一代聖教悉是少少劣也、依智慧依衆生根性故也、淨土教獨爲大多勝、寄佛本願出娑婆故也、

と、あまり面白からざる會通であるが、何等かの貞でこの二十一字をいかさうとした苦心の跡がある。次に、了慧の著『大綱抄』卷下念佛多善篇の條下に

問文云、脫此二十一字、<sup>上巳</sup>傳者脫落在一二字、何落要句之始終耶、答如此落字自然誤也、若就一行二十一字本自落一行歟、又有其例、謂華嚴經第五十八卷經中注云、已上一段五紙餘經、自東晉義熙年覺賢禪師翻譯之、後傳寫之人脱落也、<sup>上巳</sup>五紙既脫二十一字、非可恠耳、又世流布梵網經有三本、處々字句增減水火、翻譯正本何必如此、恐是傳者之所爲歟、

と論じて、本二十一文字は恐らく傳者の脱落だらうとしたものらしい。また、良忠の著『選擇傳弘決疑鈔』第五念佛多善根篇の條下によれば、龍舒の淨土文中の襄陽石經の二十一字を引用し、

龍舒者王日休先生也、形在家心出家、志求出離、作淨土文、<sup>云</sup>隋陳仁稜者、靈芝云、梁陳



仁稜、梁隋相並故非相違、今世傳本脫此二十一字等者、問何由知今世本脫之、答靈芝疏云、若依此經執持名號決定往生、即知稱名是多善根多福德也、昔作此解人尙遲疑、近得襄陽石碑經本、文理冥符、始懷深信、彼云善男子善女人聞說阿彌陀佛、一心不亂、專持名號、以稱名故、諸罪消滅、即是多善根多福德、因緣、彼石碑經本陳仁稜書、至今既經六百餘載、竊疑今本相傳訛脫、戒度聞持記云、乃至中間傳寫訛脫、可知也。とて、靈芝戒度の説に賛したやうである。また、聖問著『決疑鈔直牒』第十念佛多善根篇下の條下に、靈芝戒度の疏鈔を詳説して、その説を採用したやうである。また、持阿の著『決疑鈔見聞』第五も、元照戒度の義に讚したやうである。

本派の道隱著『選擇集要津録』第十一、慧雲著『通津録』第四、興隆著『教行信證徵決』第十七、等によれば、元祖高祖の説に隨うたやうである。

『要津録』第十一、多小相對章の下に、選擇集の龍舒淨土文至二十一字等の文を釋して、居士の傳記を蓮宗寶鑑、佛祖統記、往生集などから抄出し、淨土文二十一字と靈芝の二十一字とを並べ、擧げ多少相對の上からは相違すべきではないと判じ、陳仁稜については直牒などにより、萬姓統譜第十八を引用し、更に雲棲疏鈔の説を評して、雲棲甚妄談とし、靈芝、黑谷、大谷の引證を覆へすものだと論じてゐる。

『通津録』第四にもまた、雲棲の説を評し、「雖有此義我不能從」といつてゐるが、要津録と同様にその批評は傳承を尊ぶところより出たものだらう。

『教典志』第二によれば、石刻經の下に、雲棲の疏鈔の説に讚し、「此說穩當」と評してゐる。

今現行梵本——楠博士解説梵語學所載二五九頁——を見るに、「一心亂れず、心の中に念するとき、はその善男子若しくは善女子が死せむとするに當り」とあつて、「一心不亂」と其人臨命終時との間に襄陽石經の二十一字にあたるものがない。

また、寺本婉雅氏譯西藏所傳佛說阿彌陀經を見ても、また、石刻經二十一字に當る文字がないやうである。

更に、玄奘譯『稱讚淨土佛攝受經』によれば、「若一日一夜、或二、或三、或四、或五、或六、或七、繫念不亂、是善男子或善女人、臨命終時」とあつて、また、石刻經二十一字にあたる文句を見出し得ない。

かやうに原典、藏本、異譯などから見て、株宏の説は穩當であり、問題の二十一字は恐らくは、解經の語の訛入だらうと思はれる。玄智の教典志の意見はたしかに參考すべきである。



ところが、求那跋陀羅譯に『抜一切業障根本得生淨土陀羅尼』といふものがあるが、その初めて傳へられたものは、北齋の那連提黎耶舍だと傳へられてゐる。株宏の阿彌陀經疏鈔の最後にも求那跋陀羅譯本を記載してゐる。この陀羅尼は襄陽石經にも附記されてゐたものだらう。この模刻である筑前宗像社内の小經碑にも、この陀羅尼が刻されてあるとのことである。

因に石刻經の我國に傳へられたのは建久九年が始めであつたらしい。治承年中に小松重盛の發願によつた藏經及び石刻經の渡來がもたらしたものだらう。その後筑前宗像郡田島祠に保存されてゐたが、寶永二年八月雲竹の徒友阿がその模本を得て、華頂義山に跋を需め碑を洛南の小松谷に建て、正徳五年四月に百萬遍第四十三世然譽が東大寺の別當兼華嚴宗長吏道恕に請うてかの經文を書寫せしめ、自ら銘を撰して同時に釋迦堂前に襄陽石刻阿彌陀經碑の模本を建てた。また明和年中筑前宗朗なるものが陳仁稜の親書の經を模し墨本として世に流布せしめたといふことである。今試みに義山、然譽の跋文をのせておく、

〔襄陽石刻阿彌陀經模本跋〕

建久九年之秋、自宋國渡送石刻阿彌陀經一基、石縱四尺八寸、以視彌陀六八本願橫

二尺五寸、以形五五菩薩、厚九寸、以況三三淨土、石色青紫、表彫無量壽佛、裏刻阿彌陀經、並拔一切業障根本得生淨土陀羅尼、其字畫之清婉、彫刻之巧妙、幾人間之故、希有者、今爲筑之前州宗像郡田島第一宮之寶物、現在也。古舊相傳、治承年間、小松内府平重盛、求藏經及隋陳仁稜所書襄陽石刻阿彌陀經於宋國、而彼國有故、不聽渡送、覃于内府、薨後、宋帝嘉其深心、爲追薦送之、宋使著船宗像之時、大宮司氏國、檢尋來由、使者答之、卽以上事、此時平族盡亡無餘、以故氏國不肯留之、然使者依國命重、捨置石經、卽夜密解纜而去。夫託地之平安者、莫善於淨土也、而以安養爲最尊之處也、安養之淨業者、萬行皆得往也、而以稱名爲至要之行也、淨業之說散在諸典、而以三經爲本根也、就中專且要者、特斯經耳、石刻之設、良有旨也哉、往載予令宗像來往之人、模倣之、雲竹老人見之、酷喜、卽自書寫經文、欲復刻于石、傳于永久。而不果、旣逝、頃日有一檀信、繼老人志、石刻之事、於是將成。弟子友阿、先以老人手書經、鏤梓流行乎世矣、予與老人道交有年、且石經之渡送也、其事不輕矧又、此郎襄陽石刻有專持名號等二十一字、是開祖之故、引據而亦此經之眼目也、可以流行矣、可以隨喜矣、因述其始卒爲之跋言、云

寶永二歲次乙酉孟夏八月 華頂義山藏



〔百萬遍所建阿彌陀經石碑記〕

選擇集故引、襄陽龍興寺石刻阿彌陀經者、隨陳仁稜所書也、治承年中、依小松内大臣平重盛公請。薨後建久之間、自宋朝渡送、在筑前州宗像郡田島第一宮之内、又見元照疏戒度記矣、當山第二源智上人勢觀房、重盛公孫備中守平師盛子、爲圓光大師高弟、又什物唐書阿彌陀經、有專持名號等二十一字、與襄陽經正相符合、以有彼因緣、今復勒石建、大日本國山城州愛宕平安城東長徳山功德院釋迦堂前矣

百萬遍四十三世常蓮社然譽

因に現存の刊本、拓本は、

- 一、襄陽石刻阿彌陀經 一冊 京都 大谷大學藏

(刊記云)

寶曆十三年癸九月

皇都寺町五條上ル町

書肆 額田正三郎

墨本

- 一、襄陽石刻阿彌陀經(原拓本) 各一幅

現今筑前國宗像郡宗像神社ニ在リ

- 一、石刻阿彌陀經(拓本) 一幅 京都 龍谷大學藏

明代ノ刻ニシテ房山ニアリ襄陽石刻經ト同本ナリ

- 一、石刻阿彌陀經 山城 光明寺藏

法然上人廟所ノ石垣ニ刻セルモノ也

- 一、襄陽石刻阿彌陀經 一幅 名古屋 住田智見氏藏

原拓本ニアラズ秦鼎ノ奥記ヲ有スル複本ナリ



二 諸本異同考

(一)麗藏の本經文に於ては本派依用の校訂本と異同がある。龜茲三藏鳩摩羅什譯。摩訶迦梅延。摩訶拘絺羅。與大比丘僧。摩訶目乾連。周梨般陀伽。薄俱羅天。雨曼荼羅華。所以者行。諸菩薩亦復如是。如我今者讚歎阿彌陀佛不可思議功德之利。東方。聞是經受持者及諸佛名者。是諸善男子善女人皆爲一切之所護念。亦稱讚我不可思議。

(二)宋藏に於ては、姚秦三藏法師鳩摩羅什譯。雨天曼荼羅華其國衆生。白鶴孔雀。無三惡道。自然皆生。

(三)元藏に於ては、雨天曼荼羅華其土衆生。

(四)明藏に於ては、迦梅延。無量無邊阿僧祇說。

(五)襄陽本に於ては、周匝圍繞是故彼國名爲極樂。專持名號乃至福德因縁の二十一字插入。

(六)清朝本——道光二十七年書寫本——に於ては、與大比丘僧。彼國名爲極樂雨天曼荼羅華。白鶴孔雀。無三惡道。自然皆生。無量無邊阿僧祇說。舍利弗不

得以少善根。與諸衆聖。功德之利。東方。聞是經受持者及諸佛名者。一切諸佛之所護念。亦稱讚我。舍利弗及比丘。

(七)山門安樂院本に於ては、雨天曼陀羅華。其土衆生白鶴。無三惡道。自然皆生。無量無邊阿僧祇。不可思議功德之利。聞是經受持者及聞諸佛名。一切諸佛之所護念。彼諸佛等亦稱讚我。

(八)雲棲法彙中の本經に於ては、名爲極樂。雨天曼陀羅華。其土衆生。白鶴。無三惡道。自然皆生。不可思議功德之利。聞是經受持者及聞諸佛名。一切諸佛之所護念。亦稱讚我。

(九)慈恩の阿彌陀經通讚疏の本經文によれば、阿纒樓駄。白鶴。その他は依用本と殆んど同じ經文である。嘉曆元年丙寅六月十七日源覺書寫本による。

(一〇)元曉の阿彌陀經疏に於ては、摩訶拘絺羅のみの相違である。元祿年代釋琳海の鏤版書による。

(一一)靈芝の義疏に於ては、鳩摩羅什譯。名爲極樂。雨天曼陀羅華其土衆生。白鶴。無三惡道。自然皆生。不可思議功德之利。聞是經受持者及聞諸佛名。諸佛之所護念。亦稱讚我。



(一二) 智顛の義記によれば亦稱讚。我の一箇所だけが依用經文と相違してゐる。  
(一三) 湛澄の勸持鈔に此經に異本あり、今法事讚に依てこれを寫す、又當流相傳の古本をも校して傍の點をつく乃至よく句逗清濁四聲を知るべしとて、本經をあげてゐる。本派依用本と全然一致してゐる。

なほ、支那日本に於ける註疏の經文の各々にあたつて見ることが残されてゐるが、今は以上の諸本にわたつて異同を一瞥したにすぎぬ。

### 第三章 翻 譯 考

誰れか、讀書は一種の創作のやうなものであるといつたが、私も常にさう考へてゐる一人である。もとより讀書は私の心境に或る感激を與へるものであり、場合によつては全く私の心境を變革さすことさへある。ところで、讀書については私に自由の選擇がゆるされてゐる。こゝのところ、たしかに或る種の創作としての香が高いのだらうと思つてゐる。「自由の選擇がゆるされてゐる讀書だから

こそ、私の平生の教養と深い關係がむすばれてゐるだらう。

とにかく、私は法律に關する著書に對して一向に興味をもたぬ。興味をもたぬために一向讀む氣にもならず、また、讀んでもわからない。同様に經濟に關する著書に對してもそのとほりである。といつたやうなことを忌憚なくいへば、私の平生が「法律」とか「經濟」とかの著書から私自身を見出さうとしてゐないからである。このことは私にとつては悲しいことでもある。といつても、私の平生が讀書に對しての自由の選擇を私に與へてゐるのだから、なんともしてみようがない。「法律」「經濟」に關する著書の多くは、難澁な拙文だからといつたやうな不届な考へから讀まぬのではない。ひとへにそれは、私の平生がかやうな著書と縁遠いところからである。

さてまた、私の讀書には種々な型がある。先づ讀書に際して私は、その著書から私自身を讀み出さうとする。この場合にまた二つの型があつて、その一は、僭越にも全然著者の意見を無視してたゞ私自身をひたむきに見出さうとする型、その二は著者に對する私の平生の深い信仰から、無批判に著者の意見に隨順して、そのまゝ私自身を見出さうにはゐられない型とである。次に著書の意見と私の意見と



がチャンボンされて、私の平生に幾分の變革をおこす場合もある。また、私の平生とさう深い関係をもつといふわけではなく、たとへば、試験でも受ける場合、古い歴史の事實を暗誦するために讀むとか、地理的な地名を覚えるために讀むとか、いつたやうな型の讀書もある。

かやうに私の讀書にはいろいろな型がある。このいろいろな型が、私の平生を作つてゆくのだらうといふことに異論をもつものではない。

そこで、かうした私の獨斷から私は「經論の翻譯」について異常な關心と興味をもつてゐる。

## 二

由來、漢譯經論の研究については、幾多の難關がその前途に横つてゐる。ことに、その原典の手に入らないものに至つては、更に研究困難の程度を高めるものである。こゝに漢譯經論研究者の人知れぬ惱がある。

譯經三藏が單に言語に曉通した學者であつて、譯出した成果に對して、溫い信仰も深い理解もなく、たゞ單に忠實に言語の移し換へのみに努力したものである

ならば、幸にその成果についての研究の困難が半減されるであらう。けれども、幸か不幸か、古來の譯經成果をあとづけてみると、譯經三藏の血のたるやうな翻譯功績には、單なる言語學者風の模寫ではなく、原經典に對しての深い理解と、敬虔な信仰とを織りこんでゐるものである。よつて、譯出成果を研究の資料とする場合には、彼等譯經三藏の平生の教養に深い關心をもたねばならぬ。といふところに全く一種の創作の香が高い。またために、研究の對象としては、まことに厄介千萬なものとなるのである。

而も、古來の譯經三藏は實にその當時の學界に於ける權威者でもあつた。支那佛教史上いくたびもくりかへされたことであるが、戰勝の第一賠償として、往々、譯經三藏の掠奪があつたといふ事實が、當時一般思想界に於ける彼等の權威を、裏書きするものである。かくて譯經三藏は單なる佛教學者ではなく、當時の一般思想についても、勝れた理解と、深い造詣とをもつたものだと思つてよい。支那の『傳記』『目錄』に傳へられた譯經三藏傳を見ると、この事實がはつきり窺はれる。

かやうな來歴をもつた譯經三藏の手によつてなされた成果は、單なる言語の模寫であり、移植であつたとして簡單にかたづけられるわけにはまゐらぬ。必ずや、その



成果の上に、彼等の思想的背景が力強い影響を與へたものと信じてよい。ことに、譯經目錄中には、譯者の著述とながめて然るべきものでも、譯出經論として、その中にをさめてゐるものも少くない。更に支那撰述の僞經問題などに至つては、ことにこの感を深めるものである。この意味に於て譯出經論の研究については、先づ一應、譯者の創作(?)として取扱ふべきではなからうか、若しさうだとすれば、そこに、譯者自身の思想系統とか、または譯者當時の時代思潮とかについて、充分の豫備知識をもたなければならぬことになる。

翻つて、印度の諸聖によつて創作された經論それ自體に於ても、その作者自身が、既に独自の見解をもつて、佛意の顯開にとめたものであり、他の追隨をゆるさぬ嚴さをもつたものである。然るに、また更に、それらの經論が、譯經三藏の手によつて譯出された場合、譯者自身の思想的背景が色濃く、その成果の上に彩られるものだから、こゝに於て、譯出經論の研究には重ねたる意味に於ける困難をとまふものである。

## 三

今、その一例を『攝大乘論』の上にとつてみよう。本論はいふまでもなく、無著の著であつて、その名の示すが如く大乘教義概觀ともいふべきものである。そして、印度大乘教學の研究には重要な資料となるものである。ところが、どうしたものが日本では從來あまり研究されてゐない。それは多分、玄奘慈恩系の唯識學を繼承した日本唯識學では、重に『成唯識論』の研究に没頭したために、その間、自ら攝大乘論が等閑視されたものだらう。だから、日本では昔から僅に徳川時代の普寂によつて『攝論略疏』五卷の發表があるだけである。

さて、『攝大乘論』は、大乘阿毘達磨經中の一章である攝大乘品を釋したものと傳へられてゐる。ところが、『大乘阿毘達磨經』はとうとう支那にも西藏にも翻譯されなかつたやうである。無論、どこに於ても現在傳はつてゐない。ところが、その断片が『成唯識論』のうちに引用されてゐるばかりでなく、攝大乘論には多く引用されてゐる。即ち本論の十種の勝相の名稱などはまさしく本經のものであらう。本經と攝大乘論との關係については、いまこの講本に於て詳論しようとするものではない。

ところで、攝大乘論には古來四代の譯がある。その一は北魏時代の佛陀扇多の



譯出にかゝる二卷本と、その二は陳代の眞諦によつて譯された三卷本と、その三は隋時代の達磨笈多譯釋論譯出中の本論文と、その四は唐代の玄奘譯の三卷本とである。この四譯を對照してみると、多分、同本異譯だらうと思へる。ところが、その譯本の内容を綿密に比較對照すると、四譯各々特徴をもつてゐるがその思想的にいつてもたしかにかなりの距離があるやうである。而も、譯本によつてのみ研究せねばならぬ攝大乘論に於て、各譯の間に思想的に距離のあることは困つたものである。さて、四譯中、扇多譯と眞諦譯とは同巧異曲であつて、ともに如來藏緣起論をもつてその眼目としてゐる。笈多譯も前二譯に近い思想をもつてゐる。然るに、玄奘譯に至つては、全く賴耶中心の緣起論である。更にまた、世親の『攝大乘論釋論』にも三代の譯出があつた。即ち眞諦譯と、達磨笈多譯と、玄奘譯とである。三譯の成果は本論に於けるが如く、前二者は如來藏緣起論であり、後者は賴耶中心の緣起論である。

かやうに、各譯出本の上に於て、各譯者の意樂から思想的に距離を認めねばならぬことは、後學者にとつて厄介千萬な事實ではある。兎に角、この事實は譯者の意樂が根深くその成果に喰ひ入つてゐる證據だと考へてよからう。ところで、その

成果の上に於て、本釋論の著者の意見と譯者の意見とが、どういふ風に識別さるゝかは大問題である。若し無著の意見が如來藏緣起論であるとすれば、玄奘譯は全く譯者の創作と見てよい、また賴耶中心の緣起が無著の眞意とすれば、眞諦譯は譯者の思想的背景がしかせしめたものであらう。いふまでもなく、無著の本論の眞意を窺ふためには、彼の著として傳へらるゝ本論以外のものを攻究すれば、その間に、或は、その眞意が明かになるかも知れぬ。然しそれらもまた、譯出經論であるために、攝大乘論の論釋と同様の疑問が残る筈である。

かやうな結果から見ると、譯出經論の上では、原著者の意見が、譯者の意樂によつて、程度の濃淡こそあれ、いかほどかが動かされたものだと思つてよい。極論すれば、この意味に於て、一般譯出經論は、譯者の創作としての豫想のもとに攻究せらるべきものでなからうか。

## 四

この一例としての攝大乘論は、私の意見の偏見をたすけんがためにことさらに拉へ來つたものではない、他の譯經論に於ても這般の消息が満たされてゐる。も



つと適切な例を出せば、かの玄奘譯『成唯識論』十卷がそれである。本論の譯體には時間的取扱を全部無視して、かなり年代的に距離のある十大論師を、平面的に一線上にならべて、問答往復せしめてゐる。而もその内容に至つては護法思想を中心として、他の九大論師の意見を參酌し、それに組織を與へたものがある。それで、その譯體に於ても、糅譯てふ特種な譯體を見せてゐるもので、全く玄奘の創作として取扱ふべきものである。嘗に玄奘のみならず、一般譯經三藏の多くは、爲法の念からではあるが、彼等の譯出が、やがて、創作的であることに自信をもち、誇りを感じたやうでもある。

だから、私は印度撰述の經論研究については、原本の有無にかゝはらず、その翻譯者の思想背景とか、彼等の平生の教養とかいつたことを、先づ解決した上のことにならば決して周到な用意であるとはいへないと思ふ。

#### 第四章 諸經錄に現はれた阿彌陀經題號

(大正藏經四九卷史傳部及び第五五卷目錄部に據る、括弧内の卷數は各經錄の卷數を現はし、頁數は藏經の頁數を示す。)

○出三藏記集 十五卷 梁僧祐撰

無量壽經 一卷 或云阿彌陀經

右乃至晋安帝時。天竺沙門鳩摩羅什。以僞秦姚興弘始三年至長安。於大寺及逍遙園譯出。(卷第二、一一頁)

無量壽經

支謙出阿彌陀經二卷竺法護出無量壽二卷或云無量清淨平等覺鳩摩羅什出無量壽一卷釋寶雲出新無量壽二卷求那跋陀羅出無量壽一卷 (卷第二、一四頁)

○衆經目錄 七卷 隋法經等撰

無量壽佛經 一卷 一名阿彌陀經 後秦弘始年羅什譯

無量壽經 一卷 宋元嘉年求那跋陀羅譯

右二經同本異譯 (卷第一、一一七頁)

○衆經目錄 五卷 隋彥悰撰

小無量壽經 一卷 宋永嘉年求那跋陀羅譯

無量壽佛經 一卷 後秦弘始年羅什譯

右二經同本異譯 (卷第二、一五七頁)



○歷代三寶紀 十五卷 隋費長房撰  
無量壽經 一卷

一名阿彌陀經。弘始四年二月八日出。是第五譯。與支謙康僧鎧白延法護等出兩卷者本同。文廣略小異。見二秦錄。(卷第八、大正四九卷、七九頁)

(右ハ羅什傳下ニアリ)

無量壽經 一卷

孝建年出。是第八譯。見道慧宋齊錄。與康僧鎧支謙白延竺法護羅什竺法力寶雲等所出本大同。廣略文異。(卷十、九二頁)

(右ハ求那跋陀羅傳下ニアリ)

無量壽佛經 一卷 譯再 (卷第十三、一一一頁)

○衆經目錄 五卷 唐靜泰撰

無量清淨平等覺經 二卷 魏世白延譯

阿彌陀經 三卷 吳黃武年支謙譯

無量壽經 二卷 晉永嘉年竺法護譯

稱讚淨土佛攝受經 一卷 唐永徽年玄奘譯

右四經同本異譯 (卷第二、一九一頁)

小無量壽經 一卷 宋元嘉年求那跋陀羅譯

無量壽佛經 一卷 後秦弘始年羅什譯

右二經同本異譯 (卷第二、一九一頁)

○大唐內典錄 十卷 唐道宣撰

阿彌陀經

右乃至文帝世。中天竺國三藏法師求那跋陀羅。(乃至)元嘉十二年。來至揚都。帝深崇敬。(乃至)勅住祇桓寺。仍請令譯。(卷第四、二五九頁)

稱讚淨土經

右大小乘經論乃至京師大慈恩寺沙門釋玄奘奉詔譯 (卷第五、二八三頁)

小無量壽經 四紙

宋元嘉年求那跋陀羅於揚都譯

無量壽佛經 五紙

後秦弘始年羅什譯

稱讚淨土佛攝受經 十紙 古三經同本

第四章 諸經錄に現はれた阿彌陀經題號



唐永徽年玄奘於慈恩寺譯 (卷第六、二九一頁)

稱讚淨土攝受經 (卷第八、三〇六頁)

無量壽佛經 (同右)

小無量壽經 (同右)

無量壽佛經 五紙

後秦弘始年羅什譯

右一經。三譯。與宋時求那跋陀羅所出。小無量壽。及唐玄奘所出。稱讚淨土攝受經。同本。故不兩出。(卷第九、三一九頁)

○古今譯經圖紀 四卷 唐靖邁撰

無量壽佛經 一卷 (卷第三、三五九頁)

(右ハ鳩摩羅什傳下ニ記載ス)

稱讚淨土佛攝受經 一卷 (卷第四、三六七頁)

(右ハ玄奘ノ傳下ニ記載ス)

○大周刊定衆經目錄 十五卷 唐明佺撰

無量壽經 一卷 (一名阿彌陀經五紙)

右後秦弘始四年沙門鳩摩羅什於長安逍遙園譯。出長房錄

小無量壽經 一卷 五紙

右宋孝建初年沙門求那跋陀羅於揚州祇桓寺譯。出長房錄

阿彌陀經 一卷 五紙

右宋文帝代沙門求那跋陀羅譯。出長房錄

稱讚淨土佛攝受經 一卷 十一紙

右大唐永徽年沙門玄奘於慈恩寺譯。見內典錄。(以上四項卷第三、三八九頁)

無量壽經 一卷 (卷第十二、四四八頁)

小無量壽經 一卷 (卷第十二、四四八頁)

小無量壽經 一卷 四紙 (卷第十三、四六二頁)

阿彌陀經 一卷 五紙 (同右)

稱讚淨土佛攝受經 一卷 十一紙 (同右)

○開元釋教錄 二十卷 唐智昇撰

阿彌陀經 一卷 (卷第四、五二二頁)

亦名無量壽經弘始四年二月八日譯初出與唐譯稱讚淨土經等同本見二秦錄及僧祐錄



(右ハ鳩摩羅什傳ノ處ニ記載ス)

小無量壽經 一卷 (卷第五、五二八頁)

或無小字第二出與羅什阿彌陀及唐譯稱讚淨土同本孝建年出一名阿彌陀見道慧僧祐二錄高僧傳云於荊州出房錄別存阿彌陀經者誤也。

(右ハ求那跋陀羅傳下ニ在リ)

稱讚淨土佛攝受經 一卷 (卷第八、五五五頁)

見內典錄第三出與羅什阿彌陀經等同本永徽元年正月一日於大慈恩寺翻經院譯沙門大乘光筆受。

(右ハ玄奘傳下ニ在リ)

阿彌陀經 一卷 亦名無量壽經

姚秦三藏鳩摩羅什譯 第一譯第二本闕

稱讚淨土佛攝受經 一卷 亦直云稱讚淨土經

大唐三藏玄奘譯 出內典錄第二譯

右二經同本異譯其求那跋陀羅所譯小無量壽經尋本 (卷第十二、五九五頁) 不獲諸藏縱有即與彌陀文同不異

小無量壽經 一卷 一名阿彌陀經或無小字

宋天竺三藏求那跋陀羅譯 第三譯

右與阿彌陀經等同本。前後三譯。二存一闕。大周入藏錄中有小無量壽經其 (卷第四、六二九頁) 不異故爲闕本

小無量壽經 一卷

右一經。與阿彌陀經文同名異。其宋代三藏求那跋陀羅所譯小無量壽經。時無其本。 (卷第十七、六六四頁)

阿彌陀經 一卷 亦名無量壽經 五紙 (卷第十九、六八四頁)

稱讚淨土佛攝受經 一卷 亦直云稱讚淨土經 一十紙 (同右)

阿彌陀經 一卷 亦名無量壽經 五紙 姚秦三藏羅什譯

稱讚淨土佛攝受經 一卷 亦直云稱讚淨土經 一十紙 唐三藏玄奘譯 (卷第十九、七〇五頁)

阿彌陀經 一卷 姚秦三藏鳩摩羅什譯

稱讚淨土佛攝受經 一卷 唐三藏玄奘譯 開元釋教錄略出 (卷第一、七二八頁)

○貞元新定釋教目錄 三卷 唐圓照撰

阿彌陀經 一卷

亦名無量壽經弘始四年二月八日譯初出與唐譯讚淨土經等同本見二秦錄及僧祐錄 (卷第六、八〇九頁)

小無量壽經 一卷



或無小字第二出與羅什阿彌陀及唐譯稱讚淨土同本孝建年出一名阿彌陀見道慧僧祐二錄高僧傳云於荊州出房錄別在阿彌陀經者誤也 (卷第七、八二五頁)

稱讚淨土佛攝受經 一卷

見內典錄第三出與羅什阿彌陀經等同本永徽元年正月一日於大慈恩寺翻經院譯沙門大乘光筆受 (卷第十一、八五五頁)

(右ハ玄奘傳下ニ在リ)

阿彌陀經 一卷 亦云無量壽經

姚秦三藏鳩摩羅什譯 第一譯第二本闕

稱讚淨土佛攝受經 一卷 亦直云稱讚淨土經

大唐三藏玄奘譯

出內典錄 第三譯

右二經同本異譯 其求那跋陀羅所譯小無量壽經尋本不獲諸藏縱有與阿彌陀文同不異 (卷第二十一、九二四頁)

小無量壽經 一卷 一名阿彌陀經或無小字

宋天竺三藏求那跋陀羅譯 第二譯

右與阿彌陀經等同本前後三譯二存一闕 大周入藏錄中有小無量壽經其(卷第二十四、九六三頁)文乃與阿彌陀不異故爲闕本

阿彌陀經 一卷 亦名無量壽經 五紙 (卷第二十九、一〇二八頁)

稱讚淨土佛攝受經 一卷 亦名無量壽經 一十紙 (同右)

小無量壽經 一卷 與藏中阿彌陀經文句全同

○慈覺大師在唐送進錄 圓仁撰

梵漢對譯阿彌陀經 一卷 (二〇七六頁)

○諸阿闍梨眞言密教部類總錄 二卷 安然撰

梵唐對譯阿彌陀經 一卷

阿彌陀經 一卷 安然撰亦云無量壽經圓覺缺注梵釋有注貞元

稱讚淨土佛攝受經 一卷 亦直云稱讚淨土經貞元圓覺梵釋

小無量壽經 一卷 貞元不入藏中云阿彌陀經文句全同 (卷上、一一一八頁)

第五章 本經の疏鈔釋一覽

本經の支那日本の流傳については、今章の疏鈔釋を一覽することによつてほば



知られることと思ふ。ただし支那日本の淨土教史的研究といふ問題になれば、今章にあらはれた流傳の形式とはそこに自ら左右のあるべきである。さうした淨土教史的研究は専門家に一任しておくことゝしたい。ただ本章の基調ともなる本經の請來と、日本初期淨土教の梗概を述べて置きたい。

本經の支那請來は傳譯によつて明瞭である。本邦への請來も本經の梵本の條下に於ていさゝかふれておいたが、『傳教大師將來台州錄』佛敎全書、佛敎書籍目錄第二、『天台疏點經目錄』合漆部伍十五部中に阿彌陀經一卷がある。また慈覺大師の『日本國承和五年入唐求法目錄』佛敎全書同上に『梵漢兩字阿彌陀經』一卷がある。また慈覺大師の『入唐新求聖教目錄』佛敎全書同上に『唐梵對譯阿彌陀經』一卷がある。宗叡僧都の『書寫請求法門等目錄』佛敎全書に『梵漢兩字阿彌陀經』一卷がある。これらを安然の『諸阿闍梨真言密教部類總錄』卷上佛敎全書に總括して記載されてゐる。

これらの資料以前の**本經流傳問題**に關しては、正確な資料として見るべきものが少ないやうである。

平安時代に於て隆盛となり、鎌倉時代に至つて結實したときへいはれる日本淨土教は、既に奈良時代に於てもその萌芽として見るべきものが多かつた。もとよ

り奈良時代の佛教は日本的になりつゝあつたとしても、なほ支那六朝隋唐の佛教を繼承したものであることは否めない。就中國史の上で淨土教に關する記事の最初のもは惠隱の無量壽經講義のそれである。即ち日本書紀

舒明天皇十二年の條下に、

五月丁酉朔辛丑大設齋、因以請惠隱僧、令說無量壽經、

白雉三年の條下に

夏四月戊子朔壬寅請沙門惠隱於内裏、使講無量壽經、以沙門惠資論義者等

とある。惠隱は舒明天皇十一年まで、凡そ三十二年間隋唐に學んだものであつて、その間既に彼地に於ては、淨影、嘉祥、西河、終南の學的地位が確立してゐたやうであるから、それらの學的影響を受けてゐたことはいふまでもない。史實の考證はあくまで資料によらねばならぬ、推測とか臆斷は禁物である。とはいへ、嘉祥の三論學、淨土學が既に學的地位を確立してゐたかぎり、羅什の功績は見のがされてゐなかつた筈である。さすれば什譯小經はことに特異な存在であつたから、嘉祥の周圍からはかなり重寶がられたものだらう。嘉祥の淨土思想素材もまた、什譯小經にあつたと考へてよい。さうした事情が推斷されるとすれば、惠隱について



出た元興寺の三論學僧智光禮光が淨土教に深い關心をもつたことにも一脈の關聯がある。だから、きはめて危険な推斷だが、什譯小經が、惠隱の無量壽經講義にも重要な役割をもつてゐたことであり、智光禮光の淨土思想中にも曇鸞の往生論註と同様にかんがりの地位を占めてゐたことだらう。

『續日本紀』天平寶字四年七月の條下に、光明皇后の七々齋に當つて諸國に命じて、淨土曼陀羅を畫き稱讚淨土經を寫さしたといふ記事がある。稱讚淨土經は南都の法相俱舍系からは大切にせられたものであらう。それは玄奘譯であるからである。南都の性相學では玄奘を佛陀に亞ぐものとして尊崇してゐたことは今更くりかへすにも及ばぬ。この什譯小經の書寫を諸國に命じたほどこだから、既に什譯小經がこの時代より以前に本邦に流傳してゐたことだらう。かういへば史家の嚴いお叱りを受けかるも知れぬ。

平安時代以後に於ては、ことに民衆の經典として什譯小經は王座を占めたことは今更いふまでもないが、その點について少しくふれてみよう。その上で疏鈔釋を一覽したい。

淨土教の諸經典が、我國に初めて傳來した年月を詳らかにすることはいまの

ところ不可能である。しかしながら淨土教が、普通寓宗の名をもつてとりあつかはれてゐる奈良時代及び平安時代に於て、既に相當の勢力をもつて擡頭してゐたことは、文獻に徴しても明らかなるところである。

石田茂作氏は其著『寫經より見たる奈良朝佛教の研究』に、正倉院文書に現はれた諸種の寫經文獻に依據して、奈良時代の佛教に就いての、詳細な研究を發表してゐられるが、その中に、淨土教經典の流傳について頗る興味ある論述をこゝろみられてゐる。

即ち其說によれば、奈良時代既に現在依用せられてゐる淨土三部經及び其異譯の諸經典並に道綽・善導系・靖邁・玄一等の玄奘系・元曉・義寂等の新羅系統の諸淨土系の註疏が傳來してゐることが記録せられてゐることから推察すれば、此時代に淨土教が相當な勢で傳播してゐたことは見逃せない事實である。然も實際に使はれた經卷についてみるに、其註疏の數に於いては無量壽經の疏が最も多く、經典そのものでは阿彌陀經の部數が最も多い。(阿彌陀院資財帳登錄の藏經目錄參照)このことは當時の人々が無量壽經を學的研究の對象とし、阿彌陀經を佛前に於ける讀誦禮拜用として依用してゐたことを意味するものではない



だらうか。尙、當時阿彌陀經の異譯たる稱讚淨土經が盛に書寫せられてゐるが、  
 (續日本紀、正倉院文書等參照)これは當時法相宗が盛に行はれてゐた關係上、自然  
 舊譯の阿彌陀經に代つて一時行はれたものであらう。併しこれは一時の現象  
 であつて、次の時代になれば天台宗は舊譯系であるから、又もとの什譯阿彌陀經  
 を依用するやうになつた。「とにかく新舊の別こそあれ、小阿彌陀經なるものが  
 その實際に於て重せられ、書寫讀誦されてゐた事は當時の淨土教は一般的には  
 阿彌陀經で代表されてゐたと云つてよからう」優婆塞貢進解中阿彌陀經讀誦の  
 記録參照と述べてゐる。(上述石田氏著書中一五九頁以下「寫經より見たる奈良朝の淨土教」取意)

これによつてこゝに當面の問題たる阿彌陀經が、本邦流傳史上如何に古き地  
 位を占め、且當初より如何に重要視せられてゐたかを窺ふことが出来る。それ  
 と同時に今經が讀誦禮拜の經典として古くより重用せられてゐたことは、自ら  
 今經の使命を示唆するものゝ如く想はれて深い興趣を覺ゆるものである。

因に石田氏の編述に係る『奈良朝現在一切經疏目錄』に依れば、當時書寫せら  
 れた阿彌陀經關係の記録は左の通りである。(右書六頁以下參照)

阿彌陀經 神龜四年寫 (大日本古文書一ノ三八三)

|             |         |           |
|-------------|---------|-----------|
| 初阿彌陀經       | 天平勝寶四年寫 | (同一二ノ二〇四) |
| 稱讚淨土經       | 天平十年寫   | (同七ノ二一六)  |
| 稱讚佛攝受經      | 天平十四年寫  | (同八ノ六)    |
| 稱讚淨土佛攝受經    | 天平十五年寫  | (同八ノ一六六)  |
| 解讚阿彌陀經      | 天平十年寫   | (同七ノ二一四)  |
| 稱讚淨土佛攝受經疏   | 天平十八年寫  | (同九ノ二六三)  |
| 同經疏 靖邁撰     | 天平十九年寫  | (同九ノ三八五)  |
| 同經疏         | 天平二十年寫  | (同八六ノ三)   |
| 同經疏 靖邁撰     | 天平勝寶四年  | (同一二ノ三八〇) |
| 外に          |         |           |
| 後出阿彌陀經      | 天平十四年寫  | (同八ノ六)    |
| 後出阿彌陀佛偈經不詳  |         |           |
| 阿彌陀咒經       | 勝寶四年寫   | (同十二ノ六九)  |
| 阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經 | 天平九年寫   | (同七ノ六七)   |
| 鼓音聲陀羅尼經     | 勝寶四年寫   | (同九ノ六一一)  |



阿彌陀經鼓音聲經

勝寶六年寫

(同一三ノ一七五)

一 支那撰述現存諸註疏一覽

(一) 隋時代

阿彌陀經義記

一卷

智顛  
章安灌頂記

(大正藏經第三七卷經疏部五ノ内)

(二) 唐時代

阿彌陀經義述

一卷

慧淨述

(同前)

阿彌陀經疏

一卷

窺基撰

(同前)

同經通贊疏

三卷

窺基撰

(同前)

阿彌陀經疏

一卷

新羅  
元曉述

(同前)

(三) 宋時代

阿彌陀經疏

一卷

智圓述

(同前)

阿彌陀經義疏

一卷

元照述

(同前)

同經義疏聞持記

三卷

元照述  
戒度記

(正續藏第三三套第二冊ノ内)

(四) 元時代

阿彌陀經句解

一卷

性澄撰

(正續藏第三三套第二冊ノ内)

(五) 明時代

阿彌陀經要解

一卷

智旭解

(大正藏經第三七卷經疏部五ノ内)

阿彌陀經疏鈔

四卷

株宏述

(正續藏第三三套第二三冊ノ内)

同經疏鈔事義

一卷

株宏述

(同前)

同經疏鈔問辯

一卷

株宏述

(同前)

同經疏鈔問答

一卷

株宏述

(雲棲法彙第十冊ノ内)

同經疏鈔續問答

一卷

株宏述

(同前)

同經疏鈔疑辯

一卷

株宏述

(同前)

阿彌陀經圖

一卷

株宏

(同第六冊ノ内)

阿彌陀經疏鈔演義

四卷

古德法師演義  
慈航智願定本

(正續藏第三三套第三、四冊ノ内)

阿彌陀經已決

一卷

大慧釋

(同第四冊ノ内)

阿彌陀經略解

一卷

大佑述

(同第二冊ノ内)

同 圓中鈔

二卷

大佑述  
傳燈鈔

(同前第九一套第四冊ノ内)

(六) 清時代



- 阿彌陀經舌相 一卷 淨挺著 (同前第三三套第四冊ノ内)
- 同經約論 一卷 彭際清述 (同前)
- 阿彌陀經直解正行 一卷 了根纂註 (同前)
- 阿彌陀經略註 一卷 續法錄註 (同前第九一套第四冊ノ内)
- 阿彌陀經註 (原名修西定課) 一卷 鄭澄源註 (同前)
- 阿彌陀經要解便蒙鈔 三卷 達默鈔 (同前)
- 阿彌陀經摘要易解 一卷 眞嵩述 (同前)

二 支那朝鮮撰述古註疏逸本一覽

- 阿彌陀經義疏 三十丁 唐僧 肇 (出長西錄)
- 眞宗教典志に私集鈔云作者非羅什門人乃至文中引玄奘所譯攝論佛地論等とある。
- 同 述贊 一卷 唐窺 基 (同前)
- 同 通贊疏鈔五卷科一卷 高麗元 溥 (出義天、長西二錄)
- 同 疏 一卷 唐圓 測 (出東域、長西二錄)

(永超集、東域傳燈目錄(大正藏經第五、目錄部)義天錄、新編諸宗教藏總錄(同上)長西編、長西錄(眞宗全書、第七四冊)玄智編、淨土眞宗教典志等に依る)

- 同 疏 一卷 唐玄 一 (出義天錄、東域錄、長西錄)
- 長西錄には記二卷と作す。
- 同 鈔 二卷 智 首 (出義天、東域二錄)
- 東域錄には隨緣義鈔と作す。
- 同 疏 二卷 唐懷 感 (眞宗教典志)
- 眞宗教典志に私集鈔上云懷感禪師疏上下題下云沙門懷感眞偽難決とある。
- 同 疏 一卷 壞 成 (出東域錄)
- 東域錄に或人傳云此疏在延曆寺前唐院文全與慈恩同疏とある。
- 同 義記 一卷 義 想 (出義天錄)
- 同 科 一卷 智 照 (同前)
- 同 疏 一卷 道 倫 (同前)
- 同 古迹記 一卷 太 賢 (同前)
- 同 疏 一卷 元 舍 (同前)
- 同 義記 一卷 同 (同前)
- 同 讚 一卷 (出東域錄)



- 同 略記 新羅 憬興 (同前)
- 同 義鈔 同 (同前)
- 同 疏 一卷 澄興 (同前)
- 同 疏 一卷 唐惠淨 (同前)
- 同 疏 一卷 新羅慈藏 (出東域、長西二錄)
- 同 疏 長西錄には「義記一卷」と作す。
- 同 疏 長西錄には「惠淨作となす。」
- 同 西資鈔一卷、科文一卷 宋智圓 (出義天、長西二錄)
- 同 疏 二卷 宋仁岳 (同前)
- 同 指歸記二卷、科一卷 宋前 (同前)
- 同 圓修記 一卷 智央 (出私集鈔並ニ聞持記)
- 同 超玄記 一卷 宋用欽 (出長西錄)
- 同 分題義解 一卷 宋希除 (出長西錄)

- 同 兩滿記 一卷 唐法久人 (同前)
- 同 註 兩字、教典志には「西」に作る。
- 同 註 一卷 唐秦思 (同前)
- 同 集註 一卷 古崖
- 同 集註 真宗教典志に「出越溪句解自跋及大佑略解自序」
- 同 集註 一卷 三衢 (真宗教典志)
- 同 疏 出大佑暑解目序
- 同 疏 五卷 義淵 (真宗教典志)
- 同 疏 一卷 清續法 (同前)

### 三 日本各宗小經註疏一覽 (但し淨土眞宗ハ別出ス)

- (龍谷大學和漢書分類目錄佛教之部佛書解說大辭典等參照)
- (一) 平安朝時代
- 阿彌陀經開題 一卷 空海 (一四三四—一四九五) (諸宗章疏錄第三)
- 阿彌陀經大意 一卷 源信 (一六〇三—一六七七) (大日本佛教全書第三一冊ノ内)



同 略記 一卷 源信 (同右)  
阿彌陀經要記 一卷 永觀 (一六九三—一七七二) (淨土依憑經論章疏目錄)

(二) 鎌倉時代

阿彌陀經釋 一卷 源空 (一七九三—一八七二) (黑谷上人語燈錄)  
同 私記 一卷 同 (同右)

淨土三部經音義 四卷 信瑞 (二八九六) (續淨土宗全書)  
阿彌陀經拾要記 七卷 凝念 (二九〇〇—一九八一) (諸宗章疏錄第二)

(三) 室町及桃山時代

阿彌陀經私集鈔 一卷 堯惠 (二〇五五)  
阿彌陀經直談要註記 二卷 聖聰 (二〇二六—二一〇〇)  
淨土三部經音義 二卷 珠光 (二二五〇)

(四) 德川時代

阿彌陀經祕直談鈔 三卷 源譽 (二二九六)  
阿彌陀經隋聞講錄 一卷 義山 (二三〇八—二三七七)  
阿彌陀經疏鈔管解 八卷 教道 (二三二五)

阿彌陀經直解 三卷 真準 (二三三三)

同 略解指要鈔 三卷 同

稱讚淨土佛攝受經開蒙記 二卷 正亮 (二三四九)

佛說阿彌陀經要解百川記 四卷 秀雲 (二三六五) 天台系

阿彌陀經勸持鈔 一卷 湛澄 (二三一一—二三七一)

阿彌陀經見聞 六卷 榮心 (二三一九)

阿彌陀經鼓吹 二卷 了意 (二三五一)

同註解鈔 一卷 同

阿彌陀經顯宗鈔 一卷 行謙 (二三九〇)

稱讚淨土佛攝受經疏 三卷 梁道 (二三九一)

阿彌陀經合讚 一卷 眞阿 (二三一七—二三九一)

阿彌陀經要解俗談 一卷 光謙 (二三一二—二三九九)

阿彌陀經略纂 二卷 大我 (二三六九—二四四二)

阿彌陀經科註廻瀾鈔 一卷 鸞宿 (二四一〇)

受持阿彌陀經行願儀 一卷 成時 (二四二二)



|              |    |      |               |
|--------------|----|------|---------------|
| 阿彌陀經傳圖義記     | 一卷 | 薰譽   | (二四七三)        |
| 阿彌陀經要解一心鈔    | 三卷 | 慈等   | (二四七九)        |
| 阿彌陀經訓讀鈔      | 三卷 |      | (慶安三刊) 著者未詳   |
| 淨土三部經略解傳決    | 一卷 |      | (延寶六刊) 同      |
| 阿彌陀經私記       | 五卷 |      | 著者及刊年未詳       |
| 同 疏記類要       | 二卷 | 同    |               |
| 淨土三部經古今集改記   | 一卷 | 同    |               |
| (五) 明治以後     |    |      |               |
| 彌陀經文字增減辨     |    | 上田照遍 | (照遍和尚全集第四卷ノ内) |
| 阿彌陀經(國譯並ニ解題) |    | 椎尾辨匡 | (國譯一切經)       |
| 阿彌陀經十講       |    | 前田聽瑞 |               |

四 淨土眞宗學匠の小經註疏一覽

|        |    |    |                |
|--------|----|----|----------------|
| 阿彌陀經聞記 | 一卷 | 慧空 | (二三〇四—二三八一) 大派 |
| 阿彌陀經義要 | 四卷 | 同  |                |

|           |    |    |   |
|-----------|----|----|---|
| 阿彌陀經義疏記引文 | 二卷 | 峻諦 | (二三二四—二三八一)   |
| 阿彌陀經刪補解   |    | 圓澄 | (二三四五—二三八六) 大派  |
| 稱讚淨土經駕說   | 四卷 | 月空 | (二三三一—二三八九)   |
| 阿彌陀經會宗節要  |    | 同  |   |
| 科阿彌陀經     |    | 若霖 | (二三三五—二三九五)   |
| 阿彌陀經聖淨訣   | 二卷 | 法霖 | (二三五三—二四〇二)   |
| 法事讚甄      | 七卷 | 僧樸 | (二三七九—二四二二)   |
| 阿彌陀經陳善錄   |    | 同  |   |
| 阿彌陀經佩觸記   | 三卷 | 泰巖 | (二三七一—二四二三)   |
| 阿彌陀經略讚    | 二卷 | 慧然 | (二三五三—二四二四) 大派  |
| 阿彌陀經展持鈔   | 九卷 | 智暹 | (二三五〇—二四二八)   |
| 阿彌陀經淨眼錄   |    | 義教 | (二三五四—二四二八)   |
| 阿彌陀經弊籌錄三卷 |    |    | <small>(籌は帯ともある。延享版は帯とす、いづれにてもよし。淨土眞宗教典志二、二丁の讀方による、蓋し慣用音サウである。)</small> 慧鑑 (二四四一) |
| 阿彌陀經甲午記   | 二卷 | 慧雲 | (二三九〇—二四四二)   |
| 阿彌陀經明煥記   | 二卷 | 慧忍 | (二三六六—二四四三)   |



|              |    |                |    |
|--------------|----|----------------|----|
| 阿彌陀經緯        |    | 僧谿 (二三八三—二四四三) |    |
| 阿彌陀經受信錄(或聞記) |    | 同              |    |
| 阿彌陀經護念錄      |    | 慧琳 (二三七五—二四四九) | 大派 |
| 阿彌陀經餐聲錄      |    | 一懋(一憬) (二四五五)  |    |
| 阿彌陀經講錄       |    | 功存 (二三八〇—二四五六) |    |
| 阿彌陀經聞記       |    | 同              |    |
| 阿彌陀經聞記       | 二卷 | 大安 (二四六三)      | 大派 |
| 阿彌陀經聞信決      | 四卷 | 默昭 (二三九四—二四六四) |    |
| 阿彌陀經天明錄      |    | 智洞 (二四六六)      |    |
| 阿彌陀經增明記      |    | 道隱 (二四〇一—二四七三) |    |
| 阿彌陀經講義       |    | 鳳嶺 (二四一〇—二四七六) | 大派 |
| 阿彌陀經乙丑講義     | 七卷 | 深勵 (二四〇九—二四七七) | 大派 |
| 阿彌陀經講義       | 八卷 | 同              |    |
| 阿彌陀經聞書       |    | 履善 (二四一四—二四七九) |    |
| 修刪阿彌陀經論      | 二卷 | 同              |    |

|            |    |                |    |
|------------|----|----------------|----|
| 非修刪阿彌陀經    |    | 同              |    |
| 阿彌陀經記說     |    | 同              |    |
| 阿彌陀經紀聞     | 二卷 | 同              |    |
| 阿彌陀經宗要     |    | 同              |    |
| 阿彌陀經記      | 二卷 | 靈曜 (二四八二)      | 大派 |
| 阿彌陀經講錄     | 二卷 | 道振 (二四三三—二四八四) |    |
| 阿彌陀經舒舌箋    |    | 同              |    |
| 阿彌陀經丁丑錄    | 二卷 | 芳英 (二四二三—二四八八) |    |
| 阿彌陀經聞記     | 三卷 | 慧航 (二四八九)      |    |
| 阿彌陀經丁亥錄    | 五卷 | 法海 (二四二八—二四九四) | 大派 |
| 阿彌陀經聞書(聞記) |    | 性海 (二四二五—二四九八) |    |
| 小經講義隨聞記    |    | 圓解 (二四二七—二五〇〇) | 大派 |
| 阿彌陀經講釋聞記   | 八卷 | 圓龍 (二五〇五)      | 大派 |
| 阿彌陀經筆記     |    | 僧朗 (二四二九—二五一二) |    |
| 阿彌陀經聽記     |    | 月珠 (二五一六)      |    |



|         |    |                     |
|---------|----|---------------------|
| 阿彌陀經松江錄 | 同  |                     |
| 阿彌陀經即生篇 | 三卷 | 信曉 (二四三四—二五一八) 佛光寺派 |
| 阿彌陀經聽記  | 三卷 | 栖城 (二四五三—二五二一)      |
| 阿彌陀經聽記  |    | 行照 (二五二二)           |
| 阿彌陀經玄義  |    | 僧純 (二四五—二五三二)       |
| 阿彌陀經文義  | 同  |                     |
| 阿彌陀經聽記  |    | 善讓 (二四六六—二五四六)      |
| 阿彌陀經聽記  |    | 印順 (二四七八—二五四八)      |
| 阿彌陀經商量記 |    | 千巖 (二四九四—二五五七) 大派   |
| 阿彌陀經再錄  |    | 圓月 (二四七八—二五六二)      |
| 阿彌陀經講錄  | 二卷 | 法瑞 (二四八七—二五六四) 大派   |
| 阿彌陀經半千記 |    | 鮮明 (二四九五—二五七四)      |
| 阿彌陀經講義  |    | 覺壽 (二五〇二—二五七四) 大派   |
| 阿彌陀經講述  | 二卷 | 同                   |
| 阿彌陀經講話  |    | 善海 (二五一五—二五八三)      |

|                   |   |         |
|-------------------|---|---------|
| 阿彌陀經講義            | 同 | 僧默      |
| 阿彌陀經玄談講翼          |   | 寺田福壽 大派 |
| 阿彌陀經通俗講義          |   | 楠 龍道 大派 |
| 阿彌陀經達意            |   | 島地大等    |
| 阿彌陀經講讚            |   | 安藤光闡    |
| 畫頭梵和直譯 阿彌陀經圖說     |   | 南條文雄 大派 |
| 阿彌陀經講錄            |   | 同       |
| 梵文阿連聲不連聲音譯分解      |   | 同       |
| 支那二譯對照梵文和譯 佛說阿彌陀經 |   | 同       |
| 梵文阿彌陀經講義          | 同 |         |
| 阿彌陀經講話            |   | 前田慧雲    |
| 阿彌陀經講錄            |   | 是山惠覺    |
| 阿彌陀經講話            |   | 大谷光瑞    |
| 阿彌陀經講話            |   | 阿滿得聞    |
| 阿彌陀經論題決擇          |   | 稻葉教山 大派 |



|                                  |         |
|----------------------------------|---------|
| 阿彌陀經奉讚號 <small>(法藏第四九五號)</small> | 法藏館編    |
| 阿彌陀經講義                           | 河野法雲 大派 |
| 阿彌陀經講義                           | 柏厚祐義 大派 |
| 阿彌陀經綱要                           | 杉 紫朗    |
| 阿彌陀經講話                           | 金子大榮 大派 |
| 阿彌陀經講話                           | 山田將爲    |

五 阿彌陀經及び一般浄土教關係論文一覽

△阿彌陀經關係

|               |                                       |
|---------------|---------------------------------------|
| 阿彌陀經講義        | 小栗栖香頂 <small>(教學誌)</small> 六・七 明治二二   |
| 阿彌陀經講話        | 大谷光瑞 <small>(大乘)</small> 一卷 七—九 大正一一  |
| 阿彌陀經の成立に關する私見 | 鴨臺學人 <small>(佛書研究)</small> 二七・二八 大六   |
| 阿彌陀經の脫文に就て    | 今津洪嶽 <small>(佛書研究)</small> 六 大四       |
| 佛說阿彌陀經要解譯述    | <small>(叡山宗教)</small> 三卷一・一二 大一一      |
| 英譯阿彌陀經        | 宇津木二秀譯 <small>(龍大論叢)</small> 二五七 大一一三 |

王舍城所説の無量壽經と舍衛國所説無量壽經の比較研究

大谷光瑞 (大乘) 一卷二 大一一

清朝本阿彌陀經と現存諸本阿彌陀經との同異

高瀬承嚴 (佛書研究) 三〇 大六

親鸞聖人の小經觀 梅原眞隆 (親鸞聖人研究) 四〇 大一一

西藏文阿彌陀經和譯 寺本婉雅 (無盡燈) 一五卷六 明四三

佛典開章の原型より阿彌陀經のそれに及ぶ

月輪賢隆 (六條學報) 一三〇・一三一 明四五

邦譯阿彌陀經 石崎安彦 (大乘) 六卷二 昭二

本朝阿彌陀經の古刻書寫及傳來に就て 惠谷隆戒 (摩訶衍) 四卷一 大一一

梵文阿彌陀經に就て 南條文雄 (無盡燈) 八卷八—一一 明三六

梵文阿彌陀經和譯 荻原雲來 (宗教界) 一四卷九 大七

西藏文阿彌陀經 楠 基道 (六條學報) 一九四號 大六・一二

梵文阿彌陀經に就ての質疑に答ふ

南條文雄 (無盡燈) 八卷(八—一一號) 明三六



悉曇阿彌陀經を讀む 釋生〔新佛教〕九卷九 明四一  
 西藏阿彌陀經和譯及其解說 寺本婉雅〔佛教研究〕二三卷七 大七  
 佛說阿彌陀經の西藏文和譯を紹介す

青木文教〔大乘〕一卷一二 大一一

劉宋求那跋陀羅の阿彌陀經に就て 望月信亨〔宗教界〕五卷九 明四二

阿彌陀經諸譯の比較研究 廣岡玄雄〔有聲〕三七—三九號 明四二

阿彌陀經成立攷 鳥居正語〔淨土學〕三 昭七

阿彌陀經索引 西尾京雄〔宗學研究〕一〇 昭一〇

教行信證に現はれたる阿彌陀經 小山法城〔六條學報〕二〇四 大七

彌陀經和讃 柏原祐義〔法爾〕三二—三五 大九

親鸞聖人の小經觀 梅原眞隆〔親鸞聖人研究〕四〇 大一一

梵藏阿彌陀經の發願廻向の批評に就て

寺本婉雅〔大谷學報〕一三卷一 昭七

△三經關係

三經一論 廣陵了榮〔無盡燈〕二卷八 明四〇

三經一論

高木俊一〔六條學報〕四二—四五 五三—五七 明三八

淨土三經論

和田龍造〔無盡燈〕二卷六七 明三九

淨土宗三經一論五部九卷の傳來に就て

高瀨承嚴〔佛教學雜誌〕三卷八—一〇 大一一

三部經翻譯の年代

望月信亨〔宗粹雜誌〕四八・四九 明三四

淨土教典の傳譯

堀謙德〔警世〕七卷七 明四二

淨土三經聖典論

德澤龍泉〔宗學院論輯〕二四—一七 昭八

大經と觀經小經との關係

前田慧雲〔擇善會雜誌〕三四 明二五

親鸞聖人の三經觀

梅原眞隆〔親鸞聖人研究〕四一 大一一

△支那淨土教

支那淨土教史

脇谷搦謙〔六條學報〕四七・四九・五〇 明三八

支那淨土教史總論

妻木直良〔六條學報〕一〇・一二 明三五

慈恩大師の淨土教

河野法雲〔無盡燈〕一一卷一一・一二 明三九

慈愍三藏の淨土教

小野玄妙〔現代佛教〕二卷一七—二三 大一一四・一五

善導の出世と其淨土教

殊峯學人〔六條學報〕五三 明三九



明代智旭の淨土教義 妻木直良〔東洋哲學〕一四卷八九 明四〇  
 支那淨土教發展に就て 河野法雲〔宗學研究〕一七 昭一四  
 淨影の念佛思想 雲村賢淳〔同上〕  
 天台大師の淨土教 泉 惠操〔同上〕  
 嘉祥の淨土教思想 野上觀一〔同上〕  
 元照律師の念佛 佐々木宣正〔六條學報〕九四 明四二  
 △日本淨土教

本邦初期の淨土信仰について 望月信亨〔淨土學〕四 昭七  
 日本淨土教史料 鈴木暢幸〔六條學報〕一〇〇 明四三  
 日本に於ける初期の淨土教 山田文昭〔無盡燈〕八卷六 明三六  
 奈良時代の淨土教に就いて 禿氏祐祥〔龍大論叢〕二七一 大一五  
 藤原末期時代の淨土教史料 今津欣一郎〔無盡燈〕一五卷九一〇・一二  
一六卷二三 明四三・四四  
 藤原時代の彌陀信仰 日下無倫〔史蹟と古美術〕五卷四 昭五  
 平安朝時代淨土教信仰の一斑 富森大梁〔歴史と地理〕六卷五 大九  
 平安末期に於ける南都系の淨土教 高西賢正〔大谷學報〕九卷一 昭三

推古天皇の朝の淨土教 鷲尾順敬〔無盡燈〕二卷六 明三〇  
 叡山念佛思想に於ける創唱期と準備期

幡谷淳信〔無盡燈〕二〇卷一一 大四  
 叡山淨土教系に於ける實踐期の念佛思想

幡谷淳信〔無盡燈〕二一卷二―五大五  
 叡山念佛思想變遷概論 杉 紫朗〔六條學報〕八九九一 明四二  
 鎌倉時代の淨土教 佐々木宣正〔六條學報〕四〇 明三八  
 叡山の淨土教 山口光圓〔宗學研究〕一二・二三 昭一〇  
 傳教の彌陀念佛觀 杉 紫朗〔六條學報〕八三 明四一  
 天台眞盛派の淨土教義 脇谷擽謙〔六條學報〕七六 明四一  
 南都に於ける念佛門 脇谷擽謙〔六條學報〕四〇・四一・四五・四七 明三八  
 野山系淨土教の概觀 三長覺靜〔密教研究〕九・一一 大一一・一二  
 淨土祖師の彌陀佛信仰史觀 石井教導〔大正大學々報〕三〇・三一 昭一四



今是經者、斯乃兩尊出世之大意、四輩入道之要門、示淨土之可願、讚妙德之可歸、妙德可歸者、耳聞經名、則入一乘而無反、口誦佛號、則出三界而不還、何況禮拜專念、讚詠觀察者哉、淨土可願者、浴於金妙蓮池、則離有生之染、因遊於玉檀林、則向無死之聖果、加復見佛光、入無相聞梵響、悟無生、

〔元曉、阿彌陀經疏 述大意一節〕

## 本篇

### 第一章 支那撰述諸註疏概観

#### 一 智者の阿彌陀經義記

智者の『義記』はその眞僞撰不明である。孤山智圓の『佛說阿彌陀經疏』に眞僞問題について、

世有彌陀經疏、自日東傳來、言智者說者非也、詞俚義疎、諒倭人之假託乎、と、また『西資抄』に、——智圓撰——(惠空の阿彌陀經義要上本記載)

日東者亦曰日本、唐貞觀十一年有最澄、即天台道邃門人也、始傳智者教法、歸于本國、是故彼有傳來之疏、而言智者說也、倭人之假說者乎、倭國之人所作、假借託附者之名、欲傳行耳、

と、即ち智圓によれば、義記は倭人の撰であつて、智者の眞撰ではないとの説である。また、『佛祖統紀』二十五によれば、



彌陀經疏一卷、金剛彌陀二疏、雖曾入藏而孤山淨覺謂是附託之文、唯神照法師嘗於法輪用此疏講、有宣賜本在東山藏中、

と眞僞未詳の筆法であるが、神照についての傳説から或は眞撰に賛したものか、蓋し、法聰の『釋觀無量壽佛經記』及び智禮の『妙宗鈔』には義記については一言もふれてゐない。

然るに、義記については、遵式を始めとし、『義天錄』『玄照錄』『長西錄』『傳教大師將來台洲錄』『天台宗章疏』等みな智者の眞撰と認めたとやうである。更に、源信の『阿彌陀經略記』はその序文から見ても、全く義記の布衎に外ならないと告白してあるから、これを智者の眞撰と認めたとに相違ない。源空の『初學鈔』『小經釋』もまたこれを眞撰として重く視たやうである。高祖の『化卷』には、義記を引用せずして、智圓、元照の釋語を借引してゐる。これは單に釋語を借つたのであるから、義記に於て適當な釋語が見つからなかつたために、義記を引用せなかつたものだらう。だが、智圓の註疏を見たかぎり、義記の眞撰を疑つたのかも知れぬ。

智者の著としてまた『觀經疏』が傳へられてゐる。而も眞僞撰はなほ宿題となつて、先覺の間には異論にわたつてゐる。恐らく後人の僞撰だらうとは近代學界

の結論となつてゐる。然るに、また、小經義記も恐らく僞撰だらうと推定することに少なからず飽氣なさを感ずるものであるが、眞撰と判する資料に乏しく、また眞撰と認めた先覺の獨斷に充分の信用を置くこともできぬから、なほ眞僞未詳としてのこしたい。

今その内容について一瞥せう。文意はきはめて簡單であるために、源信の略記が懇にこれを詳説して、その意を盡くしたやうであることは和尙の略記序に見えてゐる。

先づ章段を三分して、序、正、流通の三段とし、概説して五義を出し、

第一、釋名——從人標稱、依教修習往生彼國、

第二、辯體——法性眞如諦心觀密、證常樂果、——（非因果の實相を體とす）

第三、宗致——淨土機緣妙樂莊嚴化像迎攝、——（體宗別明で亦因果を宗とす）

第四、力用——破除愛見五住塵勞、正習俱盡、——（斷疑生信を以て用となす）

第五、教相——帶別狹通生熟醍醐、總爲教相也、——（化法四教、五味に配當す）

と、全く天台教義中心の小經觀と見てよいと思ふ。智者の多くの著述を見て、きはめて自然な小經觀だと首肯できる。それがたとひ、智者の眞撰ではないとしても、



智者系統の著作と見るべき充分の内容をもつてゐる。正宗中本經の無問自說なることを明示し、彼佛の依正二果を明すについては、適化無方の故に凡夫小乘をして、厭此欣彼せしめんとするところに經旨の重點を認めたるやうである。また極樂の名義については、賢首に望むるとなほ下品だが、娑婆に比べて極樂といつたもので、苦に對して極樂といひ、用より安養といひ、人に從つて無量壽といふたのであるとし、その正果たる阿彌陀はその實有量であるが餘人がこれを稱數することができないから無量と説いたに過ぎないとして、化主徒衆を論じ、更に往生の方法を論じて、時日の多少によらず、用心の厚薄によつて多少の善根を判じ、六方諸佛の勸發稱揚を説き、穢國は苦惱多く極濁惡世であり、同居淨土はその濁り輕微であつて、苦惱の迫逼がないから極樂と號することができるとして、きはめて簡單に小經の中心問題を論判してゐる。

因みに源信の小經觀について一言したい。彼の著『阿彌陀經略記』には義記の意を承け、三諦圓融の思想から彌陀の名義を釋し、一切諸佛總有二身、一者眞身、住報佛土、二者應身、住同居土、西方化主は一應化故、彼名號亦隨應立」と判じ、『往生要集』下末には極樂の依正を論じて、

阿彌陀佛極樂淨土、是何身何土耶。答天台云、應身佛同居土、遠法師云、是應身應土、綽法師云、是報佛報土、古舊等相傳、皆云化土化身、此爲大失、依大乘同性經乃至一切皆是報身佛也等、

と安樂集の報身報土説を引き、小經の無量無邊阿僧祇劫説と、觀音授記經の入滅説とを擧げ、この矛盾に關する安樂集の會通を引用し、更に迦才の所論を引き、かの「若報若化皆欲成就衆生、此則土不虛設、行不空修、但信佛語、依經專念、即得往生、亦不須圖度報之與化也」の文を、此釋善矣、須專稱念、勿勞分別」と批判せられたが、上の略記の釋と敢て矛盾する所論ではなく、西方淨土についての古來の報化二土兩説を認容し、その間觀心念佛の專稱を勧めたのである。更に、彼の淨土教思想に關して、要集略記以外の他の四五の著述によりその核心を窺ふと、常行三昧念佛に出發し、觀稱雙修に立脚したらしい。先づ『一念彌陀意』によれば、

されば安養即在心中、如是領解するを往生といふ也。自他の念想が南無阿彌陀佛の息につれて法界に歸して後は無念なる是を極樂と云也、乃至喉舌唇の三内に三尊來迎不絕也。息風即心法の體也、心法即彌陀也。彌陀則三體也。三體即法界也。法界即無念也。



と論じ、往生の解釋に特異な點を認める。また『觀心往生論』を見ると、今聊以觀心爲往生業、衆生皆善賢菩薩自體也、……我今所願、四土不二極樂也、此界卽淨刹也、所念三身卽一彌陀也、是心卽如來也、……豈離娑婆別求極樂、何超已心別念彌陀、本來空寂、一體無礙、……彌陀本願、是爲本來惡世凡夫、安養教文、亦爲末法萬年衆生也、然則雖十惡不可卑下、雖五濁不可猶預、唯仰無緣大悲願力、以成決定往生憶想、

と論じ、觀心をもつて往生の業とし、此界卽淨刹の立場にある。また、『阿彌陀觀心集』によれば、

云十界衆生皆名阿彌陀佛也、法身阿彌陀者、本覺如來卽究竟之心也、報身之阿彌陀者、自他受用從因感化之色身也、應身之阿彌陀者、卽極樂世界阿彌陀佛勝應身劣應身也、此三佛有自他化身、俱體俱用常住不變也、……觀彌陀名號體用、阿字無故諸法空寂也、彌字量故萬像森然也、陀字壽故中道實相也、此三諦中攝一切法也。

と判じ、三身圓融に立つて劣應身を化主とした。また『觀心略要集』には、

第二寄念佛明觀心者、雖生濁惡不善世、適得聞彌陀誓願、欲運誠心念佛功、必遂往生之素懷、諸教所讚多在彌陀故也、……念佛名者、其意云何、謂於阿彌陀三字可觀

空假中三諦、彼阿者、卽空、彌者、卽假、陀者、卽中也、自性清淨心、凡聖無隔、因果不改、三世常住、二邊不動、是中道也、

第三款極樂依正功德者、……夫觀彼世界相、勝過三界道、究竟如虛空、廣大無邊際、……極樂一念三千、並畢竟空、並如來藏、並實相也、非三而三、三而非三、所觀淨土如此、能觀身亦爾、

第四辨空假中、蕩執者、欣求西方淨刹者、先可遣此土執也、……觀一塵法界我心無分齊、三千融通、心念朗達、……我身卽彌陀、彌陀卽我身、娑婆卽極樂、極樂卽娑婆、……卽往者、卽生轉惑業心、成極樂之清淨衆心也、……乍住此土、先得同居淨土之氣分、順次往生不可有疑、根性遲鈍故、縱今生之內不能見淨土、遂依此觀力、順次必生上品蓮臺、

第十問答料簡釋疑者、……而心不孤起、必託於緣、假文助意、觀心不亂、旣調散心於一境、必遂往生於三輩、

と説いてゐる。その他、『自行念佛問答』、『往生極樂偈』、『眞如觀』等に於ても、同様に觀心中心の念佛を唱導したやうである。もとより、天台教學が彼の思想の基本概念をなしたもので、その上に觀念を主とした念佛觀を組織し、平安朝末期に於て旣



に淨土教最初の基礎をかためた。蓋し古來の淨土家が直ちにとつて、自家藥籠のものとしたについては、更に吟味する必要がある。

序に、僧肇の『義疏』一卷あつたと長西錄等につたへてゐるが、もとより眞偽未決である。堯慧の『私集抄』上に三經說時前後を問答し、肇公の小經疏の「准道理者、大前觀後、先說令知、後修生業故、以事推者觀前大後、異訣經云、阿闍世王太子聞說二十四願故」を引き、また僧肇について「羅什三藏入宿隨一非、卽是唐朝僧肇也、玄奘新譯攝論等引、科判大體通讚疏同見、恐同名異體」とある、多分大綱鈔によつたものだらう。了慧の『大綱鈔』に諸師異釋として、

肇・法・師  
小 善——爲遮期臨終十念、而放逸之念、  
多 善——爲除小時念佛不生之疑、

とある。慧空の『阿彌陀經義要』下本に、僧肇の疏を引用して「次簡小因、良恐衆生曾聞佛說十念卽得往生、我今天命未窮、且當放逸爲遮此念故、言不可以少善根得生彼國、多持齋、多持戒、多念佛、多行檀布施、乃得生彼」とある。果して本文を見たか、或は古い傳説によつたかは不明である。よつて今義疏については一切不明であることを悲しむ。

## 二 大乘基の阿彌陀經疏

大乘基慈恩の著書として傳へらるゝものに、諸記録によれば——義天錄・東域錄・長西錄・諸宗錄——『阿彌陀經疏』一卷、『阿彌陀經通讚』二卷、『阿彌陀經述讚』一卷、『西方要決』一卷、がある。その中多くは眞偽未詳のものである。

長西錄には、小經疏三本を列ね、その各紙數まで明記してある。また東域錄には、阿彌陀經疏一卷、基撰と録し、その割註に「基撰、羅什所譯云々、此疏文義頗與慈恩師異、年來所疑也、此疏有兩本一本、云讚述、共云基師眞偽難定、基下云口決定慶目錄所載同之、讚述者傳法院本、疏者北院本也、不可兩定、圓成寺錄又有基疏一疏」といつてある。かやうに、兩錄の所傳が一樣ではない。

また『靈巖寺和尚請來法門道場具等目錄』には、阿彌陀經疏一卷、大乘基撰とあり。『注進法相宗章疏』には、阿彌陀經疏一卷、大乘基撰、同經通讚疏二卷、同上とあり。『諸宗總錄』には、通讚疏二卷、窺基述、疏二卷、窺基述とあり。『義天錄』一には、通讚疏二、窺基述、疏二卷、窺基述とある。これらの諸目錄を見ても、その所傳に異説がある。

就中、西方要決に至つては古來より多く偽作として判せられたやうである。唯



識宗では、つとに偽作として取扱つた。即ち『同學鈔』十之四、安養報化の下に、「西方要決、通讚疏、學者多疑之、難爲定量證者歟。」と知るべきである。また、かの義天録にもこれを収録してゐない。更に、古來の支那釋家に於ても、これを引用したものを見ないやうである。然るに日本では古くから重要視され、法相宗章疏、諸宗總錄、東域錄等に収録され、加之源信の要集、永觀の往生十因、源空の選擇集、初學抄等に引用され、相當重く依憑されたやうである。だが、彌勒頌私記、彌勒持會鈔の作者である仁和寺濟暹が、慈恩著『觀彌勒上生兜率天經讚』の研究の結果、この要決を評して、慈恩の眞面目に違するものだとし、恐らく假託の偽作だらうと判じた。これは、良忠の『往生要集記』第三によつて見ることが出来る。この濟暹の評釋に對する良忠の會釋また見るべきものがある。要決の眞偽問題は今の論文に直接交渉をもたないから、他日の討究にゆづり、『經疏』について一瞥しよう。

『經疏』は、後批によると、福州開元寺常契和上、以大中七年九月日捨與珍、(圓珍)と見えるから、多分圓珍の將來にかゝるものだらう。圓珍目錄中『福州溫州台州求得經律論疏記外書等目錄』に、阿彌陀經疏一卷がある。それは、智者の疏ではなく、慈恩のものだらう。

本疏は玄談として七意をあげてゐる。第一叙佛身、第二叙其土、第三叙不退轉、第四叙偏讚之心、第五叙體性、第六叙部類宗趣、第七判釋文義がそれである。

第一叙佛身に於ては、攝大乘論、入大乘論、大乘同性經、觀經、鼓音經、無量壽經、觀音授記經、並に、眞諦、波頗、(波羅頗迦羅密多羅の異稱、續高僧傳第三參照等)の異説を會し、諸の往生するものは、機根の程度によつて報化兩身を見ることを述べて、西方佛身の地位を判定した。第二叙其土の條下に於て、先づ、淨土の種類をあげ、法性土、自受用土、他受用土、變化土とし、その各の相狀を述べ、佛地論を引證し、西方には二土あつて、登地の菩薩は他受用と見、地前の往生者は變化土と見ると判じ、更に華嚴經、首楞嚴經、觀音授記經、大阿彌陀經を引用して衆生の往生は化土にありとし、次に二乘女人の生不について、淨土論、平等覺經、阿彌陀經、鼓音經を引用してその得生を證し、次に攝論の別時意を會通し、攝論別時意には二意あつて、その一は、彼土増上樂處は少福にしては能く生ずるものでないことを明し、その二に、衆生多く道を修せずして、空しくたゞ願のみを發するを見て、その不心得をさとしたものであるとした、また瑜伽論の三界の攝にあらずといふを會して、三界攝にあらずとは、三界に異なる意味であるとし、佛地論を引證し、更に深密經の三地以上のもの彼土に生ずるといふ文を



あげてこれを會し、西方淨土はたゞに初地以上の淨土のみならず、凡夫二乗もまた生ずることが出来るから、化土及び受用土であると結んである。佛身佛土論については、義林章七本末に詳細なる批判がある。今の佛身佛土論は全く義林章のそれと同じ筆格である。第三叙不退轉の條下に於ては、彼土には三惡道なく、貧窮生老病死なく、國土清淨であつて、百寶莊嚴の土であるから地勝である、不退はひとへにかの地勝によるものであるとし、婆沙論の五退具説を引用し、彼土は迷愛なく、染心なく、惡友がないから不退轉位に至るのであると論じ、瓔珞本業經、彌勒問論、智度論、資糧論等により不退轉の三處を述べ、觀經に準じて初地得忍の不退を説き、不退は自ら成佛を意味するものだとし、念佛によつて、無始の惡業を轉じ、無量の惡業を遮止し、無量の功德を生じ、生れて彼地に至つて、方に煩惱を斷じて、然る後に漸々に不退を得るのだと結論した。第四叙偏讚之心の下には、十方無淨土、十方有淨土の説相は凡小の進路をあやまらしむることあるによつて、西方を偏讚したものであると説いた。第五叙體性の下に於て、攝論、金剛般若論を引き、佛及び菩薩の唯識智をもつて土體とするので、また佛地論により、佛自在の無漏心を體とすといひ、また、佛大慈悲願力無分別後得智を體とすると決した。これまた、義林章七末の佛土出

體論と風格を同じくしてゐる。第六、叙部類宗趣の下に、觀經、無量壽經、小經、鼓音經等は淨土をもつて宗としてゐるが、就中、觀經は定散二善をもつて宗とし、無量壽經は淨土を宗とし、小經の如きは六方證誠により斷疑證實をもつて宗となし、鼓音經は轉業護難を宗とし、而してこの四經の説相は自ら次第をなしてゐるものだと論じてゐる。

第七判釋文義の條下に於て、ことに留意すべきは、正説分であつて、文段を六節に分別して、一標淨土果、二舉淨土因、三引六方以證誠、四指三生以顯實、五他述希有、六自叙甚難と科し、從是西方の下に、清淨覺經、觀經によつて日沒處を西方とする義をとり、隨願往生經、涅槃經、維摩經により西方の偏讚の所以をあかし、觀音授記經、清淨覺經、無量壽經、菩薩處胎經等により、西方の遠近を釋し、更に無量壽經等により國號を定め、導師垂化を論じてゐる。進んで淨土因をあげる一段に、少因を簡び多行を陳べ、此の文と攝論別時意と相應するといふ有人釋を破して、今の專念佛は現に十惡を離れ、一念に八十億劫の生死の罪を除く功德があるから、唯願ではなく行も具足するものである。この意味からして、全く別時意ではないと和會して、十住毘婆沙論、占察經、文殊般若經、觀佛三昧經、鼓音經、平等覺經、大阿彌陀經を引證してゐる。



本疏は多分慈恩の眞作だらう。本邦での古い目録中には眞僞撰を疑うたものもあるが、先づ確實な資料のないかぎり眞撰として取扱ふ方が自然だらう。

次に『通讚疏』は、後跋によると、祐世僧統義天、於元豐元祐之間、入于中華、求得將到流通之本也とあつて、日本に傳へられたのは永長二年三月二十三日であるとのことである。さて、本疏の玄談に六門を分別し、就中、第二の宗旨をあかす下に、經論を判じて四宗ある中、阿彌陀經は應理圓實宗に收められて淨土を宗と爲すのであるとし、此經は大乗所攝三藏中菩薩藏に收められ、十二分中無問自説の教であると判じた、第三經の體用を彰す下に、教體について五門を立て、一は攝相歸性門で、眞如をもつて體とし、二は攝境從心門で、一切唯識をもつて體とし、三は攝化從實門で、相應を色心々所に攝歸して體を判じ、四は體用別論門で、能緣四蘊を本質相分にをさめ、各別に自他を攝して差別を立て、五は聚集顯現門で、諸行無常四字を聞くやうに、聚集顯現の上に教體を立て、而もたゞ無邊の聲名句文をもつて體とした。今の教體は即ち第五門に當ると述べてゐる。

第四一代判教中の本經の地位は、もとより本經は淨土を詮するをもつて本旨とするのだから、依圓は是れ有、遍計等は無、よつて非有非空教中に判すべきであると

した。而も第五の頓漸判にては、本經は頓教所收と判じたやうである。

本疏中に留意すべきは辨得名の一段である。就中壽命得名の中、壽命は第八識上連持の功德であり、不相應行中に攝すべきで、彼土の主も徒衆もみなともに兩重の生死を捨し、五蘊常身を獲て、悲願無邊身命不盡である。その徒衆に於ても、分段身を捨て、去來の質を離れ主佛と齊等であつて、理に於ては少分の相違もないから、また壽命無量無邊であると成じてゐる。

次に、極樂の因殊について、『經疏』と相似て、十念得生とは懈怠の衆生を接引せんがために、却つて多善因縁を談するので、精進勤學のものは廣略の不同あつても理に於て相違ないことを示してゐる。而して、文殊般若經、觀佛三昧經、鼓音聲經、賢愚經、平等覺經、大阿彌陀經を引證してゐる。

蓋し、本疏は玄談第二別明宗旨の下に、判經論に四宗をあげ、廣く宗を明かす下に、八宗を列擧するが如き、全く『法華玄讚』一本明經宗旨の一段とかはらないところから見ても、恐らく慈恩の眞作ではなく後代他人の僞作だらう。また下卷に往生人に中有身の有無についての問答の答に『群疑論』を引用してゐることもその眞僞を疑ふ典據である。また、その他の條目に於ても、『義林章』文、『上生經疏』、『阿彌陀



經疏』等の諸註の拔萃に外ならぬ。

元照の『義疏』上によれば、唐慈恩法師通讚一卷とあり、王古の『直指淨土決疑集』にも本疏文を引用し、更に、宗曉の『樂邦文類』、大佑の『彌陀經略解』、『淨土指歸』、株宏の『經疏鈔』などにも引用されてゐる。然るに仁岳の『彌陀經新疏』には、その眞僞について疑義をもつたやうである。吾國では多く眞撰として依用したが、前述の東域傳燈録主はその眞僞を疑つてゐる。更に述讚に至つては、その眞僞撰不明なるのみならず、通讚との同異も問題である。

### 三 慧淨の阿彌陀經義述

慧淨の『義述』は智者、基師のそののやうに多く玩ばれなかつたやうだが、吾國では、西鎮の學匠によつて相當重用されたやうである。

入文釋に於て、正宗を明かす下、略二、中五、廣十と分別してゐる。略二とは、一、淨土因果、二、法身因果であつて一經の宗致を大別したものである。その中五とは、一、明極樂彌陀不退之果、二、明發願起行勸修其因、三、明六方諸佛現相證誠、四、明諸佛既證令修獎樂、五、明二土世尊現相讚德であつて、略二のうちから五門に開示したものである。

る。その廣十とは、

一、安樂依報……………自其國衆生至功德莊嚴

一、明寶欄楯林殿  
二、明寶池華光殿  
三、明寶樂神通殿  
四、明寶鳥法音殿  
五、明寶樹搖風殿

二、彌陀正果……………自舍利弗於汝意云何至阿彌陀

一、光明  
二、壽命  
三、徒衆

三、發願往生……………自衆生聞者應當發願至俱會一處

四、往生之行……………自舍利弗至生彼國者

五、諸佛現相……………自東方亦有至上方佛所護念經

六、釋相所由……………自舍利弗於汝意云何至護念經

七、三時願因……………自是故至諸佛所說

八、三生行果……………自於彼國土至生彼國土

九、此佛讚彼……………自舍利弗如我今者至不思議功德

十、彼佛讚此……………自彼諸佛等至甚難希有之事

である。また、その判位を明すについて三意を立て、

一、彼土即阿鞞跋致、此明因強、



二、多有補處大士、此明緣勝

三、阿僧祇劫說、此明衆大、

と述べてゐる。この三意は他の諸註と趣を異にした釋相である。また第六釋相所由の條下に、たゞ此經名彌陀及び諸佛號を聞いて能く持して忘れないものは一切佛の護念を得、菩提に退轉せずと結成した。此疏の眞僞撰等問題にされるほどに重用されなかつたやうだ。蓋し慧淨の傳記などより推斷して、恐らく彼の眞撰だらうと思はれる。

#### 四 元曉の佛說阿彌陀經疏

『疏』によれば、三門分別をもつて玄談とした。第一大意、第二經の宗致、第三入文釋がそれである。

大意に於て、牟尼善逝は此の穢土に現れ、五濁を誡めて往生を勧め、彌陀は彼淨國を御し、三輩を引いて生を導く、此經は兩尊出世の大意、四輩入道の要門であるとして淨土の願ふべきを示し、妙徳の歸すべきことを讃じてゐる。これ『無量壽經宗要』の大意と同じ筆格である。次に一經の宗致を辨じて、三界を超過する二種清淨を

もつて宗と爲し、諸の衆生が無上道に於て不退轉を得るをもつて意致とした。二種清淨とは淨土論に所謂器世間清淨と衆生世間清淨とであるが、この清淨に入るには四門の分別がある。通論せば極樂世界はこれら四門を具するのであるが、その中、この經宗は正しく第四正定聚門である、即ち無量壽經所説のやうに無退のものがこの門に入るので、邪定不定聚は遮簡せらるべきである。とはいへ、一面また、不定聲聞及び凡夫も生ずることを得るのであると論じてゐる。

入文釋の中、依正二報を明かす下に、淨土論等により、所謂三種莊嚴二十九種を細別し、修因を明かす下に、菩提心の有無によつて多少善根を判定したやうである。即ち大菩提心は多善根を攝してもつて因縁となし、得生の因縁を定判して、無量壽經に九品の因を攝して三輩とし、その中みな發菩提心を有するからよく多善根たり得るのであると説いてゐる。

彼の淨土教としては、外に『無量壽經宗要』一卷、『遊心安樂道』一卷がある。彼の學系は華嚴教系に屬し、廣く性相、有空、兩道に通じた學匠であつた、義天錄によれば數十部の著書を列してゐる。従つて、豊富な思想から生れた彼の淨土教もまた、甚だ複雑なものであるが、就中、大小二經疏によれば、菩提心を正因とし、念佛等を助因



として觀行の上にその基礎を置いたやうである。

### 五 智圓の佛說阿彌陀經疏

智者の義記を倭人の假託として疑つた智圓は、確い自信をもつて天台教學を基礎として本經を註したやうである。本疏の玄談に、

此疏之因起、予忝學天台之道、誓欲用三觀法門、撰十疏以伸十經、以爲法施之資焉。筆削之功已及其七會、臥疾經年、慮石火不久過隙難留、有負疇昔之心、於是乎遂扶羸隱几、續成其三、卽無量義、普賢觀及此經也、乃至爲往生之先容、乃至予行年四十六也。と、本疏の起因知るべきである。

先づ五重玄義をたて、本經の名義を釋し、無量について四義を分ち、一は光明照耀無量、二は壽命數限無量、三は大小弟子無量、四は一生補處無量であるとし、而もこの四義悉く本經文に含まれてゐるから、本經こそ名義相應の經典であることを述べ、釋迦彌陀二尊の慈照をたゞへた。次に體を辨じて、方等實相を經の正體とし、次に、その宗を明かして、信願淨業を經の宗致となすと論じ、また、その用を論じて、捨苦得樂にありとし、最後に教を判じて、この教既に聲聞弟子を對告とすれば、初乳頓說

ではない。而も衆生作佛を談ずるから酪味小乘教ではない、また、諸法皆空を説かないから、熟蘇般若でもない、更に、二乘開會を談じないから法華涅槃とも異なる。この意味からして、第三生蘇の方等大乘に當るべきだと論定し、觀經と今經とを比較して、觀經は定業圓機、然るに今經は散善、偏漸の機、その勝劣は自明のことであるとした。

入文解釋中に於て、二報莊嚴の下に、故名極樂とは娑婆備に衆苦あるに對して極樂の名を得たのであるとし、若し四土について論ずれば極樂の樂未だ極らざるものがあるとした。その四土とは凡聖同居土と、方便有餘土と、實報無障礙土と、常寂光土とであつて、究竟寂光こそ眞の極樂といふべきである。かくて、凡聖同居土への得生を勧める眞意は、最後の常寂光土に誘引せんための大聖の善權であるとした。次に正報を明かす下に於て、釋迦を劣應身とし、彌陀を勝應身と判じ、次に勸願生彼國の下少善と多善とを並べ、共に念佛に對し、少善とは、等閑の發願、散亂の善稱名をいひ、多善とは、名號を執持し、日限を要期するところにあるとして、修因の感相と顯益とを分別したやうである。執持名號を註して、「執謂執受、持謂任持、信力故執受、在心念力故任持不忘」といひ、西資抄にもまた這般の消息を釋して、「由在心不忘、口



常稱名」とある。(義要下本による) 高祖化卷本にこの執持の釋相を借引せられたことは注意すべきことである。更に擧難勸信の下に於て、難信之法の經文を註して、一日名號を執持して命終すれば即ち極樂に生じて不退菩提を得と説いて、この少善根をもつて此の利を獲ることは難信である。されば凡夫賢聖等すべて高下なく、心淨土淨であつて、超越須臾にして極樂に生ずるが如きは甚だ信じやすきところであるが、若し迷深執重のために聞いて受けざれば難信であると結んでゐる。

「刻彌陀經義疏序」——正徳甲午秋蓮光院沙門光榮謹書に、孤山圓師撰彌陀經義疏、後又鈔之名曰西資、吾邦未見流行、學者憾焉、比偶獲義疏訂正鏤刻、使學者免傳寫之勞、他日若有得鈔者、與此疏並行于世、則在西利行者、豈不大資哉竊望焉、と、その本邦流傳史知るべきである。

### 六 元照と戒度の佛說阿彌陀經義疏聞持記

元照の『義疏』に、「一乘極唱終歸咸指於樂邦、萬行圓修最勝獨推於果號、乃至、一時圓證於三身、萬德總彰於四字」といつたが、これ即ち彼の觀經疏に於ける觀佛思想が、やがて一轉して小經疏に於ては念佛の功德を唱導勸信したことを明かにするものである。

その玄談に於て、世尊一代の名教、大小等、異るところあつても、みなこれ教理行果を出でないものであつて、教に因つて理を顯はし、理に依つて行を起し、行に由つて果を克するので、四法でもつて盡さるものがないと判じ、その教興を論じて、大本經の「如來以無蓋大悲、矜哀三界、所以出興於世、光闡道教」の文を引用し、正しく本經の出世元意を明かにし、五意に略言して、

- 一、欲令衆生知娑婆苦、求出離故、經言彼國衆生無有衆苦、
  - 二、令知佛境界生忻慕故、下明依正莊嚴勸生我國、
  - 三、令攝心安住念佛三昧故、下云聞說阿彌陀佛執持名號一心不亂、
  - 四、令破障脫苦得清淨樂故、下云是人終時心不顛倒、即得往生、
  - 五、令生彼國成就菩提故、下云是諸人等皆得不退轉、
- と述べ、また、釋教相の下に、「一切淨土教門皆是大乘圓頓成佛之法定、非偏小如別委論」(觀經疏)と嘆じ、本經は、彌陀修因感果依正莊嚴不思議功德をもつて所詮の理となすとした。次に、淨業について多種をあげ、

#### 一、觀經三福妙觀、



- 二、大本經、一日一夜懸繒幡蓋、十日十夜奉持齋戒、
- 三、大悲經、一日稱名展轉相勸、
- 四、般舟經、一日若過繫念現前九十日中恒不坐臥、
- 五、鼓音聲經、十日十夜六時禮念、
- 六、陀羅尼集、誦諸神呪、
- 七、大法鼓經、但作生意、知有彼佛、

とし、權巧赴機、行法一ならず、從つて教門異なりと雖も往生せざるものなしと結し、次に經文の要例をつかねて、一、心起忻厭、厭苦忻樂、二、身須西向、正立合掌、三、克期日限、一日七日、四、繫心佛境、專一不亂、五、期死無退、決誓求脫、となし、この稱名十念に至つて往生を得、況や一日七日に於てをやと斷じ、更に果を明す下に近果、遠果を分ち、近果とは、經文の「是人終時心不顛倒、即得往生極樂世界」の意味であり、稱佛によつて、業を結び因を成じ、この穢苦を捨て、彼の淨業を感じ、即ち法性淨心を獲て同居淨土に住するものだとし、遠果とは、經文「衆生、生者皆得不退阿耨菩提」の註であつて、彼國に生じ終つて、聞法得忍し、菩提道を修し、斷惑證眞、究竟成佛を證して、かの清淨法身を證し、法性土に居するものだ論成した。

入文釋に於て、「無有衆苦但受諸樂故名極樂」の一段を註して、無有衆苦とは娑婆に對顯して忻厭を生せしめ、彌陀淨土は、境界殊絶であり、聖賢同會、聞法悟道、壽命永劫、不退菩提であつて、諸の勝事を具しその樂窮りないから極といつたのであるとし、彌陀名義の下に於て、今この淨土の彌陀は正に應身であつて、その長量を示したものとし、大本の聲聞菩薩天人之衆壽命長短亦復如是を引證して、及人民の意を註釋してゐる。更に行法を示す一段に於ては、如來持名功勝を明すために、先づ餘善を貶して少善根となし、布施、持戒、立寺、造像、禮誦、坐禪、懺念、苦行等の一切の福業は、正信廻向願求なければ皆少善根であつて往生の因にあらずとし、若しこの經に依つて名號を執持すれば決定して往生するから、即ち稱名は多善根多福德であると判じて、襄陽石經を引證してゐる。——襄陽石經については別稿參照——而して、若し念佛を貶するものあらば、未だ達人ではない、常に念佛すれば、空に滯らず、二邊を超越して中道に從容し、念々に彌陀法身に契合し、聲々薩婆若海に流入し、臨終に上品上生を決定するので、心淨佛土淨の深意窺ふべきであるとし、衆生心もとより是れ佛であるから、彼佛を專念するので、衆生心は未成佛であり、彌陀佛は已成佛である。未成の佛は、久しく欲界に沈み、煩惱具足し、杳として出期なく、已成の佛は久しく菩提を證し、威神



具足で能く物護となると説き、自らの未成佛をもつて他の已成佛を求めて救護を受けしめるやうに諸經には念佛をすゝめたものである。依て衆生にして、若し念佛せざれば、凡聖永く隔て、長く輪廻に處すと遮し、念佛の修進を勧め、その誦持の益深大なることを示し、念佛すれば、聖徳識心に攪入して永く佛種となると、現因と菩提證得の來果とを明示した。最後に、念佛の法門は、愚智を簡ばず、豪賤を擇ばず、久近を論せず、善惡を擇ばず、これ乃ち、具縛の凡愚屠沽下類のものゝ、刹那超越成佛法と結嘆した。

高祖行卷六十九丁に義疏の序文「一乘極唱乃至萬德總彰於四字」の文と、「況我彌陀、以名攝物乃至信知、非少善根、是多功德也」の文と、「正念中、凡人臨終乃至下文勸生其利在此」の文との三文を引き、名號最勝、全德施名、名號攝化、臨終勝益の證文とせられた、また、信卷本六十八丁に、同義疏「他不能爲故甚難、舉世未見故希有」の文と、「念佛法門乃至可謂世間甚難信也」の文と、「於此惡世乃至爲二難也」の文と——疏文と信卷引文と文左右あり——「承前二難乃至聞而信受」の文とを引用して、惡世成佛難、惡世說法難、刹那成佛法についての證文とせられたやうである。また、戒度の聞持記下の「不簡愚智乃至豈非難信」の文——記文と引用文との間に文に左右あり——をもつて轉凡成聖法を引證せられた。

元照には、淨土思想に關する多くの著述がある。就中觀經義疏は有名なものである。彼の多くの著書より見れば、廬山終南の祖述者であるが、また遵式等の流れをも汲んだやうである。彼の思想の流れを見ると、觀佛主義より念佛主義へ、更に念戒一致の實現にあつたやうである。戒度は全く元照を祖述したものである。

### 七 株宏の佛說阿彌陀經疏鈔

株宏の『疏鈔』は、元照、戒度の疏、聞持記會本のやうな體裁をなしてゐるから、株宏の疏を門人等が註疏したのか、或は何人かの疏を株宏が註釋したのではないかと疑つて見たが、疏文玄談四の述意の下に初愧己不徳の標舉で、「株宏末法下凡、窮陬晚學、罔通玄理、素鄙空談、畫餅何益、饑腸燕石難誣、賈自」というてあるから、所謂疏は株宏のものだらう。その鈔に至つて、急に速斷できないが、また株宏のものだらう。或は株宏が自著の疏を更に論義したものを門人等が編輯したのかも知れぬが、多分株宏の所論であることだけは認めてよい。智旭の要解には、「古來註疏代不乏人、世遠就湮、所存無幾、雲棲和尚著爲疏鈔」とある。これ如上の推斷を扶けてあまりあるものである。



今疏鈔を大に分つて三となし、初は通序大意、二は開章釋文、三は結釋呪意として古來の序、正、流通に順じて三分説とした。通序大意の下五門に分ち、明性、讚經、感時、述意、請加とした。讚經の下で、起信論の一心二門の説相を採り、淨土の功德を總論し、特に持名を要となすことを示し、述意の一段に於て、前に引いた愧己不徳をあげてゐるが、この文によつて彼の造疏の趣旨を知ることができる。

更に、開章釋文に於て、華嚴玄談の十門分別、並に天台の五重玄義によつて十門を分別した、即ち、一、教起所因、二、藏教等攝、三、義理深廣、四、所被階品、五、能詮體性、六、宗趣旨歸、七、部類差別、八、譯釋誦持、九、總釋名題、十、別解文義である。凡そ一代時教總じて論ずれば、みなこれ、衆生をして佛知見に開示悟入せしめんがためである。今この經は念佛心をもつて、直ちに佛知見に悟入することを指示したものである。而して、此經に十義あつて、

- 一、大悲憫念末法爲作津梁故、
- 二、特於無量法門出勝方便故、
- 三、激揚生死凡夫令起欣厭故、
- 四、化導二乘執空不修淨土故、

- 五、勉進初心菩薩親近如來故、
- 六、盡攝利鈍諸根悉皆度脫故、
- 七、護持多障行人不遭墮落故、
- 八、的指卽有念心得入無念故、
- 九、巧示因於往生實悟無生故、
- 十、復明徑路修行徑中之徑故、

と明示し、この經の教起所因を詳説して、その十義の各義について詳細な説明を加へてゐる。次で藏教等攝の下に於て、三藏、二藏、賢首の五教、十二分教の三項について今經を判じ、正しくは頓教、少分圓教に屬すとして、その理由を持名卽生、疾超速證、無迂曲の故に正しく頓教に屬すとし、一心不亂は正しく無念の故に頓の意自ら明かであるとして論じ、また、分屬圓教といふは、此經は分攝圓であつて、圓の少分を得するからである。また、華嚴全圓に對し、此經並に大觀二經の分屬圓を比較して、十事を立てゝゐる。つゞいて、旁通の一段に觀經と諸經とをあげ、淨土三經の交渉から、淨名、法華、文殊、大品の諸般若等の關係を述べてゐる。

更に、宗趣旨歸を論じて、古來の異説をあげ、正意として、依正清淨信願往生を宗趣



とし、また詳しくは教義、事理、境行、行寂、寂用の五對をもつて宗とすると論じてゐる。また、その部類差別に於て明部の下に二種即ち大本と此經をあげ、明類の下に觀經、鼓音王經、後出阿彌陀偈經をあげ、その非部非類の下に華嚴、法華、起信等をあげてゐる。

總釋に入り、佛土をわけて四種とした。即ち一に常寂光土、二に實報莊嚴土、三に方便有餘土、四に凡聖同居土であつて、極樂は既に菩薩聲聞諸天人民同居の故に同居土である。而も、八德七珍人天濟々の故に同居淨土であるとし、また、慈恩家の三土說をも採用して、一に法性土、二に受用土、三に變化土の三土を認め、今極樂は變化土に當るとしたやうである。その四土說に於ても、機の感見に随つてその所見を異にするものもあり、同居土に於てよく寂光土を感見するものもあると同様に、三土說に於ても、變化土がやがて法性、受用二土に通することもあるべきで、今の極樂は即ち變化土に當るものであるが、そこに自ら受用、法性に通ずるものがあると判じた、この判によれば極樂は通報化といふ義に讀したやうである。

正報、化主、化伴を明す下に、光壽二無量について、先づ、光明に智光と身光とをわけ、また光に常光と放光とを區別し、その光の所因を萬德所成と本願所致との二に開

いたやうである。而して、自受用身は眞法界をてらすから智光といひ、他受用身は遍く大衆を照すから身光と名づけたのである。また、その壽命無量については佛壽を三壽にわかち、法壽と報壽と應壽とし、壽は受の意で、法身眞如は諸法を隔てないから受といはれ、報身は境智相應するから受であり、また、應身は一期報得百年不斷の故に受といはれ、法身は如理をもつて命とし、報身は智慧を命とし、應身は因縁をもつて命とすと説き、今經の佛壽は正しく無量の無量であつて、自性寂照不二の阿彌陀佛であると判じた。

また、起行の下に、元曉の説と元照のそれとの矛盾を指摘し、彼國に生れんと欲するものは多善多福を必要とする。然るに、持名は善中の善、福中の福、發菩提心の故に彼國に生ずる大因縁であるとした。善中善とは五菩提心、即ち發心菩提、伏心菩提、明心菩提、出到菩提、無上菩提を具するからであつて、福中福とは、彌陀の萬德名號は福を期せずして福己に備り、持念力をもつては、自然に諸惡不作衆善奉行の德があるとした。

その正行を示す一段に於て、彌陀名號は念境であり、執持一心は念法であり、一日七日は念期であるとし、念境とは、彼佛萬德成就して淨土の攝生があつたのだから、



阿彌陀佛の四字洪名をもつて所念の境とし、念法とは、既に聖號をきけば必ず執持する、聞いてこれを受け、勇猛果決不搖奪の貞を執といひ、受けて永く守つて遺忘せないので持といふのである。持には、明持——出聲稱念——、默持——無聲密念——、半明半默持——微動唇舌念、呪家名金剛持是也——の意が含まれてゐる、また執持即ち歸命の義を立てたやうである。

また、念佛については種々の別あることを立て、持名念佛、觀像念佛、觀想念佛、實相念佛等である、その中、觀想念佛は觀經の十六觀念佛であり、持名念佛は阿彌陀經の執持名號であるとし、これによつて他の諸念佛を統綜することができると高調したやうである。

更に、聞佛名と執受と持宗とを、次の如く聞慧、思慧、修慧に配當してゐる。凡そ、佛名を説くことをきいて心疑二なければ即ち信である。信じ已つて執じて心に樂欲を起すは即ち願であり、願じ已つて持して勤精進なれば即ち行であるとし、然るに、今、四障あれば能く執持すること能はずとして、鈔に四障の詳細な説明を加へてゐる。この四障を離れたものは精進に名號を執持し、一心不亂に至ることができると説いた。

念期とは、一日至七日ことであつて、即ち所剋定の期要である。この期要は機の利鈍によつて異義にわたることを示し、即ち、大本經は十日、聲王經は十日、大集經は七七、般舟三昧經は九十日等、また少なきは大本經の一日、觀經の十念等であると説き、而もこの七日は必ずしも臨終に局らず、平時にもかくの如き定力あるものは必ず彼國に生するのであると論斷した。

要は、一心不亂は執持の極であり、やがて一經の要旨である。この四字は一則不亂、亂則不一、純一不雜、精一無二の類であつて、華嚴十廻向第四の文に「一心者專注正境也、不亂者不生妄念也」とあるによつても、その意知るべきだとし、また、事理の「一心不亂をわかち、事の一心とは佛の名號をきいて憶念し、念々相續して、無有二念のうち」に「信力成就することはいひ、理の一心とは、自の本心を獲るから一心と名づけたもので、それを更に二門に分別し、一は能念所念更に一物にあらず、唯一心と了知して、定門の攝に屬し、慧門に攝せないもの、二はこの一心は非有、非無等の四句を離れた一心であつて、慧門に攝屬し、定門をも兼ねるものとした。而してこの理の一心は、文殊一行三昧、華嚴一行念佛、一時念佛、また、起信論の眞如法身觀等であるとし、更に、觀經の三心、起信論の三心、淨土論の三心、乃至、華嚴の十心、寶積十心、淨名の八法、徳



雲二十一念佛門はみなこの理の一心の中に具するものだと判じ、この一心こそ菩薩の念佛三昧であり、達磨直指の禪であり、心王心所無一である。よつて、今至心に阿彌陀佛を念すれば八十億劫の生死の重罪を滅することができると結んだ。而も、已上の事理二持は或は漸進、或は頓入、機に隨つて不定であるとし、感果の段に於て、持名一心不亂のもの、命終の時には必ず佛現前して、自力佛力感應道交するものであるとかたつてゐる。卷四の最後に求那跋陀羅譯『拔一切業障根本得生淨土陀羅尼』を結釋として置いて、更に專持名號の持呪にすぐれることを偏歎した。已上株宏の經疏鈔の概觀であるが、古來の經疏中、最も詳細なる註であり、その間、華天密禪と念佛の交渉を細論せるところより本經疏としてはかなり重要なものの一つである。

## 八 智旭の佛說阿彌陀經要解

智旭の『要解』もまた、その他の多くの彼の著述より見て、かなり複雑な内容を孕んでゐるものである。彼の淨土教は三經中阿彌陀經中心の淨土教であつた、即ち最初に持名の一法普く三根に被り、事理を攝し、宗教を統ぶることの不可思議を讚

じ、玄談に於ては、天台の釋義によつて五重玄義を立て、智圓の彌陀經疏に則り第一釋名、第二辨體、第三明宗、第四力用、第五教相に分科したやうである。

第一釋名門に於て、この經は能說所說の人をもつて名となす、釋迦は能說の教主、彌陀は即ち、所說彼土の導師、四十八願を以て信願念佛の衆生を接受し極樂に生ぜしめ、永く不退にかなはしめるものであるとし、第二辨體の下に於て諸大乘經はみな實相をもつて體とする。即ち實相とは現前一念の心の自性であつて、これは、内にもあらず、外にもあらず、中間にもあらず、また、非現、非去、非來であり、また、非色、非香、非味、非觸、非法であり、一切緣慮分別の相を離れた緣慮分別のものであり、離一切相即一切法である。その實相の體は非寂非照であり、また寂にして恆照、照にして恆寂である。強ひて寂光土と名づくべきであり、また清淨法身であり、同時に報身であり、また應化身であり、寂照不二、性修不二、身土不二の物體であると説き、第三明宗の下に於ては、此經は信願持名をもつて修行の宗要となすとし、信は則ち信自、信他、信因、信果、信事、信理、願は則ち厭離娑婆欣求極樂、行は則ち執持名號一心不亂である。その信自とは、我が現前の一念の心は本と非肉團、非緣影であり、また終日隨緣、終日不變で、十方虛空微塵國土もとより我が一念心中所現のものである。我れ今、昏迷



倒惑のものであるが、苟もよく一念廻心せば、決定して自己心中本具の極樂に得生すること疑慮なきをいひ、信他とはかの釋迦、彌陀二尊の教勅に誑語、虚願なく、六方の廣長舌に二言なきことを信することである。信因とは、散亂の稱名たりとも猶ほ成佛の種子となると深く信じ、況や一心不亂に於ては必ず往生淨土の大因となると信すること、信果とは、淨土の上善聚會はみな念佛三昧より得生したものであると深信すること、信事とは、今現前の一念は不可盡であるから、依心所現の一切十方世界また不可盡である。この意味に於て極樂國土は定んで十萬億土の外にあつて最極清淨のものと信するのである。信理とは、十萬億土の遠方にある淨土も、實は我が今の一念の外に出でずと深信するのであつて、茲に於て、全ての事は即ち理であり、妄即眞、修即性、他即自と深信して、かくの如く信じ終れば、娑婆即自心所感の穢、極樂即自心所感の淨をよく體認するものであるとして、智禮の妙宗鈔を引證し、信願持名は一乘の眞因、四種の淨土は一乘の妙果、かくて、信願持名を本經の正宗と爲すと論斷したものである。

第四明力用の下で、往生不退を論じ、得生四土の相を述べ、未だ見思の惑を斷せざるものは、散定いづれにか隨つて同居土中に三輩九品に分かれる。若し名號を執

持して事一心不亂ならば、見思の惑任運に落ち方便有餘土に生れる。若しまた名號を執持して理一心不亂ならば、無明四十一品斷により實報莊嚴淨土即ち分證寂光土に生れる。若し無明斷盡すれば上上實報究竟寂光土に生れると説いた。

また、不退については、一念不退と行不退と位不退と畢竟不退との四不退がある。一念不退とは、無明を破し、佛性を顯はし、實報分證寂光に生まれること、行不退とは、見思、塵沙の三惑を破し、方便土に生れ進んで極果に趨ることであり、位不退とは、同居土に在つて蓮華托質永く退緣をはなること、畢竟不退とは定散心、有無心、或解或不解を論せず、彌陀名號を一度でも耳根に觸れたものは、千萬劫の後、畢竟してこの因により度脱するとの意味であると説いた。

第五の教相の下に於て、此經は大乗菩薩藏攝、無問自說徹底大慈の加被するところ、よく未法多障の有情をして、不退に登らしめ、法滅後もなほ特に此經を留めることと百年、廣く含識を度するのである。よつて、此經は絶對不可思議、華嚴の奧藏、法華の祕隨、一切諸佛の心要、菩薩萬行の指南であるとし、茲に明かに、阿彌陀經によつて一切諸經を統合しようと試みた努力が窺はれる。

入文釋に於て、就中、勸立行の下に菩提正道を名づけて善根とし、これを親因縁と



し、種々の助道たる施、戒、禪等を福德とし、これを助縁とし、聲聞、獨覺の菩提を少善根とし、人天有漏福業を少功德と名づけ、これらはみな淨土に生ずべからずと簡び、信願執持名號は一々聲中に悉く多善根福德を具すと讃め、たとひ、散心の稱名たりとも善根福德の量にははかることができない。況や一心不亂に於ては、その善根、その徳不可量であると判じてゐる。

かくて、在家出家を揀ばず、貴賤老少を論せず、六趣四生に拘らず、佛名を聞き得るものは多劫の善根が成熟するのである。聞説阿彌陀は聞慧、執持名號は思慧、一心不亂は修慧、阿彌陀佛は萬徳洪名、この故に執持名號をもつて正行となし、必ずしも觀想參究等の行に涉る要なく、執持名號は簡易直捷である。而も、聞いて信じ、信じて願ひ、願うて執持してこそ正行といはるべきであるとした。

また、念々佛の名號を憶ふ執持について、事持理持の別を立てた。事持は、たゞ西方阿彌陀佛あることを信じ、未だ是心是佛是心作佛の理に達せず、たゞ志を決して願つて生を求むるといふので、理持とは、西方彌陀は是れ我が心具、是れ我が心造、即ち自心所具所造の洪名をもつて、繫心の境となして暫くも忘れないことをいふのである。この二持いづれをもつてするも、若し執持して煩惱を伏し、乃至見思の惑

盡くるに至らば、これを事の一心といひ、また、若し執持して心開いて本性の佛を見るならば、これを理のひと名づけるのである。事の一心は見思の惑のために亂されず、理の一心は二邊のために亂されない、見思惑のために亂されないから、變化佛及び諸聖衆の現在前を感じ、心中また娑婆界中の三有顛倒の心起らず、即ち同居土と方便土との二種の淨土に往生し、二邊のために亂されないから、自受用身及び諸聖の現在前を感じ、心中に生死涅槃の二見顛倒の心起らず、實報、寂光二種の淨土に往生するのである。

かやうにして、執持名號は簡易直捷なれども、また、至頓至圓である。よつて、一念相應即一念佛、念々相應即念々佛であるから、觀想を勞せないと結び、ついで、西方は茲より十萬億土を隔つといふに即生といふ意を問答して、十萬億土といふも、我が現前一念の心性の外ではない、心性もとより内外あるべきではないから、自心佛力の接引に仗して即生といはるべきであるとし、其人臨命等の經文字々皆海印三昧大圓鏡智の靈文であると結歎した。彼の跋語に、

經云、末法之中億々人修行、罕有一得道者、惟依念佛得度、嗚呼、今正是時矣、捨此不可思議法門、其何能淑、旭於初出家時、中略、後因大病發意西歸、嗣復研求妙宗、圓中二鈔



及雲棲疏鈔等書(中略)命余述此要解、余正欲普與法界有情同生極樂等と、要解の造因、出家の動機、淨土思想繼承のあとなどを明示してゐる。

因に『藕益宗論』七の四を見るに、「是以念佛三昧名爲三昧中王、善攝一切三昧、修此三昧凡有三種、一者惟念他佛、二者念自佛、三者自他俱念、修雖有三成功、則一」とある。

一、念他佛とは、阿彌陀の果徳莊嚴を我が所念の境とし、専心注意してこれを憶念すること、名號相好、四十八願往昔洪因等を憶想觀念するのである。

二、念自佛とは、我が現前一念介爾の心、無體無性にして、横に徧じ、豎に窮まり、過を離れ、非を絶し、思議を超え、百界千如種々の性相を具足し、三世の佛と平等無二と觀するのである。

三、自他共念とは、心佛衆生三無差別、衆生はこれ諸佛心内の衆生、諸佛はこれ衆生心内の諸佛であると了知し、彼の果上の依正に託して、我が自の理智を顯はし、感應道交して自他隔てずと證することである。

かくて、『方便多門、歸元無二、隨行一轍、俱得到家、切勿自隔要津』と結ばれた。これによつて見るに、古く廬山の流を汲み、禪、天台、華嚴を始め觀經系統の諸師を祖述して、念佛の内容として、禪教律を融合せしめ、念佛はこれ禪教律の母胎であり、同時に歸

結であることを高調したものである。

已上隋唐以後明代に至るまでの代表的、小經釋について概觀したものであるが、この外元、明、清にわたつて、小經の釋家は多く輩出したのであつて、その著述も、『續藏經』第三十三套第二、第三、第四に輯録されてゐるが、その多くは、如上の八家の祖述に過ぎないやうだから略することにした。

## 九 法事讚について

### 一 序 説

今讚は善導大師の著五部九卷中の隨一であつて、上下二卷より成り、往生淨土の行を修する法事供養の規定を明されたものである。よつて、今讚一部を通して、この規定に關しては、諸經の通説を採用された様であつて、かの唐朝以前の古師の先例を尊重して、之に則つたものが多いやうである。下卷に於ては、特に阿彌陀經を中心とした行持を組織されてゐるが、もとより往生淨土の行持を組織すること以外に他意あつての事ではないのだから、此の一段についてもあながちに一宗の安心にあてはめてとやかう論斷することは、却てその立場を亂すものだと思はれる。



先づ製作の來意といつたやうなことにについては、もとより五部九卷の來意の條下について述べるのが至當と信するが、こゝでも一應その問題に觸れねばならぬ。先哲の間にも詳細この點について論じつくされてもゐるが、四帖の疏は教門を釋し、具疏は行門を明かしたものだらう。いふまでもなく、四帖の疏は、觀經の正意を開顯し、古今楷定をその目的としたものだから、すべて教門に屬するものである。これに對して具疏は大師の自行を明かしたものであり、或る特定の經論の註釋書ではなく、佛前勤行の行儀についての一般的な組織解説であるのだから、正しく行門に屬すべきであらう。

大師の教行二門の立場について考慮すべき點は次のやうである。即ち教門は經說の忠實な註釋であるために、全然經說に準じて廣く諸機を攝する點から正雜二行を分判して往生の行を定められた、かの『散善義』の「就行立信」の釋がその適例である。だが、行門は經說にとらはれず純然たる自行であるから、たゞ、正行のみを自行化他してゐるやうである。かの『往生禮讚』にも、專雜の得失を判じて雜行を廢してひたすら正行をすゝめてゐる。この點は疏と具疏との立場を明示してゐるものであらう。

さてまた、具疏のうちを更に教行門に配當してみると、『觀念法門』は觀佛三昧、念佛三昧を教へたものであるから行門に屬すべきはいふまでもないが、具疏のうちで更に判屬すれば教門に判すべきである。これに對して、餘の三部は純然たる自行門である。そのためか、觀念法門には讚の一字を置いてないが、他の三部はみな讚の字をつけ加へてゐる。就中『往生禮讚』は常途の勤行の作法を明したものであるから六時禮讚と名けられてゐる。『般舟讚』は臨時の行法を明したものであつて、般舟三昧經の所說を中心とした別時念佛の行法解説である。今讚もまた、臨時の行法を示されたものである。

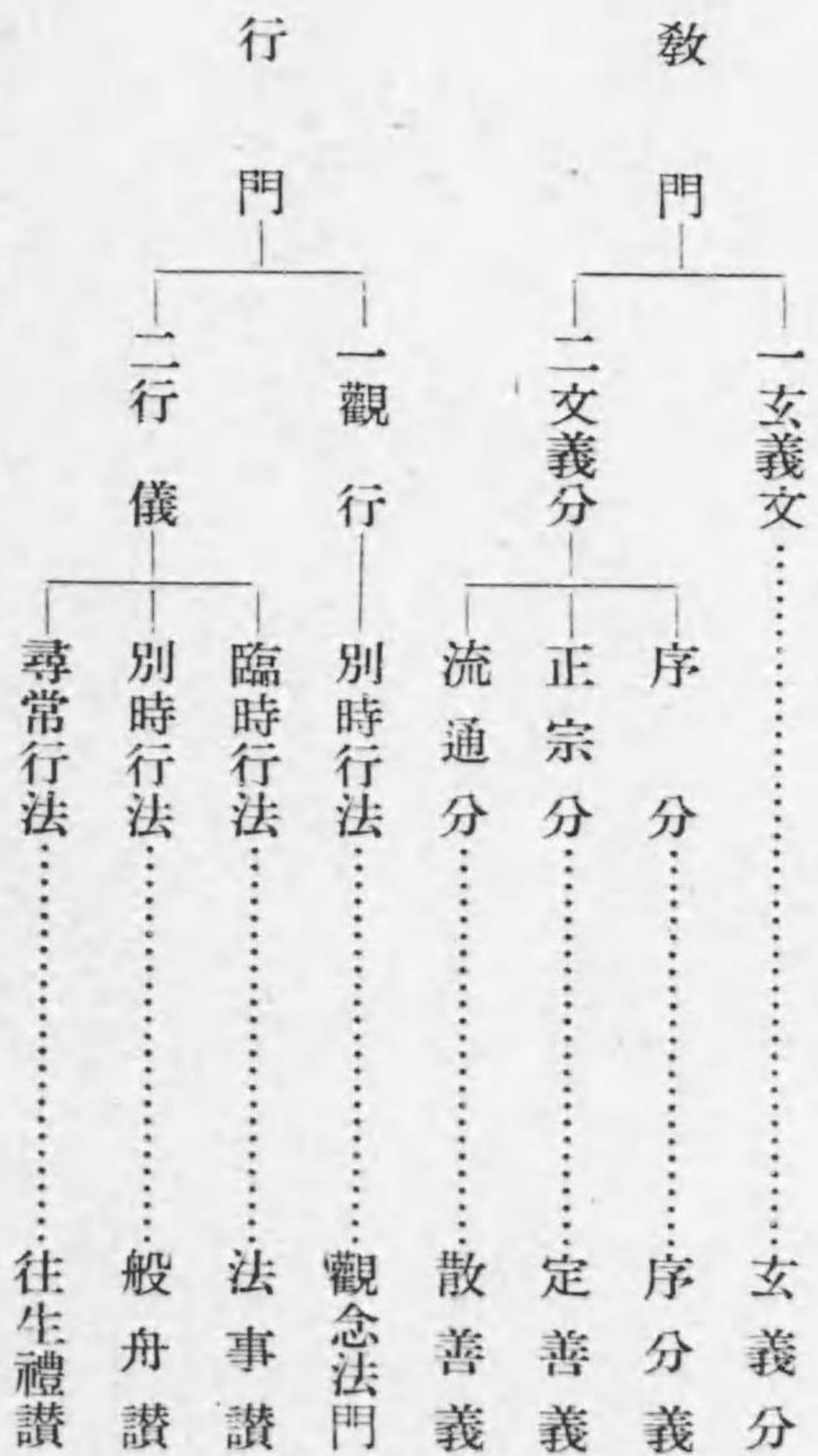
南山道宣の『行事鈔』によると佛事と法事と僧事との區別を述べて、佛事とは佛像を彫刻し修理して佛に供養する行事であり、法事とは經卷を書寫し、讀誦し、行道散華などの行事であり、僧事とは布薩、羯磨、懺悔などの作法である。この道宣の説に従ふと、今讚の法事讚といふ題號が直ちに一部の内容を示すものとして意味をもつことゝなるやうである。

更に、今讚の造由を重ねて窺ふと、願往生法事讚と題號にもあるやうに、願生淨土を自他に勸勵しようがためであり、而も施主道場の恩を報せんがための行持であ



つた。元來、施主の恩を念報することが懺法の規定であつたやうである。『慈悲道場懺法』(十卷)を見ても、第八に五種の恩を説示してゐるが、その第二が施主の恩である。また『釋氏要覽』に於ても四種の恩を示してゐるが、その第四は施主の恩である。更に『五會法事讚』にもこの點について詳しく説き明してゐる。

善導大師著五部九卷を教行二門に配當すると、



善導大師の行時法については三種の行時法があつたやうである。一は臨時行法、二は別時行法、三は尋常法であつて、臨時行法とは一日若くは一夜臨時にこれを

行ふもので法事讚の行法は即ちこれにあたるものである。別時行法とは一日乃至七日、若くは七日乃至九十日、別時にこれを行ふものであつて、觀念法門又は般舟讚の行法はそれである。尋常行法とは一期不退の行儀であつて、往生禮讚がこれにあたるものである。

本疏を五種正行に配當することは良忠上人の私記にその端を發してゐる。私記では具疏四部の前後もこの問題から解決してゐる。法事讚は阿彌陀經讀誦のためであるから最初の撰述であつて讀誦正行にあたり、觀念法門は觀察正行に配し、禮讚は禮拜の規定を示したものだから禮拜正行に當り、般舟讚は讚嘆供養を明したものであつて最後の撰述であると判じてゐる。だが、私記の配當は一應のものであつて、必ずしも定説ではなく善導大師の本意でもないやうである。大體は禮讚、般舟讚、法事讚は讚嘆供養正行に屬すべきであらう。

二 註 釋 書

今讚の註解撰述について、

法事讚私記……………三……………良忠…撰



法事讚私記冠註……………一……………未詳

法事讚私記見聞……………三……………聖聰撰

法事讚私記私鈔……………三……………加祐撰

觀門要義鈔……………二……………證空撰

法事讚祕鈔……………二……………行觀撰

法事讚……………二……………堯惠撰

法事讚積學要義鈔……………二……………實信撰

法事讚甄解……………七……………僧樸撰

法事讚叢林記……………一……………慧空撰

法事讚刊定記……………三……………慧雲撰

法事讚聽記……………三……………僧谿撰

淨土法事讚錄……………一……………惠覺撰

以上は現存のもの、中でことに重要なものである。

三 今讚の流傳

今讚の流傳については古來異論にわたつてゐる。存覺上人の『眞宗血脈傳來鈔』によると『往生禮讚』は最初の頃傳はつたものである。桓武帝の延暦二十四年十二月二十五日傳教大師の將來にかゝるものであつて、これが唐の順宗の永貞元年にあたる。『觀念法門』と『般舟讚』とは、仁明帝の承和六年十二月十九日圓行法師の將來にかゝつたものであつて、それが唐の文帝開成四年にあたり、『今讚』は仁明帝の承和十四年に慈覺大師によつて將來せられたもので、それが唐の宣宗の大中元年にあたり、『四帖疏』は文德帝の天安二年、智證大師の將來にかゝるものであつて、これが唐の宣宗の大中十二年にあつてゐる。

西山の『密要決』には四帖の疏は天長年中に智證の將來にかゝつたものだといつてゐるが、智證の歸朝は天安二年であることは諸記録の通説であるから、或は天長は天安の誤記であらう。また智證將來目錄には僅かに『六時禮懺文』一卷と『六時懺釋文』一卷とであるから、この説は直ちに信じられない。

了譽の『傳通記糝鈔』には五部の疏はみな智證の將來にかゝつたものだと傳へてゐる。

智圓の『禮讚鈔』には、禮讚は聖武帝の天平七年玄昉僧正によつて『集諸經禮



懺儀』として傳へられたものだといつてゐる。

善導大師の滅後凡そ四十餘年を経て、唐玄宗開元年中崇福寺釋智昇が『集諸經禮懺儀』二巻を集録してゐる。その上巻には通じて諸佛を禮讚し、下巻では特に彌陀禮讚の儀規を示してゐるが、全く善導大師の往生禮讚をそのまま引用してゐる。だから、上巻の撰號には「大唐西崇寺沙門智昇撰」と記録してゐるが、下巻には智昇の撰號と並べて「比丘善導集記」として大師の名を出してゐる。ところが開元十八年に至つて智昇が『開元釋教目錄』二十巻を撰して、この『集諸經禮懺儀』を大藏經中に編入したのである。それからまた、西明寺圓照が徳宗の貞元十年『大唐貞元特定釋教目錄』三十巻を撰して、またこれを大藏經中に編入した。

『續日本紀』第十六によると、聖武帝天平七年入唐僧玄昉が二十年にして歸朝し、五千餘巻の經論を將來したやうである。『開元釋教目錄』の編輯の唐開元十八年は天平七年より五年前である。だから、玄昉の將來した大藏經は開元録による五千四十八巻であつたらう。よつてそのうちに輯入されてゐた『集諸經禮懺儀』が正しく傳來されたとせねばならぬ。ところが『大日本古文書』第八の正倉院文書寫經所解の天平十四年九月の條下に『往生禮讚』一卷二十九番とあるから、『集

諸經禮懺儀』の中から下巻の往生禮讚だけ別出したものか、或はその他の著述とともに別行本として傳來したものであらう。その後天平年間に四帖疏や具疏などを筆寫したことが記録されてゐるから、或は既に天平年間に傳來されてゐたのではなからうか。

『黒谷傳』第十蓮華王院即ち今の三十三間堂は、後白川院の御建立にかゝつたもので、後白川院の十三回忌法要の節、源空に勅定があつて、その大導師をつとめられたことがあつたやうだが、その勤行の差定はすべて法事讚に示されたところであつたと傳へられてゐる。その後、善觀、聖光など今讚の行儀を修したらしい。西山派でも、嵯峨二尊院に於て毎年一日二夜にわたり今讚の行儀を修したと傳へられてゐる。

また存覺上人の『二期記』中にも法事讚に則り勤行したことを傳へてゐる。『敬重繪詞』六にも覺如上人の御父覺慧法師の十三回忌を大谷に於て法事讚の行法をもつて御いとなみになつたと傳へられてゐる。

蓮如上人以前は、朝夕には六時禮讚を諷誦して、別時の法事には法事讚を用ひられたやうである。



四題 號

今讚の題號に三種ある。一は轉經、行道、願往生、法事讚であつて、今讚の首題がそれである。二は西方淨土法事讚であつて、上卷の尾題がそれである。三は安樂行道轉經、願生淨土法事讚であつて、下卷の首尾の題がそれである。

良忠上人の『私記』には、各具缺があるが、影略互顯の意であると説き、僧樸師の『甄解』には、たゞこれ具略の異のみで、具にいへば轉經安樂行道西方淨土法事讚といふべきだと示してゐる。かやうに一部の書に二三の別目あることはその例がかなりある。近く往生禮讚にも、往生禮讚偈とか願往生禮讚偈とか、觀一切衆生願生西方極樂世界阿彌陀佛國六時禮讚偈とかいはれてゐる。

そこで、今讚の首題を解説すると、これを五節として見ると便利である。即ち轉經と行道と願往生と法事と讚と節分してみよう。

轉經とは阿彌陀を轉ずることであるが、その轉には轉詠と轉説と轉讀との三義がある。轉詠とは節をつけて讀むことであり、轉説とは經意を説きあかすことであつて、轉法輪と同意義である。轉讀とは單に經を讀むことである。ところで今

の轉經は正しく轉詠の義であつて、經文を諷誦し讚嘆する行儀である。

次に行道とは佛邊を旋繞する意味である。三市或は七市することが今讚一部の行法の中に出てゐる。西域記によると行道は西域の風習として、歸敬の至極であると傳へてゐる。『釋氏要覽』には繞佛旋行といふことだと示してゐる。

次に願往生とは作願門であつて、轉經行道は諸經論の通儀であるが、今讚の轉經行道はひとへに願生淨土のためであつて、全く通儀と特異な深い意味をあらはさうとしたものである。

次に法事とは、淨土の教法と道場の事業といふことであつて、眞實の教法によつて勝れた行業を修することを示したものである。

次に讚は讚嘆の意である。また、讚詠といふ意味もある。

具略三名については、今讚の主質は轉經にあつて、行道も散華も供養もすべて轉經がための前加行である。そこで、上卷は總題であつて、下卷は別題を標したものである。上卷は行道を明かす作業の次第に約して別題を安じ、行道が畢つて後の下卷の轉經であるところから行道轉經といつたものであらう。



## 五 阿彌陀經と今讚

今讚は阿彌陀經の轉讀を主質とした行法であるが、三經の中で特に阿彌陀經を今讚の行法に選んだかといふことについては大師の明白な意見を見出すことができぬ。だが、大師の生涯を記録した資料によつて見ると、大師は生涯この小經を行法の中心とせられたやうである。かの措定の疏の撰述に當つても、日々阿彌陀經を誦すること三徧、また、疏の脱稿に際しても、日別に阿彌陀經を誦すること十徧といはれてゐる。更に、他に勸めて、

或は願じて阿彌陀經を誦すること十萬徧を滿せよ、日別に十五徧なれば、二年に一萬を得、日別に三十徧なれば一年に一萬なり、或は誦すること四十五百徧已上の者願じて十萬徧を滿せよ。

といつて、しきりにこの經の持誦を勧められてゐる。またの傳記によれば、大師は常に信施をもつてこの經の書寫にいそしまれて、その書寫實に數萬卷に及んだといはれ、現に先年、その願經が新疆地方から發見されたやうである。

かやうに、大師が阿彌陀經を尊崇せられた所以を窺つて見ると、この經は、その分

量からいつてきはめて短篇であり、小經とも小本とも四紙經ともいはれてゐる。

『大唐内典録』では、羅什の譯本は五紙、求那跋陀羅の譯本は四紙、玄奘の譯本は十紙と傳へてゐる。かやうに、淨土三經中でいちばんに小部なものであるから、實際の行事としては、この上もなく便利であることが大きな役割をもつてゐるのであらう。また、小部とはいへ、その内容は、一代の結經であり四輩入道の要門であることもまた重要視された所以でもあらう。

大體、小經の組織は、先づ、極樂の方處を出し、次に、依正二報の名義を辯じ、次で、往生人の得益を説き、次に、その行因を述べて一日七日の執持名號を出し、次で、六方諸佛の證誠を擧げ、最後に發願願生が勧められてゐるから、この巧みな組織内容が、私どもの欣求の信を勸發する上に非常に都合がよいといふことが、大師の念願にそつたものだらう。

更にまた、その内容を靜かに讀むと、全體を通じて、よく三佛の大悲が盛られてゐて、ことに、無問自説の點に於て一代諸經の結經とさへ味はれる。

事實、阿彌陀經は、形式内容ともに行持實踐の上から見て、三經の中、特に勝れたものだから、今讚はひとへにこの經を典據としたものであらう。



## 六 讀誦經典

今讀が、その形式内容からいつて、行持の實際に適切である阿彌陀經を選んだといふことについて私の平生の所感を述べたいと思ふ。

昔から、讀誦經典として重要されたものに、阿彌陀經を首めとし、般若心經、觀音經などがある。これらは讀誦用經典としてはまことに典型的なものである。ところで、これらの讀誦經典に對して、講經とでもいふか、講義をする經典も澤山ある。例せば華嚴經とか、法華經とか、解深密經とかがそれである。だが、實際、講經の方には社會性が乏しく、讀誦經典の方は昔から一般民衆に親しまれたやうである。事實經典のむづかしい研究とか、その巧妙な論理の工作といったやうなことは、或る方面に限られてしまつて、一般民衆との親しき交渉がたもたれなかつたやうにも思はれる。

大體、宗教は一般民衆の上にその基礎をもつべきであつて、或る特定の方面にかざられるやうでは、宗教の本來の面目を見失ふものであるかも知れぬ。その點で、佛教の本來の主質も、講經から見出されないで、却つて讀誦經から求めらるべきであらう。とはいへ、講經にしても、讀誦經にしても、その内容に至つては同じ尊い價値をもつてゐることにはかはりがないが、讀誦することそのことが宗教の眞面目に契ふものであつて、讀誦の行持のうち、佛の冀ふところのものを味はふことができ、體得することができるのであらうから、その形式に於て讀誦用に適する經典は、佛教護持の上に重要な役割をもつてゐるものとせねばならぬ。

讀經するといふことは、いつでも、氣分をさはやかにするものであるばかりでなく、佛の心に融け合ふものである。讀經によつてほんとの宗教氣分を味ふことができるのである。

ある寺の住職であつて、一向學問もなく、社會的にも一向活動するでもなく、たゞ眞面目に法務をつとめるだけのものであつた。それがまた、不思議に村人達を力強く感化してゐた。その原由はほかでもなかつたので、ただ、ひたすらに無我に、讀經三昧にしたつてゐたことからであつた。朝となく、晝となく、夜となく、隙さへあれば本堂で讀經したことが、村中へ力強い感化を與へたのであつた。

昔の高僧知識の、あのすが／＼しい讀經の聲が、奥深い典雅な香のたかい古びた殿堂から、さはやかに人びとの耳にかよふとき、すべての人の心のうちから、高雅



な氣分を喚びさますにはおかなかつたと聞いてゐる。

晩秋の夕暮、淋しさにみたされた心のうちへ、あちこちで、無我にいとなんでゐる勤行讀經の聲をきかされたときには、悲しいやら、嬉しいやら、ほんとに自分自身を反省させられることがある。

經典の讀誦は、讀誦してゐるものも、その聲を靜に聞きほれてゐるものも、ともに、佛の慈悲の中に融けこまますにはおかぬものである。

## 七 一部組織

今讚の組織は三段にわかれてゐる。即ち第一段は前行分、第二段は轉經分、第三段は後行分である。

前行分は正しい行法の序曲であつて、この中また五段に分れてゐる。だが、要するに次の轉經分の前提となるべきものである。その五段とは、

一、請護法衆——最初の「奉請四天王乃至直取涅槃槃城」の八句の偈頌である。

この八句はかの玄義分の歸三寶偈の文と同じ筆格であつて、直ちに行法を示したものではない。次の序曰以下の文もまた法事讚の發端を述べられたもので行

儀を説いたものではない。

四天王については『大智度論』五十四『翻譯名義集』十『俱舍論』十一『法華文句』二之二『玄應音義』十九等を参照すればよい。また、四天王等の護持の相については、高祖『化卷』末に、大集月藏分第九諸天王護持品の文を引用されてゐる。奉請獅子王については、先哲の間に異論にわたつてゐるが、佛徳を喻況したものであらう。行法の最初の準備として護法衆を奉請したことは、ひとへに、道場の嚴肅を保つためであつた。

二、法事大綱——序曰以下の文である。即ち行法の趣旨を述べられた一段であつて、常途の「表白」に相當するものである。常途の「表白」はその修行される法會の趣旨を、本尊並びに大衆に對して啓白することであるが、今讚のそれはこの常途の表白とは少しくその趣を異にしてゐて、行法の當初、一般大衆に豫めこの法會の趣旨を徹底させようがために特に設けられたものである。その間、所化の流轉を痛論し、これに對する能化の悲濟をひたすら感佩せられてゐる。

竊ヒツカニオモヒに以れば娑婆廣大にして火宅無邊なり。六道周居重昏永夜なり。生盲無目にして慧照未だ期せず。引導無方なり。俱に死地に摧く。循環來去して



逝水長流に等し。託命投神して誰か能く救はん。斯れ乃ち識含無際にして窮塵の劫更に踰えたり。爾れより悠々として勝縁に遇はんこと何れの日ぞ。上海徳初際如來より乃至今時の釋迦諸佛皆弘誓に乗じて悲智雙行し、含情を捨てずして三輪普く化したまふ。然に、我れ無明障重にして佛出に逢はず。設使同生すれども還りて覆器の如し。神光等く照して四生を簡ばず。慈及んで偏なく、皆法潤に資す。法水に沈むと雖も長劫に由ほ頑し。苦集相因して毒火時に臨んで還つて發る。仰で惟れば大悲恩重くして等く身田に潤ひ、智慧冥に加して道芽増長す。慈悲方便視教宜きに隨ひ、勤めて彌陀を念せしめ淨土に歸せしめたまふ。地は則ち衆珍雜間して光色競ひ輝き。徳水澄華して玲瓏として影徹る。寶樓重接して神光を輝かし。林樹瓔を垂れて風塵雅曲あり。華臺殿瑩して種々希奇なり。聖衆同く居して明なること千日に踰えたり。身は即ち紫金の色相好儼然たり。進止往來空に乗じて無礙なり。若し依報を論すれば則ち十方に超絶す。地上虚空等く皆異なし。他方の凡聖願に乗じて往來す。彼に到れば殊なし齊同に不退なり。但し以て如來の善巧總じて四生を勧めて此の娑婆を棄て、極樂に生せんことを忻はしめ。

専ら名號を稱し兼て彌陀經を誦せしめたまふ。かの莊嚴を識り斯の苦事を厭ふて、三因五念畢命を期とし壽盡二臺に乗じて齊くかの國に臨ましめんと欲す。

まことに尊い教示である。日夜この勸誡を拜誦することを心がけたいものである。かくて、次に行法にかゝらぬ前方便として法事の規則を示して、凡そ、自の爲めを欲し、他の爲めを欲し道場を立せば、先づ須く堂舎を嚴飾して尊像幡華を安置し、竟りて、衆等の多少を問ふことなく、盡く洗浴して淨衣を着し道場に入つて法を聽かしむべし。若し召請せんと欲せん人、及び和讃の者は盡く立し、大衆は座せしめて一人をして先づ須く燒香散華すべし。周章一遍し、竟りて然して後法に依て聲を作りて召請して云へ。

とて、先づ、法事を修する意趣を明して、自他を資益することが法事の目的であることを示し、次で、道場を嚴飾して、身衣を潔淨にし、場内の軌則を明して、入場の作法を示したものである。

三、略請三寶——奉請三寶の一段である。先づ四十八行九十六句の偈頌をもつて略して三寶を召請するのであるが、ついでには先に厭欣を勧めてゐる。



般舟三昧樂願往生大衆同心に三界を厭へ無量樂乃至佛の願力に乗じて西方に往け。慈恩を念報して常に頂戴せよ。

般舟三昧樂とは『般舟讚』の序によれば、般舟とは梵語であつて常行道と翻すべきである。或は七日、或は九十日の間、身行無間の意味である。三昧もまた印度の語であつて定と翻じられてゐる。三業無間によつて心のままに佛の境界を現する。この時に身心すべて悅樂を感じるから樂といつたものであると釋してゐる。『般舟讚』の次文に

三界六道は苦にして停り難し。曠劫より已來常に汲々たり。到る處に唯生死の聲を聞く。乃至一ヒトタび彌陀涅槃國に入りぬれば、即ち不退を得て無生を證す。

と示されてゐる。この釋から見ると、般舟三昧は因であつて、樂は果である。即ち定心念佛の果である。また、願往生、無量樂を一句一句の下に置いたのは、念々に欣求を勧められたものと窺ふべきである。大衆等の一句は厭離であり、乘佛等の一句は欣求である。

若し大衆にして厭心を生じて火宅を出過せんと欲すれば、常に佛願に乗じて西方に往生すべきである。已に西方に往生することを得れば三界を離るゝことを得て、惡趣の體名俱に絶することができる。

次に、正しく彌陀、釋迦、諸佛の三佛の主件を請じてゐる。讚文には、

大衆華を持つて恭敬して立して、先づ彌陀を請じたてまつり道場に入りたまへ等

と、本佛彌陀を最初に奏請することを示されてゐるが、往生禮讚では、釋迦諸佛彌陀の順序に列ねてゐる。これは總より、別に入る次第であつて、今讚は別より總を出す次第である。即ち三寶歸敬の常規には教主たる釋迦を最初に出すべきであるが、今讚は正しく彌陀會の行法を明示したものであるから、彌陀をもつて法事の會主として、釋迦と諸佛とは會主たる彌陀の相伴に影向したものである。もとより三佛同じく不思議功德寶海所現である。三佛のみならずまた觀音等の徒衆までを統請してゐる。更にまた、別に二十五菩薩を奏請して、その護念を請ふた。

この場合の行道の人の威儀行狀を示されて、大衆華をもつて恭敬して立すと示されたものである。

かくて、上來三佛の主件を請じ、二十五菩薩の來會を請ひ、彌陀會の法事を成就し



て、高座に於て彌陀經の説教を請ふことが正に法事讚の正發起であり、これがまた今讚の別式として注意すべきである。

#### 八 難思議、雙樹林下、難思の三往生

西山派、鎮西派、眞宗の間に異義がある。

鎮西派祖良忠は、三往生について二義を立てゝゐる。雙樹林下往生の第一義は釋尊の入滅の場所をあげて、穢土の無常を厭はしめたものであるとし、第二義は雙樹林をあげて常樂我淨の四徳をあらはしたものであるとした。また難思議と難思との二往生について第一義は難思議は極樂淨土の無量の快樂は思議しがたいとの意味であつて、難思とは、涅槃常住の理に住することを讚嘆したものとの意であるとした。その第二義は二往生の目は共に聲明のために句を作つたものであるとした。要するに、三往生の目は欣求淨土を勧めたものであつて、三往生を合じて一類の淨土の證果のこととしたものである。

西山派の説も行觀などによると、良忠の三往生説と同巧異曲である。

眞宗では、三願、三經、三機、三往生と關聯して、非常に重要な問題として取扱はれて

ゐる。就中、三往生説は今讚を典據としたものである。

難思議往生とは、もとより機法因果ともに不思議であるところより名づけられた名稱であり、弘願門行者の往生である。かの十八願の全體施名の尊號は機法一體、修性不二、法を全ふじて成せられた信、生即無生の不思議の果であり、實に妙法妙機妙因妙果である。この意味を難思議往生と名けたものである。

雙樹林下往生とは、要門行者の往生に名づけたものであつて、應化の釋迦佛が雙樹下に於て入滅したことに寄せて化土往生をあらはしたものである。所謂、邊地懈慢の往生であつて、十九願の所建であり、觀經の顯證するところである。

難思往生とは、眞門行人の往生であつて、難思議の議の一字を省いてその失を示したものである。法頓に約すれば難思であるが、その機修は思議に墮してゐるか、その得失は相なかばすることになつてゐる。よつて往生の土は方便化土、疑城胎宮であり、二十願の所建であり、阿彌陀經の顯證である。

この三往生については、『三經往生文類』を指南とすればよからう。以上の三往生の義は略請三寶中の重要な項目である。

四、廣請三寶——略請三寶は偈頌をもつて説示し、廣請三寶は長行をもつて重ね



て請ふてゐる。これは佛典の常途の様式に則つて、重頌の形式である。

この長行の中に於て、廣く三寶を奉請するうちに、別して偈文をもつて觀世音を讚嘆してゐるが、こは正しく、彌陀右脇の侍士であり、極樂の上首の菩薩であるために、諸菩薩の代表として請讚せられたものだらう。また、廣略請のうちに、奉請の一段は、單に奉請といはれてゐるが、もとよりそのうちに、敬禮、讚嘆、供養の行法が附隨して明かされたものと見るべきである。

五、前行道——上來奉請した三寶に對して行道する一段である。行道とは敬慕の意味を貌にあらはしたものであつて、行道行は即ち歸敬の至極だとされてゐる。七周行道などはことに慇懃なものであつて、而も、その間、讚文をもつて佛恩の廣大なることを歎じて、次の轉經を引きおこす前提をなしてゐるものである。

六、前懺悔——前段に於て佛恩の廣大なることを讚嘆し、願て、あさましき自己の長時流浪の苦を想ふにつけて、この懺悔の一段があらはれたのである。先づ六障を懺悔し、觀佛三昧經にあらはれたる地獄の苦相など、當然の報果として詳説されてゐる。この懺悔の一段を行法の中に於て特に明示せられたものは、次の欣求の境に對して、厭離のそれを對比せしめようとしたものであらう。

次は轉經分である。これは正しく一部の正宗分ともなるものであつて、この中に於て、阿彌陀經を十七段に分けて、段々ごとに讚文を添加して極樂の依正二報の莊嚴を讚美してゐる。そしてまた、阿彌陀經を主體としたことは、前述の通り、阿彌陀經は欣求の心を勧むる上に、まことに適切な經典であるからである。

次に後行分では、今讚の結論をつけたものである。これについてまた五段に分別されてゐる。

一、後懺悔——別して身三口四意三の十惡をあげ、それらについて鄭重に懺悔してゐる。この一段は正しく、厭離と欣求との對比から、次の發願願生を引きおこす意圖に外ならぬ。

二、後行道——行道は前にも述べたやうに、歸敬の至極を表現したものであるが、この後行道は最初に奉請した諸佛世尊が正に法事の終了と同時に各々本國へ還歸されるに際して、最後の歸敬を表示した一段である。その間に於て、重ねて往生願求心を表白してゐる。

三、嘆佛咒願——これは「願以此功德、平等施一切」といふ總回向の文に相當する一段であつて、上來所修の功德を、法會の施主、同行の諸人、並に一切の有情に回向する



ことである。

四、唱禮——奉請の聖賢に七尊あるために、七禮敬を用ひてある。これは行道の時の七周に相應するものである。

五、隨意——法會の最後に當り、運心をもつて經を三處に送り、令法久住、利樂有情を希念する一段である。その三處とは、一に摩尼寶殿、即ちこれ天上界の法藏である。二に龍宮大藏、これ即ち龍族護持のそれである。三に西方石窟、これ即ち人中の法藏である。

已上略して、今讚の内容組織について一言したが、今讚の形式は、全く天台の法華三味の行法を典據としたものであつて、この上に更に、整頓した行法を組織したものである。後世淨土門内の法式行事はすべて今讚の行儀を典據としたものである。而もその内容たるや、全く厭欣心をすゝめたことにあつたのである。

## 第二章 元祖宗祖一遍の小經觀

### 一 元祖の小經觀

『黒谷上人語燈錄卷第三』小經釋によると、玄談ともいふべきものに五意を列擧されてゐる。

- 一、明往生所依
- 二、辨二行勝劣
- 三、述經來意
- 四、釋經題名
- 五、入文解釋

第一門に於て、往生極樂之旨、經論所說甚多、於中論其最要、無有過無量壽經觀經阿彌陀經此三部經也」と斷じて、その教證として六文を證引されてゐる。即ち一には善導の疏文、二に天台十疑の文、三に慈恩要決の文、四に迦才淨土論の文、五に智景の疏文、六に惠心往生要集の文である。



その中特に迦才『淨土論』に十二經七論を引き、往生極樂の證としてゐることを重ねて擧げられた。その十二經七論とは、一、無量壽經、二、觀無量壽經、三、小阿彌陀經等であり、七論とは、往生論、起信論等であると略出せられた。

迦才『淨土論』中の十二經といふのは即ち三部經と鼓音聲經と稱揚諸佛功德經と發覺淨心經と大集經と十方往生經と藥師經と般舟經と大阿彌陀經と無量清淨覺經とである。その七論といふのは、往生論、起信論、十住毘婆娑論、一切經中の彌陀偈、寶性論、十二禮、攝大乘論である。

第二辨二行勝劣門に於ては、往生要集の所説の念佛諸行對待十門の中、第八念佛證據門に於ける三番問答を中心としてゐる。即ち要集には第一問答に於て念佛をもつて往生の業とする諸種釋を略出して十文を出し、占察經下卷、大經三輩段、同經の第十八願文、觀經極重惡人無他方便の文、同經の若願至心の文、同經の光明遍照十方世界の文、小經の執持名號の文、般舟經の數常專念莫有休息の文、鼓音聲經の能正受持彼佛名號の文、往生論の以觀念彼佛依正功德爲往生業の文を鈔出された。第二問答に於て念佛を往生の要として直辨してゐる。第三問答には起信論を引證して、諸契經には多く念佛をもつて往生の要とすと結んでゐる。この要集の意

を體して、更に六義を開顯して勝劣を決擇せられた。その六義とは即ち難易の義、多分少分の義、因明直辨の義、本願非本願の義、光明攝取不攝取の義、如來隨宜四依理盡の義である。

第三述經來意門に於ては、觀經には既に念佛諸行廢立の義意があらはれてはゐるが、なほ諸行を廣く説き念佛を狭く顯はしたために、行學の徒、或は義路に迷ひ是非を決しがたいから、本經には、明に諸行を廢捨した、念佛を明し、もつて、念佛行に於て決定信を生せしめんがためであると示された。

第四釋名門に於て、佛は娑婆化主三身萬德の釋尊、説とは此土化儀四辨八音の聲教、阿彌陀とは、極樂の教主の名、十方諸佛の稱讚するところである。而して、阿彌陀は能成の人、本經所説の依正は所成の報、即ち能成の佛をあげて所成の報を攝したものである。また、阿彌陀は所證の佛、諸佛は能證の佛、所證の佛を擧げて能證の佛を攝したものである。經とは前述大觀二經の如しと結ばれた。

第五門入文解釋は祖訓ひたすら頂戴すべきである。執持名號について、專修正行念佛三昧たりとの指南、來迎についての異譯小經によつた明判、たゞ仰ぐべきであり、信すべきである。



また『和語』第二之一、三部經釋第一の最後小經釋に於ては、簡潔にその要領を叙述されてゐる。

更に『選擇集』多善根章の一段に於て、小經の嫌貶開示、執持名號、一心不亂について明判を與へられてゐる。

## 二 宗祖の小經觀

元祖の幽意を繼がれたわが聖人は、淨土教正所依の經典として小經を尊く頂戴せられたことは勿論である。而してこの小經をいかに感佩せられたかと窺ふと、『化卷』本に「准知觀經此經亦應有顯彰隱密之義」とのべられた。この御釋の示すところは、小經もまた、觀經に准じて、その妙教相を窺ふべきであるとの御示しである。今祖意を體して小經の大意を窺ふと、小經に於てはその修因段に念佛往生の旨趣を説示されたが、それによると發願と正因と益果を示されて、少善根福德の因縁にては往生を得ず、一心不亂に彌陀名號を執持することによつて往生を得ることを説かれたものである。襄陽石經には更に明白にこの消息を對照されてゐる。かの定善散善の諸行は少善根少福德であり、彌陀の名號を執持する念佛は多善根多

福德であるから、執持名號こそすぐれた生因であると示されてゐる。それを終南の『法事讚』に

極樂無爲涅槃界、隨緣雜善恐難生、故使如來選要法、教念彌陀專復專。

と讚歎せられてゐるが、その隨緣雜善とは少善根福德のことであり、如來要法とは名號のことである。また、元祖はこの終南の釋を繼承して、『選擇集』に大多勝の三義をもつて名號執持の念佛往生の大道を鮮明にせられた。かやうに廢立の釋義をもつて觀經より念佛往生の大道を開示せられた終南元祖はまた小經より念佛往生の歸趣を顯開されたものである。

宗祖は更に念佛の眞實を開顯するために、隱顯釋を採用されたものである。『化卷』本に

言顯者、經家嫌貶一切諸行少善、開示善本德本眞門、勵自利一心勸難思往生、是以經說多善根多功德多福德、因釋云九品俱廻得不退、或云無過念佛往西方三念五念佛來迎、此是此經示顯義也、此乃眞門中之方便也。

これは石經文、終南の『觀念法門』等によつて、經文の顯說相をはつきりと觀察せられて、諸行を少善なりと嫌貶し、名號を多善根と開示し、名號法の勝法たることを



高調せられたものである。蓋し、本經の念佛勸勵のところに自力の機執に投せられた風格がほの見え、一日七日の稱名一心不亂のところに自力廻向の相貌があり、ことに利益として臨終來迎を説かれたことは全く機情に投せられたものである『化卷』本に

言彰者、彰眞實難信之法、斯乃光闡不可思議願海、欲令歸無碍大信心海、良勸旣恒沙勸信亦恒沙信、故言甚難也、釋云直爲彌陀弘誓重、致使凡夫念卽生、斯是開隱彰義也。この釋意は恒沙の諸佛のひとしく證誠するところの絶對不可思議の眞實功德が、正因段の自力念佛らしく見ゆるところに、隱彰としてはつきりうがふことができるといふ御釋である。この隱顯釋こそ宗祖の經文に直參せられた血のたるやうな達觀であつて、念佛一法について更に眞實と方便とを分判し、自力と他力とを簡別せられたものである。即ち觀經に於ては終南元祖の廢立門の上に隱顯釋を用ひて更に一段の光彩をそへ、小經に於ては終南元祖によつて立てられた念佛に更に批判を加へて、その眞實義を明にせられたものである。宗祖の隱顯釋によつて釋家、吉水の廢立釋が純全に徹したといつてよい。但し、宗祖の觀小二經に於ける隱顯釋に左右あることはいふまでもないがそれ

は、結篇諸問題下に於て詳述することにした。また、古來學界の宿題となつてゐる『阿彌陀經文類集』については『顯眞學報』第五號阿彌陀經研究號梅原主幹の論文を参照されたい。

### 三 一遍の小經觀

一遍の時宗に於ては三部經を所依の經典として尊重したことはいふまでもないが、特に阿彌陀經を正所依と定められたやうである。この意味からか、古來本宗を阿彌陀經宗とさへいはれたのである。けれども一遍上人自身は、あながちに小經を正所依とせられたものでもないやうである。もとより一遍は他の派祖に見るが如く、教學的組織などを問題とはせずして、生涯念佛勸進をわが生命とし、一切をうちすて、専心稱名念佛にいそしまれたからであらう。しかし、後世、時宗教團の組織にともない、教學完成のために所依の經典問題について學者の意見がまとめられてこゝに小經を特に正所依とせられたものである。

小經を特に正所依の經典とせられた理由はいろいろに沙汰せられてゐるが、その重なるものは、次のやうである。



釋尊の一代教説は化前の方便であつて、淨土の三經こそ出世の本懐であり眞實教である。しかも、三經の中では大經は彌陀の因願果徳を説く序文であり、觀經は衆生の因行果報を説く正宗文であり、小經は專稱の一行を説く流通文である。更に、大經は三輩諸行を説き、觀經は定散二善を開示してあるが、ともに對機方便の説相である。しかるに小經は純一の執持名號をとき、一心不亂の稱念を彰す佛隨自の教説であり、一代の結經であり、衆生出離の最要であるから、特に本宗に於ては小經を正所依とせられたものである。

顯眞學報第五號阿彌陀經研究號高千穂氏論文參照、一遍の業蹟については、『一遍上人繪詞傳』、『本朝高僧傳』十五、『淨土總系譜』卷下等參照

### 第三章 日本各宗諸註鈔概観

#### 一 阿彌陀經私集抄 三卷 堯慧 二〇五五

終南の『法事讚』黒谷の『小經疏』によつて文言の消釋と、義理の分別とを試みたものである。

『法事讚』には立科消文の釋はないが、すべて本經の宗要を得て、經の文義を讃揚したものである。黒谷の『小經疏』は五意を開いて一、辨所依教、二、重決二行、三、經來意、四、釋名、五、入文解釋とせられた。これらの祖釋によつて今私に三門分別を試みたい、即ち大意、釋名、入文解釋である。

大意を窺ふと、本經一部の所明は二尊淨穢の本懐、諸佛證誠の實教である。凡そ釋迦にして穢土に出で、一切世間難信法の誠諦を説くことは安樂大事因縁の本懐であつた。彌陀は淨土に住して、諸聖衆と現在其前の大意を垂れたことは彌陀來迎引接の素懐でもある。よつて、釋迦は此方發遣、彌陀は彼國來迎であつて、二佛の遣喚一致の郢匠である。これがまさしく本經の大意である。

次に三經説時の問題について、諸師の異釋を擧げて、これを批判し、——肇公、基法師、龍興、璟興、玄一の所論を引き——『宗要』の義に隨つて、本願の宗源は義初説に當り、觀門の方便は義次説に當り、捨權證實は義後説に當ると結んで大觀小の次第を評取してゐる。

次で阿彌陀經釋家の震旦日域に於ける有名なるものを擧げてゐる。その中に、逸本の古註疏も多々列擧してゐる。『西資抄』仁岳の疏、惠淨の疏、恭思の經註、慈恩の



述讚、西明の疏、玄一元傳、用欽、智央、希深、法久、慈藏、僧肇等の註疏などであつて、後學の参考となるものである。なほ永範法師の『阿彌陀經要記』について珍らしき説をあげてゐる。参照されたい。更に『彌陀經義』といふ一卷の偽造書もあるが、作者不明であると傳へてゐる。また、天台の『義記』についての智圓の意見とか、源信の所傳について述べ、また、僧肇についても羅什の門人ではなくて、唐朝の僧肇であらう。その疏の中に新譯の攝論佛地論等を引用してゐるところもあり、また、大體は『通讚疏』と同じ釋體をもつてゐるものであるから、古來慈恩系統の人師だらうとの説もあるが、これは輕々に賛成しがたい、恐らく三論系の學匠だらうとの推斷を下してゐる。

釋名に於ては、『略記』を直ちに承けた『黒谷の經疏』を引證して、佛自說の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經との經題の中で、十五字は別題、經は通題であつて、上の八字は依正の莊嚴、稱名往生、彌陀修因、感果威神、願力の功德を示し、下の八字は經に依て行を起し、専ら業行を修し、衆聖冥加聖來の護念を感ずる義を示したものであつて、唐譯の經題はこの邊の消息を示したものだらうと述べてゐる。

譯人については、『通讚疏』の四譯説を資料として、元照の秦譯唐譯についての評

取を賛じ、用欽の説をも併せ用ひてゐる。先師の説として四譯の外に不空三藏所譯の二紙經があつて、青蓮院御經藏に祕藏してゐるのを先年披見したことがある。蓋しこれは觀經九品儀式を説いたものであると述べてゐる。

入文解釋に於ては、先づ分料について、天台、慈恩、元照、黒谷の分科論に隨つてゐる。次に孤山の説をあげて、それに對する仁岳の評破を採用したやうである。證信發起序についてもきはめて穩當な説をあげてゐる。以下入文解釋に至つては、その多くの釋相は後世の西山諸師によつて繼承されてゐる。ことに最後の佛說此經己等の釋に至つては、從難入易は、本經の本意である。惣じていへば此經の首尾悉く付屬流通の經である。即ち觀經の汝好持是語の經文を重ねて本經の所説としたものであるとの所論は傾聽に價する。以上堯慧の小經釋概觀であるが、この『私集鈔』はたゞに西山一家のみならず、廣く淨土門内に於て常に珍重されたものである。

堯慧は、善偉ともいはれ、洛東圓福寺の暢空頓乘の門に入つて、専ら淨土教學を研め、佛教學にも通曉した人である。淨土宗西山派深草流の學匠であつた。著書多く『選擇集私集鈔』八卷、『本經私集鈔』三卷など有名なものである。



二 小經直談要註記 八卷 聖聰 二〇二六  
二〇〇〇

本經の來意について總別に分別し、總じては一代教の來意、別しては淨土門の來意とに分別した。開卷初來意分の下、兩讚を擧げ、一代教の來意を要約し、次に淨土門の來意を述べて、淨土の教門は龜細の次第であり、往生の行門は淺深の次第である。大經に於ては、定散兩門隨自隨他の諸業、各區々たるものがあるから、今經に於ては、如來本懷隨自三昧の一行を説示して、方に兩尊の本意を開示して持名の一法を説き、諸佛の證誠を顯はしたものであると評釋し、その釋名分に於ては、靈芝の『義疏』を承けて、秦譯は本願を隱略して、宗に據つて要をとつて別して佛說阿彌陀經と題したものである。什譯の立題について五意あることを述べてゐる。傾聽すべきである。

譯人分には、翻譯の時代を示し、慈恩の『通讚疏』の説を擧げ、『觀念法門』に什譯と四紙阿彌陀經とを擧げてゐるところから、四紙、五紙、十紙をもつて求那譯、什譯、奘譯を區別してはとの面白い意見を示してゐる。また、仁岳新疏等の説をも併せその資料とした。

入文序分解釋に於ては、證信發起二序問題に始り、その間、宗密の『孟蘭盆疏』を多く参考し、序説列衆分等本經一部にわたつて該博なる學識と卓越せる識見を遺憾なく發揮してゐる。

一心不亂の經文に於ては、問答を設け、一心不亂に淺深の有無を論じてゐる。衆生の行業は無盡であり、隨つて往生の信心は淺深に通ずるもので、かの九品三心の如く重々無量無邊である。機根は無量無邊ではあるが、一心に極樂を欣び、一心に彌陀に歸し、一心に名號を唱ふるものの心境行相を一心不亂といつたものである。これに對して、淺心に念佛し、惡念に念佛するものなどに關して往生要集の問答をあげてゐる。

佛說此經已の文に至つては、『法事讚』の「世尊說法時將了、慇懃付屬彌陀名」の讚を引き、正説をもつて流通を推し、二經を以て今經に例するに慇懃付屬理在絶言なりとの『抄』意を承け、正説流通の一對、二經一經の一對を立て、念佛をもつて舍利弗に付屬すべきこと理在絶言なりと結歎してゐる。

本註記一部を通じて受けた感觸は、著者の深淵な理解と、敬虔な道念とであつた。聖聰は増上寺の開山であつて西譽と號した。聖問の弟子となつて應永十年九



月宗脈を授けられ鎮西派正統第八祖となつた。著書二十餘部三經の『直談要註記』及び『淨土宗要』などことに名高い。

### 三 阿彌陀經祕直談鈔 三卷 源譽 二二九六

三分分科を立て來意分、釋名分、依文解釋分の三段とし、更に來意に於ては、『要註記』に隨つて一代教來意と淨土門來意とにわけて、凡そ諸佛の大悲心は無二である。今教主世尊も無勝莊嚴土を捨て、閻浮苦界の里に出で、一代の化儀を設けて一切の群類を導き、教法を八萬に開き利益を三千に示されたことは惣じて一代教の來意である。然るに淨土の教門は愈より細に至り、往生の行門は淺より深に至るものであるから、上來、定散兩門隨自隨他の諸業各まぢまぢであるが今此の經に於ては如來本懷隨自意三昧の一行を説いて方に今、兩尊の本意を示して、隨緣雜染を嫌つて三佛の大悲に任せて持名の一法を説かれた。加之、諸佛の證誠を顯はされたところに別して淨土教門の來意があるとこの一段全く『直談要註記』の傳寫である。

入文解釋分を三段に分別して、天台・元曉・圓側・慈恩・僧肇・源信・永觀等の先徳の入文解釋にすべて准じてゐる。就中、但受諸樂故名極樂の經文について、『要集』の指示を得て十樂を擧げて淨土を讚歎してゐる。

その十樂とは一に聖衆來迎の樂、二に蓮華初開の樂、三に身相神通の樂、四に妙境界樂、六に引接結縁の樂、七に聖衆俱會の樂、八に見佛聞法の樂、九に隨心供佛の樂、十に増進佛道の樂である。源信によるこの十樂釋は淨土門内に於ては常途の釋相として何人にも採用されてゐる。

一心不亂の經文を註して偏に名號を執持して餘行をかへりみざるの執心牢固の一心である。係念在前の一心である。係念不亂の一心である。偏に極樂を執して餘方を欣ばざる無二心の一心である。彌陀を堅執して餘佛を念せざる無二心の一心である。かくの如き一心は、彌陀と西方とに係念して餘佛と餘土とを願はざる一心であるがもとより散の一心である。諸釋家中、或は無念の一心又は元源一心なりと談ずるものもあるが、これは全く淨土教門の深意を知らないものであるとはつきり否定してゐる。

最後の流通付屬の問題についても、『要註記』により、『私集鈔』を参考して明判を下してゐる。本鈔は著者の快心の作だと傳へられるほどあつて、廣く藏經にわた



つて豊富な學識を傾倒した力作である。蓋し『要註記』以上に出たところは殆んどない。

源譽は號、本名隨流、鎮西派白旗流の學匠である。唱導に巧であつた、關東地方に於て、淨土宗の弘布につとめ著書數部あり、就中、觀經、選擇集、小經の『直談鈔』は有名である。

#### 四 阿彌陀經疏鈔管解 八卷 教道 一三三五

雲棲株宏の疏鈔を逐次註釋したものである。彼の序に、株宏禪師の疏鈔はひとり直を擧げ實を履むの繩墨、空を廓にし愚を曉すの鸞鏡となす、誠なるかな、自性の眼膜を瘳す良醫の金錐なり、その文雅に富み、義且つ洋々たり」と『疏鈔』を激賞してゐる。淨土宗西山派に屬し、紀洲の梶取の總持寺に晋山直後數十日にて寂した。『總持寺沿革誌』を參照されたい。若い頃、泉涌寺に於て大藏經を披閱し、要文抄録八十卷に及んだと傳へられてゐる。この傳記が傳へるやうに本管解に於てもまた廣く一切經を資糧としてゐる。『疏鈔』の末註としては重寶なものである。

#### 五 佛說阿彌陀經直解 三卷 貞準 一三三三

綱要を述べて五門とし、教興所因、宗體定判、藏教所屬、所被機類、誦持感應、と分別してゐる。

教興門に於ては、先づ大經の所以出興於世光闡道教等の文を引いて通の教興とし、本經の釋迦牟尼佛能爲甚難希有之事等を別の教興とした。

宗體門には、一切の諸經の宗體を擧げ、維摩、大品の諸經、或は越溪、海東の諸師の宗體論より鸞師の名號爲體說に及び、一家の所判を祖述して、念佛爲宗、往生爲體と判じてゐる。その所論を見ると大觀二經の説相に准すれば、兩門の得益は定散を攝してゐるが、一向の願意はひとり專稱を取るものであり。また、九品の迎接は衆機に通するが、三輩の廢立はたゞ名號を成じてゐる。のみならず付屬法滅の特留はたゞ念佛のみであつて他のものではない。本經所説の法は、無雜の實説であつて二尊の本懷であるばかりでなく諸佛讚歎證誠の法であると結成してゐる。

藏教門に於ては、一家の判に則り、觀小二經は頓教菩薩藏であると判じてゐる。所被門には『安樂集』上の彌陀の淨國は位上下を該ね、凡聖通じて往くとの文を



引用してその證文とした。

誦持門に至つて、誦持感應につき『要集』『略記』等の明文を引證してゐる。

入文解釋はきはめて手際よく進めて、一心不亂の經文に至つては、『私記』の所示を探り、その深意を窺つて、『私記』の一應はたゞ起行に約して至心專念佛名と釋してゐるが、そのうちには安心に通ずる義も含まれてゐる。それは黒谷の觀經記を參照すればこの消息が窺はれるとし、また西山上人の禪林十因をも併せて引用しこの意味を擴充してゐる。また、流通付屬の問題については、鷲峯の一會は慈氏に付屬し、王宮の一會は慶喜に付屬す、これらに例するに本經祇園の一會必ず珠子に付屬すべきであると明斷を下してゐる。

『直解』一部の釋相はきはめて暢達、文辭平易にして而も要を得たものである。

ために當時の淨土門内に於ては後學のために愛玩せられたやうである。

貞準は西山派、西谷流の學匠である。洛東禪林寺に住し、著書數部あり、就中『觀經新記』十卷など有名である。

## 六 彌陀經略解指要鈔 三卷 貞準 一三四四

大佑の阿彌陀經略解を逐次註釋したものである。彼の前序によると、大佑の所論は専ら台家の教相に依つてゐるから、身土、機行の所説に至つては祖判とよほどの距離を認めるが、今鈔は略解の指要であるから、且く大佑の意見に准じて述べたものであるとはつてゐる。

略解の序文の結勸に「了唯心之本具、億刹非遙、知大願之可憑、三祇橫截」とある文を、十界依正はもとより性具の法であつて、更に作得のものではない、佛土もまた唯心に在り、自心自土であつて他域ではないと註釋してゐるが、彼の序言の通り大佑に隨つて全く台家の意見に則り略解一部を註釋したものである。

大佑の『略解』については、天和壬戌春(二三四二)西山の學海によつて冠頭されたものが貞享三年丙寅正月に油小路綾小路の八尾清兵衛宮部次右衛門によつて開板されてゐる。(二三四六)貞準の『指要鈔』は貞享元年(二三四四)寺町五條中野宗左衛門によつて開板されてゐる。この時代には大佑の『略解』は淨土宗系に於てかなり珍重されたものらしい。

支那の大佑のものを今概観することは本意でないが、本篇第一章に於て大佑の本經疏についてふれなかつたから、序に概観しておきたい。略解前序は文辭暢達、



識見高邁、自ら襟を正さしめるものがある。本段に至つては五重玄義を立て、その大體の組織は孤山の學說によつてゐる。釋名、辨體、明宗、論用、判教相をもつて玄義綱要とし、釋名門に於て、法身般若解脱の三一圓融して思擇すべからざる祕密藏が正しく經題の本質であると説き、辨體明宗二門に於て、實相印即所詮の理をもつて經の正體とし、應當發願生彼國土をもつて一經の宗要と論じてゐる。論用門に於て、往生極樂國土皆不退轉無上菩薩離苦得樂こそまことに本經の力用であると論斷し、判教相門に於て大乘菩薩藏頓教の分齊たることを示してゐる。入文解釋に至つて、一心不亂等を正示持名方法の段章と立て、その一心不亂に事理を分別し、事の一心とは行者阿彌陀佛の相好光明を憶念して分散なく意念無間なるを名け、理の一心とは能念の心所念の佛、皆自性無と了達すれば本來空寂なりと雖も、而も感應道交して鏡像水月の如く任運に顯益す、空假中三諦圓融にして絶思絶義を理の一心と名く、法界唯心と了達すれば、心外無境にして彌陀の相好もとより是れ自心であり、十萬億程は當念を踰えないものであると釋して、天台教系、淨土教特に孤山を尊び更にまた慈恩教系、淨土教をもとりいれて彼の獨自の解釋を試みたやうである。

## 七 阿彌陀經勸持鈔 一卷

湛澄

二三七一

元祿丁丑初秋 二條相町之角長尾藤兵衛刊行本五丁右より本經一部を概説して、本經は一心專念の要法をとき、六方如來の證誠を明す、大乘の中の大乗經、了義中の了義教なり、亦これ頓教菩薩藏の攝にして諸佛大悲の本懷、無問自說の妙典なり等として、源信の略記、智旭の要解を引用し、その讚仰につとめてゐる。

次に經文全部を擧げて、その句逗清濁四聲などは法事讚と淨宗相傳の古本并に増上寺西譽上人相傳の點によつたものと傳へてゐる。

次で入文解釋を試みてゐる。その他古注疏を列挙したり、三國感應について述べたり、阿彌陀經和歌を列挙して終つてゐる。學的の所産ではないやうであるが本經と民衆との深いつながりなど見るためには好資料となるものである。

湛澄は淨土宗山城報恩寺の學僧である。向阿の三部假名鈔を註して『三部假名鈔諺註』十四卷の撰がある。頓阿に承けて『淨土長歌註』など作つて異色ある學者であつた。



八 佛說阿彌陀經要解百川記 四卷 秀雲 一三六四

寶永元歲甲申七月の自序によると、その肩書に比叡山西塔院東谿沙門秀雲とあり、又序文に智者を吾祖といつてゐるから台宗系の學匠であつたらしい。事蹟資料が見つかからないのでその生涯は不詳である。

百川記は『要解』の註釋であることは題名が既に語つてゐる。著者の自序に「祇樹給園阿彌陀經、忍土獨尊、海口潮音、無風與波、教驚鷺子游泳焉、恒沙諸佛、空舌雷聲、覆界震雲、俾龍象衆踊躍矣」と麗句を重ねて本經一部の組織と宗要とを簡潔にまとめてゐる。また「是以斯經一心不亂、與觀音品一心稱名同途、茲典即得極樂、將藥王品即往安樂共轍」ともつてその釋意の一般を窺ふに足るものがある。百川記とは序文に「雖經解並皆滴水、既聞本具百川衆流」といひ、序の終に「纂集諸文、折爲三卷、曰百川記、名倣儒家百川學海、義取佛海一滴具流、聊便渴人之飲用」といふところに題號をとつたものであらう。

『要解』の註釋といつても逐次釋ではなくて、その難文難句について、諸經錄をあさつて懇切に註解を加へたものである。

九 稱讚淨土佛攝受經疏 三卷 梁道 二四〇一

玄談に於て、先づ大意、釋名、解文の三分を試み、大意の中更に五門に分別した。即ち教起所因門と所說大猷門と、宗體定判門と、藏教所攝門と翻譯同異門とである。教起所因門に於ては、釋迦はこの雜染堪忍世界五濁惡時に於て、方便して諸の有情を利益し安樂ならしめんと欲するが故に、この世間極難信の法を説いたものであるとした。

所說大猷門に於ては、この經の始終は三門にまとめられる。即ち初には淨土の依正二報を讚して、勸めて發願して彼國に生せんと願はしめ、次に諸佛攝受の法門を説いてたゞよく念佛して淨土に生ずることを示し、後に釋迦十方證誠攝受して衆生の信心を護念することを明したものである。これこそ一代の大猷であるとした。

宗體門に於ては、諸釋家の異說をあげ、鸞導二祖に準據して、念佛は經中の所宗であり、宗の趣くところはひとへに往生にあるからこれをもつて經體とすると宗體一體論を主張してゐる。



藏教所攝門に於ては、般舟讚の旨を承け、菩薩藏であり頓教であると判じてゐる。翻譯同異門に於ては、慈恩にしたがひ、四譯説を立てゝゐる。什譯、求那跋陀羅譯、玄奘譯、後秦失譯經偈とをあげて、仁岳の『新疏』の意見をあげてゐる。什譯は四紙十七段一千八百三十五字、玄奘譯は十紙三十二段四千九十六字、就中、唐譯には慈恩、靖邁の各疏と大賢の『古述記』とあつたと傳へられるが湮没して、逸傳してゐるのに對して、什譯は五十八餘部の註疏があるとして、唐譯註疏の數少きことを慨歎してゐる。

釋名解文の分段に於ては、月峯の『駕説』の後に出たものであるが、『駕説』の指示によつて形迹が一向に見えない。たゞし、その刺戟を受けて生れたものかも知れぬ。本疏は一切經論釋にわたつて資料をあさつたものであるから註釋書としては適當なものである。就中、修正業段、能修行人段、所修要法段等の釋相はことに勝れたものであつて後學を裨益するところが多い。

一〇 『阿彌陀經合讚』 一卷 眞阿

二三一七  
二三九一

この書の後序に、享保十乙巳年仲夏之日、單阿謹書の一文がある。本書の成立と

眞阿の人格とをよくいひあらはしてゐる。

本書は略開五門として、所説の大猷、二行優劣、偏勸念佛、總釋題名、別解文義をもつて玄談にかへてゐる。

具縛の衆生をして心行を發起せしめんと欲するところに、本經の大猷があると説き、念佛諸行の二行の優劣を論ずるについて、勝劣の義、難易の義、多少の義、因明直辨の義、願非願の義、光明攝不の義、隨宜盡理の義、との七義をあげて詳説してゐることは注意すべきである。別解文義の段に至つても簡要をあげて、巧みに本經の文義を消釋してゐるところに著者の面目躍如たるものがある。

眞阿は淨土宗鎮西派の學匠であつて本名は觀徹である。後鎌倉光明寺の五十八世となり著書數部あり、『三部經合讚』七卷は有名である。

一一 淨土十要彌陀要解俗談 一卷 光謙

二三一二  
二三九九

元文元年丙辰の十一月一日(二三九九)洛濱幻々菴の講説を筆受せしものである。成時の淨土十要序についててきびしい批判を下し、成時は藕益の高弟であつて博覽廣識の學者であつたが、博識能文をたのみ、ことさらに難句を羅列し、好學の士



を煩はした。これに對して師の藕益はことに博識であつたが、文章もきはめて平易であつた。然るに、明代は成時のやうな難文迷句を歓迎した時代であつて、かうしたことが一時の流行でもあつたのだらうと慨き、李空同や王元美などもまたその轍をふんだものである。かうしたことは釋氏としてはことにつゝしまねばならぬと警告してゐる。

成時は堅密と號して禪、教二宗に達し智旭の門に入つてその當時の學界にかなり有名であつた。『受持佛說阿彌陀經行願儀』一卷等の著述があつたと傳へられてゐる。

この成時の序文の難句を註釋してゐる。次で淨土十要總目の成時の『評點節略』の字句を註し、次に『要解』の字句を釋して『要解』研究に資してゐる。

光謙は安樂院の僧で靈空はその字である。當時の學匠達と『妙宗鈔』等の問題についての論戰に生涯を送つたやうで、著書數十部、特に『俗談』ものが多い。『台宗二百題』は台學の指針となつてゐる。

## 二 佛說阿彌陀經略纂 二卷 大我 二四〇六

念佛の内容は或は實相、或は觀相、或は想像、或は稱號にわたるべきものであるが、その中、勝にして易なるものは稱號である。凡そ寶號の靈驗唯稱の神奧は、壽觀兩典に肇端し、彌陀一經に滙澤する。三經は並に誓船の要津であるが、壽觀兩典の行藏は他に隨つて、定有り散有り、彌陀一經は無助無雜である、よつて彌陀經こそ宗極である、と讚し、釋經に五重の玄義を立てゝゐる。即ち教興、宗趣、教相、力用、辨謬釋がそれである。

教興の條下に於て本經の如來出世の本懷たることを論成し、宗趣の條下に於ては信願持名を以て宗とし、超生淨土を以て趣とした。教相の條下に於て、本經は大乗菩薩藏頓教の所攝なりと斷じ、力用の條下に至つて、本經は護念不退正念往生を以て力用とすと判じ、辨謬釋の條下に於ては、古今の釋家を評して或は相を以て淆し、或は理を以て混じ、或は觀佛念佛般舟等の諸經に依つて稱名の法則を作る。これは全く機と法と天淵なるを別白せざるによるものである。本經を釋する上に觀理を高談し、持名を抑釋するはたゞに本經の宗とするところを知らざるのみならず、不可思議功德名號を信せざるものである。これこそ恐るべき大罪であるとし、要は事理の持名を混淆してはならぬと高調してゐる。



入文解釋に於ては、またもつて後學の指針とするところが多い、一心不亂の釋に至つては『占察經』を引證し、一度厭欣を發し(至誠心)機法を疑はず(深信心)専ら稱名(回向發願心)して餘行を雜へず(係想不亂)念念相續して畢命を期となすことであるとして事持理持問題を問答して吉水の高教に任かすべきだと述べ、所持の名號は眞實不可思議なれば能持の音聲も眞實不可思議である。持すること一聲なれば一聲則ち不可思議なり、持すること百千萬無量無數聲悉く不可思議であつて、本願海に流入し決定の業となると結歎してゐる。

大我は淨土宗正法寺の學僧である。孤立、天譽と稱した。十數部の著述あり、晚年江戸に移住して普寂、關通と論戰せることあり、俳歌を善くした。膂力衆にすぐれ容姿魁偉であつた、博徒數人と力を角し後佛道に引き入れたと傳へられてゐる。『略纂』はその風格、その眞容、まつたくごちない宗派意識を超えたものがあることを感せしめる。

一三 阿彌陀經要解一心鈔 三卷 慈等 二四七九

智旭の『要解』を逐次釋したものである。本經所被の機について『要解』の普被

三根、攝事理等の文意を『直指』或問』或は『冠註疏鈔』等によつて註釋して、三輩九品をもつて衆生を攝取し、根に隨つて導て遺機なしといひ、或は一切機根攝取して都て盡す、上一生補處に至つても、亦淨土に生じ、下五逆十惡に至るまで臨終に念佛悔過し、心を淨土に歸するもの悉く往生すといひ、また、無信無願、無行のものを非器とし、信疑讚毀はすべて本經所被の機であるとした。或は妙宗を三觀に發し、或は萬善を導いてもつて同じく歸し、或は一切心を事理に融じ、法として收めざるなく、機として攝せざるものなしといひ、更に理具事造の思想から所念の佛は是れ本覺理具三千なり、能念の念は是れ始覺事造の三千であつて、この二一合して百非を離ると、全く天台教義によつてその解釋を試みてゐる。

宗體論に於ては『要解』の實相爲體を註し、『妙宗鈔』、『宗論』等により、實相は一切を離るるが故に寂照に非ず、一切に即するが故に而も寂照なり、一切各互に具するが故に寂照互に融ず、これ直に實相の照にして寂なるをもつて寂光と爲す、また直に法身となす、一切の修徳もたゞこれ寂照、こゝに於て三身を圓具するのである。一應は性徳は法身、修徳は報身、應化身と配するが、もとより三身圓具である。従つて所依の三土もまた寂照を出でず、こゝに於て身土不二實相に歸す。實相もとよ



り不二であるが凝然たる不二ではない、よつてこの實相の全體を擧げて依正乃至能讚所讚を作る。よつて、正報を擧げて依果を收め、化主を述べて徒衆に及び、信願行の三資糧は自ら所信の法中に充足するのであると述べてゐる。

宗については、『要解』の「以信願持名爲修行之宗要乃至苟一念回心決定得生自心本具極樂更無疑慮是名信自」を釋して、性を全ふじて是れ修、十方國土は一念の所現なり、極樂また心具である。信願行の信とは信自、信他、信因、信果、信事、信理、であり、願は厭離娑婆欣求極樂、行は執持名號一心不亂である。信の中、信理についての『要解』の特徴、即ち「深信十萬億土實不出我今現前介爾一念心外、乃至深信西方依正主伴皆吾現前一念心中所現影、即理全妄即眞、修全即性、全他即自、我心徧故、佛心亦徧」を性宗と相宗とを融會した巧妙なる釋相であると讃仰してゐる。

信願持名をもつて一乘の眞因となし、四種の淨土をもつて一乘の妙果となすことを高調してゐる。或は四土を三輩九品に配し、或は不退の四義を示してその果を詳記し、教相門に於ては大乗菩薩藏の所攝なりと判じて、ついでに入文註釋に入り、『要解』の所論を縦横自在に詳釋し、微に入り細を穿つて、遺算なからしめてゐる。慈等は天台宗江戸凌雲院の學僧であつて、持戒堅固をもつて世に聞えた。天台

の宗義に精通し須彌山説を高調したやうである。著書數部、金鉢論、十不二門に關する著述がある。『要解一心鈔』は特に心血を注いだものといはれる。

#### 一四 阿彌陀經訓讀記 三卷

著者不明である。下卷の終に「于時慶安三秋九旬集數多之古本並、今叱英雄諸善識之講本校合之畢」とあり、慶安三年庚寅(二三一〇)歲仲冬日 藤井吉兵衛尉重刊とある。これによつてみれば、隨流源譽の『祕直談鈔』教道の『疏鈔管解』と前後した時代のものであらう。また眞宗學匠の慧空の『聞紀』、峻諦の『義疏記引文』などと前後した作品であらう。本學の所藏本は龍谷學費大藏書印のあるものである。

玄談には大意、釋名、入文判擇の三段に分別してゐる。大意段に於て、善導、黒谷の御釋を引用し、『悲華經』、『祕密藏經』、『報恩經』、『佛母經』、『元曉疏』、『惠心略記』等の諸經論疏記をも引用してゐるが、また、説教資料のやうな珍らしい説話を多く引用してゐる。今段の終に彌陀本願釋尊の教意諸佛證誠は皆愚鈍の下智の凡夫罪惡深重の衆生をして生死を離れ報土に至らしむること眞實なる道理、この經の意に顯はれてゐる。これが淨土宗の肝心であると結んでゐるから、淨土宗系の著作だらう。



入文判擇に至つても、諸種の珍談を引用してゐる。恐らく教家資料として編輯されたものと思はれる。

各宗關係の註疏には以上の他に多數の見逃がしてならぬものもあると思ふが、それらの原本を見る機會を得なかつたのがまことに残念である。

更に本學に祕藏されるものの中、寫字臺文庫にあつたもので『阿彌陀經私考』五冊の寫本がある。著者も筆録者も不明である。その釋風から見て恐らく淨土宗西山系の學匠のものだと思はれる。きはめて平易に全文問答體として懇切に註釋してゐる。また本學眞宗學研究室所藏のものに『阿彌陀經私記』一卷がある。これも鎮西系の學匠のものだらうと思はれる。一部通讀すると、簡にして要を得たものといつてよい。蓋し、先覺の釋相を忠實に紹介したものに過ぎないといつてよい。

#### 第四章 各宗より見たる阿彌陀佛觀

此の章に於て、便宜上各宗の阿彌陀佛觀を概論したい。阿彌陀佛に關しては『無

量壽經』等の三部經を初めとし、『法華經』『悲華經』『大乘方等總持經』『賢劫經』『觀佛三昧經』『寶積經』等の諸大乘經典中に通説するところであつて、大乘の諸宗に於ては阿彌陀佛を問題としない宗派はないといつても過言ではない。もとより各宗に於ては各々その見解を異にしてゐるから、その點を概觀しよう。

##### 一 法相宗の阿彌陀佛觀

法相宗に於ては、慈恩の『義林章』三身章、及び『阿彌陀經疏』に據るに、能化の彌陀は所化の機根に隨つて佛身を示現するものとなし、即ち所化の有情は彌陀所現の佛身を増上緣として、凡聖各々識見、理解の淺深高低に隨つて佛身を變現するものであるからその所見の佛身に於て自ら麤妙を分別してゐる。即ち三賢の菩薩、二乘凡夫の類は化身の小佛身を見、四善根の菩薩は化身の大佛身を見、初地以上の菩薩は大廬舍那身と稱して大寶蓮臺に坐し、無限の妙相好を具する他受用報身佛を見らんとす。但し地前の菩薩が初地に至る時は、地前所見の變化身は隠れ、殊勝微妙なる報身佛を顯現するのであるが、兼ねては變化身をも見ることが出來ると説いてゐる。これがやがて阿彌陀觀にもあてはめられるものだとした。



## 二 三論宗の阿彌陀佛觀

三論宗にあつては、嘉祥の『觀經疏』に「一に正法佛は實相法身なり。觀經に是法界身入一切衆生と云ふ是なり。二に修成佛は觀經に説く是心作佛是なり即ち自受用報身なり。三に應化佛は他受用身をも應身中に攝す。化他の用は本法身より現起するが故に正しく酬因に非ず、故に報佛といはず應身佛とす。西方淨土の佛なり」とあるが如く、西方淨土の阿彌陀は因願酬報の佛身にあらずして、本法身より現起した所の應身佛となすやうである。

## 三 華嚴宗の阿彌陀佛觀

華嚴宗にあつては、阿彌陀佛は蓮華藏莊嚴世界の主であつて、十身具足の毘盧遮那佛と同體であり、西方淨土は世界海に屬するものだとしてゐる。その世界海といふのは、華嚴宗にては、佛土を分つて國土海と世界海の二種となす。その國土界とは不可説の果分であり、世界海は因分可説の土である。而してこの世界海に蓮華藏莊嚴世界海と、十重世界海と、無量雜類世界との三類を分ち、これを三生成佛に

配すれば、無量雜類世界は見聞生の土であり、十重世界海は解行生の土であり、蓮華藏莊嚴世界海は證入生の淨土である。故に阿彌陀佛の國土である西方淨土所屬の蓮華藏界は不可説の果分と其體を同じくする。尤も智儼の『孔目章』卷四壽命品内明往生義に依れば、次の如く、阿彌陀佛國に對して一乘三乘各別の判釋を施してある。曰く、阿彌陀佛國は一乘三乘同じからず。若し一乘に依らば、阿彌陀土は世界海に屬して攝す。何を以ての故に。近く初機を引いて信を成せしめんが爲なり。教境眞實、佛國圓融、不可説なるが故なり。若し三乘に依らば、西方淨土は是れ實報處なり。通じて四土を成す。一に法性土、二に事淨土、三に實報土、四に化淨土、化は是れ報化なり。化身の化に非ず。中に於て所有の佛及び土田、菩薩眷屬は攝論の如し」と。その一般が窺はれる。

## 四 天台宗の阿彌陀佛觀

天台宗にあつては、『維摩經玄略疏』の「一に同居の淨土を明さば、無量壽國は果報殊勝にして比喻すべきこと難しと雖、然も亦染淨凡聖同居なり。何となれば四趣なしと雖、人天あり」の文に依つて、阿彌陀佛並にその國土は應身應土となす。その



理由としては、西方淨土は具縛の凡夫の生處であり、晝夜六時の別あり、飯食經行の義あり、聲聞緣覺があり、佛亦三乗の法を説くが故であると。但し世親の『淨土論』に「究竟如虛空、廣大無邊際」とあるのは西方を讚嘆する一邊の論にして、淨土の常説定義ではないとなし、又『大乘同性經』に「淨土中に成佛するもの皆是れ報佛にして、如來の初起淨土中に在ること阿彌陀佛の如し」とあるのは、無明を斷する人の所見を叙したものであつて、同居凡夫の所見ではないとし、又『觀經』の第九觀に彌陀の身量を説きて六十萬億那由他恆河沙由旬とあるのは、圓教第七信の位に達する人の爲に別に現出せる佛身であり、又『大智度論』に「西方世界出於三界」とあるのは此娑婆三界の攝屬にあらざることを明せるものである等と他經論の文を會釋して『維摩經略疏』の應身應土説を固守してゐるやうである。但し彌陀の淨土は凡聖同居土であつても、諸佛の同居土とはその義を異にするものである。即ち諸佛の同居土は四土を具するけれども、悉く豎の四土であつて、同居土に生じて後通惑を斷じ、果報を轉じて然る後に能く上三土に入るものである。其横の義があるのは、但暫時佛の加被力に依つて見ることを得るに過ぎないものである。然るに彌陀の淨土は横豎の四土を一處に具するから、圓妙觀を修して生ずる人は、通惑を未だ

斷じ盡さないけれども、其身に於て常に實報身を拜し、實報土に居するを得るものである。この彌陀の淨土が諸佛の同居土に異なる別徳を明に發揮せられたものこそ明の藕益智旭である。彼の『梵網經玄義』及び『小經要解』に依るに、四土横豎の義は俱に斷惑に約して之を説く。豎とは同居土を出で、後に方便土に入り、方便土を出で、後また實報土等に入るものであつて、横とは則ち當處を移さずして自ら方便實報寂光の三土を感見するのである。而して諸佛の四土中、寂光土等の上三の土には横の義があるけれども、同居土に於ては大體豎の義のみあつて横の義なく、唯極樂の同居のみ横に四土を具す。是れ十方世界中に嘗てなきところであつて、全性修起の因縁、たゞ彌陀のみに局るものである。華嚴の祕藏、法華の極意、唯是れ執持名號の念佛法門に在りとしてゐる。

## 五 禪宗の阿彌陀佛觀

禪宗にあつては、禪宗は即心即佛、無言の默理を説いて心外に佛を見ず、たゞ本有圓成本來の面目を心地に修行して、自分に覺知すべしとなすものであるから、文字に拘泥せず、佛祖の心をもつて心に傳へ、直に人心を指して見性成佛するをその宗